

修して、未だ曾て面あたり女色を親、心に着せず、常に山林に於て道を修す。後に年十八にして、村に入りて乞食するに因りて、童女ありて、其の端嚴美妙なるを見て、欲心を生じて告げて言はく、我れ仁者に於て深く欲心を生ず、仁者妙行を行ふことは、正しく一切を利せんが爲のみ。若し我れ願遂げずば、恐らくは命を絶つことを致さん、即ち是れ仁の本願に違ひて、衆生を害せんと。彼の菩薩、欲の過失を種種に尋すれども、彼れ終に捨てず。所願を獲ざるを以て、因りて即ち悶絶す。時に彼親屬、念言すらく、必ず是れ夜叉なり、形貌人に異なり、我が女見て地に躡る、將に彼の精氣に奪ふにあらすやと。共に刀杖を持ちて、執縛して將に之を害せんとす。女少時にして蘇り已りて、之を見て即ち具さに父母に因縁を告ぐ。彼れ言はく、是れ女の過なり、比丘の罪に非ずと。即ち之を捨す。女又追ひ隨ふこと止まず。比丘念言すらく、若し彼れ所求を得ずば、必ず自ら命を喪ひて惡道に入らんと。遂に彼れの願に従ひて、多時に和合して、彼の欲の少しく息む時を伺ひて、法を以て勸導して、説法して彼の女を利す。深く愛敬するを以ての故に、即ち其の命に順ひて、共に梵行を修して、大法利を成す。然も此の菩薩は、但し大悲方便を以て、能く下劣を以て斯の事

(一) 隨類 所應に
隨ひて度するを云
ふ。これ前の盜戒
の場合と同じ。戒
(二) 緊那羅 人非
人と譯す。

(三) 文を廻す等
これ「當に盡形壽
まで」の文を廻し
で上へ「不妄語戒
前に置けとの意な
り、即ち「當に盡
形壽まで不妄語戒
を作すべし」と文
を作るなり。

を忍びてなり、欲貪に牽かれて非法を作すには非ず。若し大悲に由らずして、但し欲邪行の心を以て作さば、即ち是れ犯戒なり。此れは即ち是れ智方便を具するが故に爾り。(二) 隨類とは、即ち是れ前の義を指す。盜戒に同じきが故に廣く説かず、例して知るべし。經に説けるが如し。群賊(三) 緊那羅を捉へ得て施す、菩薩之を受く、此れに因りて財を得て、無量の時に施を行ふ。又美髮菩薩乞食す、女人見て悶絶す、女を護らんが爲の故に上には是れ藥又なりと疑ふと云ふ、此れに因りて菩提心を念じて衆生を捨てざるが故に菩提心を離れんことを恐れて、因りて受けて妻とす。久しくして後に勸導して、同じく道心を發す、眷屬も亦發心して天に生れしが如し。善巧方便は滅罪の行なり。

次に不妄語戒を持つこと盡形までせよ、存活すること妄語に因るとも、不妄語戒を持つべし。當に盡形壽まで(三) 文を廻して設ひ活命の因の爲の故なりとも、妄語すべからず、即ち佛菩提を欺誑するに成る。秘密主、是れを菩薩最上乘に住すと名く。若し妄語する者は、佛菩提を越ゆ。是の故に秘密主、此の法門を應に是の如く知りて、妄語の業を捨つべし、爲すべからざる所なり。是れを諸佛菩提を欺誑すと名く。秘密主、菩薩の最上乘なり、若し妄語すれば、佛菩提を越失す、秘密主、法門是の如く知り

て、實語を捨てざるべしとは、此れ第四の戒なり。活命因とは、即ち是れ種種の名利の事等なり。或は餘の飲食・衣服・囚禁・苦厄、是の如く等に因りて、もし妄語を作さば即ち身命存す、作さざれば即ち有待の形、將に存立せざらんとす、故に活命の縁と名く。菩薩は是の如くの因縁ありとも、その時に尙ほ一念も他を誑さんと欲する心を生ぜず、況や方便を起さんや。然も略して説くに、八の非聖語・八の賢聖語あり、謂はく、見ざるを見ると言ひ、聞かず・觸れず・知らざるを、聞き・觸れ・知ると言ひ、見るを見ざると言ひ、聞き・觸れ・知るを、聞かず・觸れず・知らずと言ふ、是れ八の非聖語なり。此れに反くは即ち八の賢聖語と名く。謂はく、見るを見ると言ひ、餘の三も亦爾り、見ざるを見ずと言ひ、餘の三も亦爾り、二毘尼に説けるが如し。五分の大妄語戒にあり。若し菩薩是の如く犯す者は、即ち是れ佛菩提を誘る。何を以ての故に、菩提とは即ち是れ一向實の義なり、而も今此れは乃ち妄誑の因なり、正しく彼れと相背く、故に破菩提と名く。復次に如來無量劫に修したまへる、諦誠の故に言説すべき所、人みな信受す。乃至不可思議の法の彼れが心量の所行に非ずして、難信難解なるを説きたまへども、佛は無量劫に誠實なるを以ての故に、人亦之を信す。いま菩薩と

して而も衆生を誑せば、即ち是れ彼の誑法の因縁を生じ、亦是れ菩提を破す。是の故に菩薩、此の最上大乘地の眞言の行に住して、一念も誑他の心、及び彼の種種の縁を生ずることを得ざれ。具さには律に其の相を説けるが如し。若し違犯せば、即ち是れ佛菩提を越ゆ。此れに亦隨類方便の語あるべし、文になきは略せるなり。菩薩戒の大本の中に説けるが如し。一の女人ありて父母を殺害す、此の無間の業を作し已りて、自ら念すらく、我が此の惡業を以て、決定して無間獄に入るべし、極惡已に成しぬ、更に何等の善法ありてか、來りて我れに近づかんと。此の因縁を以ての故に、更に過を改め善を修せず、但し靜然として住して、手を拱きて罪を待つ。菩薩種種に之を勸めて、懺悔修善せしむ、乃至大乘の法の中に方便あり、此の罪を滅す可しと告げ語れども、終に信受せず。菩薩大悲心を生じて、又化して婦人と作りて、彼れに投りて止宿す。因りて自ら説く、我れも亦是の如くの業を作せりと。彼の婦人自ら念すらく、餘人も亦此の事を作すことありや、我れいま伴を得たり、共に同止すべしと。是の如く多時にして、彼の化人、漸く方便を以て、共に改悔して善を行はんと欲すれども、彼れの説に従はずして、謂ひて言はく、汝必ず作さんと欲せば便ち之を作すべし、然

も我れは自ら念ふ、終に益なしと。彼の化人即ち彼の同住の中に於て、善事を行ひて漸く法利を獲ることを示す。大神通を具して、示して之を見しめて告げて言はく、我れいま善を行ふに、先の罪已に滅して、今此の法を得たり。若し法、罪を滅せずば、何に由りてか能く是の如くの事を獲んやと。彼れ希有の心を生じて言はく、彼れは我れと同じく犯せり、彼れ尙ほ能く除く、我れ何ぞ作さざらんやと。因りて與に同じく行ふ。菩薩方便を以て之を化するに、罪垢除くことを得て、漸く佛法に入る。此れは即ち是れ菩薩の慧方便の故に、能く是の如く戒を持つは、二乘世人と共なるに非ず。又僧迦吒經に説かく、一の丈夫あり、其の妻艶麗婉美にして、尤も相愛重す、後時に命過しぬ。情に於て捨つること能はずして、恒に之を負ひて行く、乃至枯れ朽つれども肯て弃てず。菩薩之を化するに得ず。因りて化して一の婦人と作り、亦一の夫を負ひて云はく、此の人は我が愛念する所なり、命終盡すれども、情に於て割つること能はず、故に恒に之を負へりと。彼れ念言すらく、此れは則ち我が伴なり、我れと事を同じくすと、因りて共に止住す。後時に菩薩、彼れを伺ひて、方便して即ち彼の二の屍を恒河の水に弃つ。婦人及び彼れ屍を覓むるに、歟ちにみな得ず。便ち歎き怨みて云

はく、我れ等之を負ふこと乃至枯れ朽つるまです、いま異伴を見て、遂に相與に愛を結びて我れ等を弃つ、當に知るべし、其の情保つべからず、鬼尙ほ此の如し、況や生存をやと。彼れ此の事を見て、戀心頓に息みて、即ち心を發して欲を厭ひ道を修す。菩薩に此の慧の方便あるが故に欺誑す、是れ惡心にして作すには非ず。

（二）彼の等「彼の像類に隨へる語言を以て諸衆生等を攝受すべし」と作るべし。蓮文向上なり。

次に龜語戒、菩薩は更細の心を以て衆生を攝すべし。復次に秘密主、不龜惡罵戒を持つべし。まさに柔夷の心を以て、諸の衆生等を攝受すべし。此の像類に隨へる語言を以て。蓮文して上に向ふ、謂 秘密主、菩薩の初行は、謂はゆる衆生を義利するなり。此の行最も先なり或は餘の菩薩、惡趣の因に住せん衆生に於て、龜語等を作すこと、類形に隨ひて語言せよ、何を以ての故に、此れ是の菩薩の初行は、衆生の爲の故に、或は菩薩、惡趣の因の衆生には、龜惡語に住すとは、此れ第五の戒なり。龜惡とは、言説する所ある、能く彼の心をして順はざらしめ、不善の心を生ぜしむるを謂ふ。或は高聲にして相を現す、謂はゆる龜鑿等なり。皆是れ毘尼に相を説けるが如し。菩薩は常に當に柔和善順にして、卒暴ならず、宣説すべき所、前の人の心を悅可せしむべし。此の因縁を以て、能く漸々に彼れを攝して、佛道に入らしむ。而るをいま違惱の因を作す、

即ち是れ四攝の方便に乖背す、故に罪を犯す。然も亦方便ありて、麁語を作す。菩薩戒の大本に云へるが如し、一人あり、常に麁語を行ふを以て常の性とす、一切能く化する者無し。菩薩化して一人と作りて、所行の峻暴躁惡なること、更に彼れに過ぐるこ
 と無量倍數なり、彼れ見已りて歡喜すらく、此の人の所行はみな我れより勝れたり、我れ當に自ら與等の者なしと謂ひき、而るに今彼れが所作の事は、我が師とするに堪へたりと。因りて請ひて言はく、汝が弟子とならんと、事を同じくすること已に久し。菩薩漸く厭離を示して、稍や柔順の行を歎じ、麁暴の事を呵す。後に自ら改め已りて、彼れを勸めて改めしむ、而も猶ほ未だ従はず。菩薩後時に、惡行を捨つることを示すを以ての故に、稍や自ら道を修して大法利を得、神通を現示す。彼れ希有の心を發して、此の人の所行は先より我れに過ぎたるすら、尙ほ能く自ら改めて此の法を獲たり、我何ぞ爲さざらんやと。又彼れを以て師となして法利に入る。即ち是れ菩薩の、慧方便を以て、麁惡を示すなり。

次に不兩舌、復次に秘密主、菩薩、不兩舌戒を持ちて、離間語を離れ、惱害語を離るべし。若し犯せば菩薩と名くるに非ず、菩薩は衆生を離間する心を生ぜず。或は餘の

(一) 毘尼 四分律
 第十一卷、十誦律
 第九卷等
 (二) 野干等 善牙
 獅子と善博虎と相
 和合して住せり、
 野干ありてその殘
 食を得て生活す、
 即ち離間語を以て
 二獸をして不和な
 らしむ。後この事
 の爲めに害せらる
 と云ふこと、四分
 律中に説けり。
 (三) 徒 徒弟なり

異方便を以て、衆生ありて、所見の處に隨ひて執着を生ずと見ば、彼の像類に隨ひて、離間語を作せ、彼れをして一道に住せしめんが爲めの故に。謂はゆる一切智道に住すとは、菩薩は離間語なく、惱亂語なし、犯せば菩薩の行に非ず、諸の衆生に於て離析の心を生ぜざれ。或は有情の、見處に隨ひて衆生に着すと見ば、彼れ類に隨ひて離間語を作して、かく衆生をして一道に住せしめよ、謂はく、一切智道に住すとは、此れ第六の戒なり。兩舌の相は、(一) 毘尼の中に具さに説けるが如し。乃至(二) 野干師子の因縁あり、云云。然も菩薩は常に無惱害行を修す、上中下の類に隨ひて、みな歡喜和合せしめて、彼れが別異の因縁を作さず。然も種種異見の衆生ありて、各所宗に着して、自ら出づること能はず、此の因縁を以て、方に大苦を受くべしと見ば、菩薩はその時に、彼れを引ききて、惡知識を捨てしめんが爲の故に、離間の語を作す。過去に外道の師あるが如きは、(三) 徒千人を領して、邪道の法を説く。菩薩、彼れ化するに堪へたる因縁ありと觀て、彼れが秘法の中に入りて、弟子と作り、久しからずして法を學ぶこと、皆その奥を盡す、慧悟なること倫に絶れたり。彼の師、此の人は我が法を傳ふることに已に畢りぬと歎尚して、乃ち徒五百を分ちて、彼れをして之を領せしむ。そ

の時に菩薩漸く方便を以て、彼の見の中に入りて、稍や之を化す。經ること久しくして、彼れ己れに於て深く信伏を生ずと知りて、漸く深法を示す。その時に五百の弟子、見心漸く正しくして慧性を成す。時に彼の師、其の法の異なるを聞きて、來りて親しく之を聞く。彼れ種種に開示するに因りて、師も亦悟解す。即時に五百人、亦菩薩を師として新法を受く、是に於て千人みな正法に入る。是の如く等の類は、即ち是れ方便を以て、彼の和合を破るなり。菩薩の行は甚だ廣し、具さに説く可からず、一を擧げて諸を例す、其れ類に隨ひて知る可し。

次に綺語戒、秘密主菩薩、不綺語戒を持つべし、彼の類の語に隨ひて、時方^七、^七和合と云ふは、^五當に不綺語戒を持つべし、彼の形類に隨ひて、言説する所あらば、時方に於て利益すべし。彼の方に此の語あらば當に説くべし、律に違はば説くべからず、^A彼の方に隨ひて相應和合するなり。出其義利とは、彼れをして義利あらしむるを謂ふ。出とは作を謂ふ、謂はく、此の義利を行ひて、方に隨ひ時に隨ひて作すなり。一切衆生をして歡喜の心得しめ、其の耳道を淨むとは、耳根淨を謂ふ。何を以ての故に、菩薩に殊異の語ありとは、謂はく、差別種種にして、他の意に隨ふ語なり。菩薩異の方便

一、七、五、八、亂脫

三、十二、亂脫

四、亂脫

六、亂脫

ありて、戲笑を以て先として、衆生をして歡喜し、佛法の中に住せしめんと欲するは、衆生の爲の故なり、^三無利の語を出すと雖も、^十生死の中に處して衆生を利益す、其は謂はく種種の備具なり。生死の流轉に處すれども、而も所着なし。^三和合して利を出し、其の一切有情をして諸心を喜悅し、耳道を淨除せしむ。何を以ての故に、殊異語の故に、ある菩薩は此の笑を以て、先づ衆生をして歡喜し、佛法の中に安住せしめ、無利語と除弃語とを出さざらんと欲す。^四是の如くの菩薩は生死に流轉すとは、此れ第七の戒なり。綺語とは、世間の談話、無利益の事を謂ふ。毘尼の中に説けるが如し。種種の王論・賊論・治生・入海・女人・治身等、或は城邑・國土の是非、世間の事を評論するなり。要を以て之を言はば、一切世間の法に順ひて、出離の因縁なきは皆是れなり。^六然も菩薩は當に時分の利に和合して語るべし。謂はゆる時とは、彼れを開導せんと欲すと雖も、然も彼れ都て未だ信入の機有らず、誠に樂み未だ發らざるに、たやすく之を説けば、彼れをして信ぜざらしむ、慢して毀謗し已りぬれば、亦化あることなし、即ち是れ非時なり。此れに反するを名けて時語とす。或は大衆闍亂^{たうらん}多人の處には、其の心靜かならず、委しく所説あれども、其の心に入らず、因りて道縁を失ふ、亦非

時なり。方とは非處を謂ふ、謂はく、彼れ正しく惡を造る時、即ち彼の所作の處に於て、爲に法を説くに、彼の方、所行の事に着するを以て、反つて背忤はじこの心を生じ、因りて彼の不善の心を生ず。亦此れに反するを隨方の語と名く。九利とは、一向に諸の不利なく、善を修せしめ、彼の情機に順ひて言を出すを謂ふ。若し菩薩是の如く行へば、能く有情をして歡喜信伏せしめ、自を益し、他を益す。彼れ聞き已りて利を得、己れも亦其の功を唐指せざるを以ての故なり。然も菩薩に殊異ありとは、異の方便を謂ふ、前に異なるを謂ふ謂はく、笑を初首とす、戲笑の如く乃至歌舞・伎樂・藝術・談論、即ち是れ前の所説の種種の世間の有なり。菩薩彼れをして歡喜せしむるを以て、既に歡喜を得ば、其れ善く順悅す。因りて其の情に慍ひて、方便化導し、其れをして佛慧に安住せしむ。無益を了知して心に着を生ぜずと雖も、然も時を觀ち、方を觀ちて、義利の故に之を作すことあり。無利を作すと雖も、然も無利を以て、彼の無利の事を除くなり。彼れ先時に惡を造るに、惡と道と反するを以て、直ちに方便を捨置して急に之を持てば、反つて更に驚き拒む。故に方便して彼れに同事して、後に即ち佛道に入らしむ、故に此の無利は即ち是れ有利の因なり、大良醫の能く毒を變じて藥とするが如し。若し是の如

(二)華嚴 六十華嚴第五十一卷、八十華嚴第六十八卷を指す。

く作さば、乃ち是れ菩薩の、流轉生死を出す因なり。±彼の聲聞の方便慧なき者の、一向に拘局して唯だ諸過を遮して、開通の行なきを以て、是の故に慧満足せざるとは同ずべからず。自ら流轉を出で、亦他をして出でしむ、故に流轉を離ると名く。(三)華嚴に善見女人を説けるが如き即ち是れなり。衆生を引攝せんと欲ほつふが爲の故に、姪女の家に生じて、五百の姪女に於て上首たり、妙麗なること倫とらに絶れ、諸の女徳を具して、六十四の態、一切妙巧の方便、皆悉く具足せり。夫れ女人は、本性善く人の心を攝す、而して此の女人は又種として具せざることなし、是の因縁を以て之に趣く者衆し。菩薩先づ方便力を以ての故に、彼の邪行の因縁に同じて、彼れをして極めて愛念を生じ、言語する所あれば、人として違ふ者なからしめ、彼の情機を觀て、縁に隨ひて開導して、欲の實性を見しむ、即ち此の門より佛慧に入る。時に彼の諸人、彼れを信愛するを以ての故に、即ち能く諦かきかに其の言を受く。是の因縁を以て、利する所無量なり、非利の中にありと雖も、爲に能く此の大利を成す、即ち是れ菩薩の、慧方便を具する持戒なり。經の中に此の類甚だ廣し。(三)菩提三藏の云はく、漫怛羅は是れ密語なり、四ば即ち相簡別す、或は人ありて彼の別語を見て云はく、往(三)菩提三藏の云はく、漫怛羅は是れ密語なり、四きて他の密語を于すこと勿れと、此れを漫怛羅と名く

(三)菩提三藏 金剛智三藏なり。

復次に秘密主菩薩、不貪戒を持つべし、他物を受用する中に於て、染思を起さざれ、何を以ての故に、菩薩は應に常に無着の心を作すべし、菩薩若し是の心あらば、彼れ一切智に於て力なし。力なきは謂はく、退息するなり。斯の法に由るが故に、一切智に於て、力なくして一邊に住す、即ち不具足の義なり。又秘密主菩薩、歡喜を發して是の如くの心を生ずべし、此れも亦同じ。我が作すべき所は、今自然にして生ず、善き哉、極めて善し、數數に異の方便を修して、彼の諸の衆生をして、資財を損失せしめざれとは、不貪戒を持つなり。復次に秘密主、不貪戒を持つべし、彼の他の受用の中の、他物の中に於て思染を起さざれ、何を以ての故に、菩薩は受心なし、菩薩に思染の心あれば、彼の一切智門に力なくして、一邊なり。亦秘密主、菩薩は歡喜を起すべし、是の如く及び此の心を發すべし、我が作すべきが如く、彼れ自然にして生ず、彼れ善き哉、極めて善き哉、數數に歡喜せしめて、彼の諸の衆生をして、資財を損失せしめずとは、此れ第八の戒なり。前には已に身口の戒を明し已りぬ、今乃ち次に一向心戒を明す、此れは是れ心より起す所の貪なり。若し菩薩、他の種種の勝事あるを見る、謂はく、色力財富の輩なり、無量の門あれども、菩薩は思念を生ぜず、彼の

人は是の如くの事あり、我れは之なしと。是の因縁を以て企羨を生じて、欲願し貪着躁求する所の心あるは、皆亦此の戒の辯なり。此れを念ずるに由るが故に、又當に受惱の因を生ずべし、故に爲さず。菩薩は是の如くすべからず、若しあらば力なしとは、譬へば人ありて、無量の方便藝能を具すれども、時ありて病患すれば、則ち能く爲す所なきが如く、菩薩も亦爾り。若し貪愛を以て其の心を病ましむれば、菩提心の無量の力勢をして、皆能く力なからしむ。一切智とは、即ち是れ萬德皆備はりて、缺減する所なき義なり。此の心を起すに由りて、此の萬德無缺の體をして、支分具せざらしむ。是の故に一切智門に於て、即ち是れ力なきなり。然も菩薩は、他の種種の己れより勝れたる事あるを見ては、當に自ら慶悦して、是の念を作すべし、我れもと大誓願を立つることは、一切衆生の爲の故なり、菩薩の道を行ふこと、皆萬德を兼ね具せしめんとなり、若し此れ等の乏しき所あらば、我れ尙ほ身命を惜まず、難行苦行して之を利樂せんと欲す、而るを今自ら能く成辦す、即ち是れ我が大利なり、誠に歡慶す可しと。菩薩は此れを以て自ら其の心を安慰す、我が作すべき所、自然に至るが故に、歡喜するなり。我れ衆生の爲の故に、尙ほ無數の精進を以て、賢瓶・劫樹の自然の用

(一) 俱流孫佛過
去七佛の中第四佛
なり。

四〇八
を求め、彼の窮賈の業を破らんと欲す、何に況や彼れ能く自ら致す、更に之を損じて以て自ら己れを利せんや、此の悟心を以て、復た着を生ぜず、即ち持戒の相なり。長阿含の中に説けるが如し。過去の(一)俱流孫佛の時、波羅奈國に王あり、思利或は思益と云ふと名く、常に一切を利益せんと思ふを以ての故に、以て名とす。時に五百の大臣あり、王に白して言さく、いま國土極めて豊樂なり、人の心盈滿して難を思ふ心なし、恐らくは以て敵に應ず可からず、王宜しく事を以て之に授けて、以て勞苦を習はしむべし、則ち犯難に堪へて、王土を庇衛せんと。時に思益王、心甚だ慈忍にして、是の念を作す、我れ云何が非時の事を以て人に加へんや、我が本心に乖けり、此の理なしと。時に群臣、王の正意を知りて、遂にまた言はず。帝釋之を知りて、是の念を作す、此の王の所行は、乃ち菩薩の道なり、未だ知らず、堅固なりや否や、我れ之を試むべしと。因りて隣國の王長手に告げて、其れをして彼れを伐たしむ。此の長手王の王たる所を、亦是五支城と名く、其の統攝の境にただ五城あるを以てなり、是れ小國なり。彼帝釋の言を聞きて、是の念を作す、我れ聞く、婦人の仁思は遠きに及ばずと、今此の王の爲す所は、仁愛に過ぎて猶ほ婦人の如きのみ、今我れ兼て之を有せん

(二) 四兵 象兵、
馬兵、車兵、歩兵
なり。

と。尋いで(一)四兵を興して、往きて其の國を伐つ。諸の大臣、思益王に白して言さく、先に已に忠諫せしかども、納れられざりき、今の人は武を習はず、又其の備なし、難を出でんこと虞おぼらず、はた云何せんやと。王即ち思惟して之に答へて言はく、彼れ欲する所の者は、國土・人民・及び府庫のみ、我れ與に争はざれば、則ち又人に於て害なからん、卿等憂ふること勿れと。尋いで身を挺んで出で、深山の中に往きて梵行を修す。時に長手王は、亦に血ぬるの功なくして、其の國を有す。多時を経歴して、思益王を購ひ求むれども致すこと能はず。時に南方に梵行の婆羅門あり、先業を以ての故に、極めてこれ賈乏にして、以て父母師長を奉養することなし。思益王の好みて惠施を行ふを聞くが故に、往きて之に投りて、自ら資給せんことを求む。彼の國に往きて山林の間に至るに、遇たたま故王の修道せる所に到りぬ。時に思益王は意に先だちて問訊し、召して安處せしめ、其の食物を給して、勞苦を温たね問ふ、今何れの所にか往くやと。彼の梵行者、具さに所由を答ふ。その時に故王聞き已りて、愍然として悦ばず、我れ嘗て國を享けし時は、勢力自在にして、能く意に隨ひて人に給しき、今は身を罄つし國を失へり、何ぞ能く彼れを滿てしめんと。是れを思惟し已りて、因り

て婆羅門に告ぐ、思益王は即ち是れ我れなり、今已に國を失へり、故に此に在りと。時に婆羅門悶絶することや久しくして、念言すらく、我れ薄福の故に、遠きより求めて所得あらんことを冀ふ、而してまた邂逅せり、豈に命に非ずやと。時に王慰め諭すらく、汝大いに憂ふること勿れ、我れ方便して致す可きことあり、彼の王、我れは是れ怨敵なるを以ての故に、常に購ひ求めらる、若し人彼れが首を獲ば、重く賞賜を加へんと、汝今我が首を以て往かば、必ず大いに酬賜せられんと。彼れ答へて言はく、我れは淨行の者なり、云何が人を殺さん、甚だ不可なりと。王の言はく、若し爾らばただ繩を以て我れに繋けて往け、理に於て失なしと。時に彼れ即ち繋けて王の門に至る。その時に舊臣等見て、皆共に婆羅門を嫌責す、汝は淨行の者なり、募に應じて此の賢王を害して、以て自利を求めざれ、深く非道なり、淨法を破りて何の道かあらんと。彼れ即ち具さに言はく、我が咎に非ず、是れは此れ大王、菩薩の道を行ひて、我れをして之を爲さしむるのみと。諸臣尋いて入りて王に白す。王卒かに聞きて大いに驚き、以爲へらく、來りて其の國を奪はんと。始末を説くを聞くに及びて、心に愧伏を生ず。是の如く菩薩の道を行ふ者に於て、而も我れ其の國を奪ふ、何を以てか人に長

として、天下に王たらんと。因りて思益王に告ぐ、本位に復りて自在に施を行ひ、萬人を利安す可し、我れ當に舊國に反りて、各其の所を復して、相侵害することなかるべしと。その時に二國好みを交へて、また怨敵の患なし。是の如く等は本生經に當に廣く之を説けり。此れ即ち不貪の因縁なり。

一、六、二、亂脫

九、三、十一、亂脫

次に不瞋戒^一、秘密主菩薩、不瞋戒を持つべし。^二復次に秘密主菩薩、不瞋戒を持つべし、彼れ一切に遍じて、常に當に安忍して、瞋と喜とに著せず、其の心平等にして、彼れ友の如く怨を等しくして轉ずべし。何を以ての故に、菩薩は惡意を憶念すべからず。謂はく、功德の身に在るを、三摩耶縛^{サマヤバ}多^ダと名く、律の中に大徳存念と云ふ、意亦同じ。^三所以は何にとならば、菩薩は本性淨なるを以ての故に、^四上の本性は是れ性得の戒なり、下に心と云ふは、心より變現する所の法を謂ふ。本性の中に於て、常に清淨なるが故に。^五是の故に菩薩は應に不瞋戒を持つべし。彼れ一切に遍じて忍ぶこと多し、常に喜と瞋とに着せず、平等等心にして、彼れ友の如く怨を等しくして轉ず、何を以ての故に、菩薩は此れ意に惡を具するに非ず。是を以ての故に、菩薩は本性清淨の心なり、^六是の故に秘密主、不瞋戒を持つべしとは、此れ第九なり。^七瞋と

四、七、亂脫

五、八、亂脫

は、一切衆生に於て害心を起すを謂ふ。不饒益の行は心よりして起る。此れを持つ所
 以は、若し菩薩、人ありて來りて、種種に害を加へ、乃至支分を斷截すとも、尙ほ彼
 れを害する心を生ぜず、而るを況や此れより輕きをや。若し爾らざるは菩薩に非ず。
 一切處に遍じて、大忍を行ふべし。若し他の種種に害を加へん時は、應に自ら念ずべ
 し、我れ先世の無明の因縁を以て、此の有患の身を生ず、又無量世よりこのかた、常
 に他を惱ますが故に、今則ち業熟して斯の報を受く、何ぞ前の人に預けて之を怨み咎
 めんと、是の如く種種に正觀すべし。又念ずべし、此の身は縁より生じて自性あること
 なく、我人あることなし、誰れか害し、誰れか受けんと、此れを以て實相を觀じて、
 彼れを害する心を生ぜざれ。此れ是の瞋忿の念は、即ち是れ衆惡の具なり。能く是の
 如く歡喜するを以ての故に、心常に歡悅して善寂慈忍なり、我人の諸法に着せずし
 て、常に平等なり。此の平等とは、即ち是れ怨親不二なり、有益無益輕重の類、一切平
 等にして、心に増減なし。心を生じて諸の惡具を造らず、常に饒益利他の行を行ふ。
 等しく世間を觀ること、猶ほ一子の如し。此の菩薩正しく實相を觀じて、此の心の本
 性清淨を照了するを以ての故に。十二經に説けるが如し。過去に南方に王あり、名け

十 亂脫

十二 亂脫
經第一。賢愚因緣

て師子と曰ふ、城をば豊樂と名く。正法を以て國を埋めて人を害せず、然も王國の法
 を以ての故に、城を出でて狡獵けうれつして威武を示現す、人を害する意なしと雖も、國土を
 護り萬人を安んぜんが爲の故に、隣國をして德に懷け威を畏れしめんと欲すればな
 り。時に王、狡獵するに、奔れる鹿あるを見て、自ら馳せ逐ひて、山を絶り險を履み
 て、要かます之に及ばしむ。害心なきを以ての故に、既に及びぬれば、ただ其の角に鞭う
 つのみにして、尋いで即ち放捨す。何を以ての故に、武藝を示して萬人を威さんと欲
 するが故なり。既に深山の人なき地に入りて、侍從かま速はやばず、乏つかれて山中に息やすむ。母師
 子あり、王の形貌の人に異なるを見て、欲心を生ず。因りて來りて之に逼り、欲相を
 示現す。王は彼れを畏るゝが故に、尋いで即ち和合す。時に劫初には獸等も亦人の言
 を解す、然して女物の性は、若し慧ある者は、胎を受くる時則ち能く了知す。因りて
 王に告げて言はく、我れ已に王の胤を懷めり、後に若し誕生することあらば、當に云
 何がすべきと。王手に所持せる印を以て、之を留め遺して言はく、若し子を生まば、
 此れを繋けて我が門の側に置くべしと。後に既に兒を生む、體貌は人に類して、甚だ
 猛毅なり、獸の性を兼ねるを以ての故なり。その母、先約の如く、夜に城を逾えて、

王の門の側に置きて去る。明日にこんじん關人之を見て、尤も恠心を生ず、云何が人に似てまた少しき異なる、我れ當に王に白すべしと。白し已りて、王黙して之を念じて、以て人に告げず。因りて勅して己が子となさしめ、字を師子善奴と曰ふ。王後に國の政を厭ひて、因りて國を攝めしむ。本性なるを以ての故に、好みて鮮肉を食す。ある時急に厨膳を求む、膳夫肉を求むるに未だ至らず。遇たたま新死の小兒あり、即ち以て食に爲りて之を進む、云云。賢愚經・智度論に説けるが如し。乃至日日に人の肉を求めしむるに、已に小兒を食ふこと、數五百に逾え、城中共に相告げて語らく、必ず夜叉ありて國に入れるならん、凡そ諸の小兒は當に之を謹み護るべしと。日未だ暮に及ばざるに、みな持ちて室に入り、守護すること甚だ厳しくす。膳人之を求むれども得ず。又大臣等の家に往きて之を取る、又五百を失ふ。後にある時、死したる小兒を持てるに、臂劍その人の手の上にあり。見る人之を見識して、因りて執へ縛りて執事の者に詣る。此の人小兒を盗めり、當に知るべし、前後に失ふ所は、必ず是れ此の人なりと。因りて彼れ首伏して乃ち云はく、王の咎なり、我れに非ずと。群臣以て父の王に白す。今太子猶ほ獸の性あり、獸性をば主となす可からず、願はくは王自ら國を理めた

まへと。王の言はく、我已に灌頂して、彼れに位を授けたり、云何が之を奪はんと、所請に従はず。群臣遂に謀りて之を害せんと欲す。彼れ因りて利刀を持ちて遁れて山の中に入る。初には死屍を取りて焚きて之を食ひ、後には漸く人を食ふ。乃至王子五百を執へて、常に肉を求めて之を飼ひ、漸く取りて食ふ。時に國人、其の弟を立てて王とし、名けて善奴とす。人を慈しみ、惠利して正法を以て化し理む。後に四梵行者あり、來りて善法を上る、王念言すらく、此の人は我れを利用すること少からず、當に後に之を報すべし、未だ彼れに與ふるに及ばず、出でて羽獵せんと。群臣諫めて言はく、獸王近く山中にあり、或は能く害をなさん、王出づること勿れと。王念言すらく、我れは一切を利せんと欲す、其の身を愛まず、今若し我れを取りて食はば、乃ち吾が本願満たんと。遂に出でて林中に至る。彼の兄獸王、弟の出づるを聞くが故に、即ち來りて之を取る。猛健の故に、諸の姦女等皆悉く散り走りて、其れが爲に執へられ、乃至悲泣する等、云云。二 智論に説けるが如し。未だ梵行者に報せざるの意を以て、與に共に約して之を放す。王の言はく、汝の火未だ盡きざるに、當に必ず還り到るべしと。彼れ先づ薪を焚きて煙の盡くるを待彼れ念ふらく、何の法を以ての故にか、乃ち能

く身命を惜まずして、斯に來り赴くと。因りて之に問ふ。彼れ即ち不殺行等を歎じて、法の如く廣く説く。彼れ猛惡なりと雖も、慧性ありて、聞きて即ち悟解し、未曾有なることを得て、念言すらく、彼れは即ち我が師なり、何の願をか欲求すると。王の言はく、汝いま林野の中にありて、猶ほ猛獸の如し、何か能く願を満てんやと。答へて言はく、我れ師の恩を念ずるを以ての故に、要す報する所あらん、必ず之を説くべしと。王の言はく、若し願を求めば、我が本懷は、唯だ不殺あるのみ、所願は此れにあるのみと。彼れ即ち之を許して、命を害せじと誓ふ。又五百の王子を放して善法を修す。放し已りて王と同じく歸らしむ。王は彼れ已に善行を行ふと知りて、また立てて王として、正法を以て世を化せしめ、自ら出家す。當に知るべし、菩薩は是の如くの怖畏の中に於ても、尙ほ瞋を生ぜずして、彼れに利益の行を作さしむ、況や餘の事をや。是の如きは本生等の經の中に、當に廣く之を説くべし。

第十に邪見戒、復次に秘密主菩薩、當に邪見を捨離して正見に住し、當來世を觀じて、怖畏を生ぜずべし。當に害なく、是れ隨煩惱なり、東を問へば西を答へ、西を問へば東と云ふ者なり。之を檢べ問へ。曲なく、諂なく、其の心端直にして、佛法僧に於

て、其の心決定すべし。決定とは、乃至三寶に歸命するを謂ふ。是の故に秘密主、邪見を最も極大の過とす、能く菩薩の一切の善根を斷ち、一切の諸の不善法の母なり。悉曇の字母の能く諸字を生ずるが如く、邪見も亦爾り、能く一切の不善を生ず。是の故に秘密主、下喜笑の因縁に至るまで乃ち邪見の心を起さざるべしとは、復次に秘密主、菩薩は邪見を捨離し、彼れ正見にして他世を見よ、害もなく、曲もなく、幻もなく、端直にして佛法僧に於て、心性決定せり。是の故に秘密主、邪見を離るべし、諸過として、菩薩の一切の善根を斷轉すべし。母と等し。是の如くの一切は、是れ不善の諸法なり。是の故に秘密主、乃至戲笑觀看にも、亦邪見を起さずとは、此れ第十の戒相なり、經に持邪見戒とは、邪見は是れ不善の本なり、謂はく、此の邪見を害して戒を持つが故に、持邪見戒と云ふなり。承上の九戒も亦此れに例して知る可し。持不殺戒と言ふべきを、乃ち持殺戒と云ふは、亦此れに准じて説くなり。邪見とは、謂はく、各各に其の本法の中に於て、即ち理を見ること不正にして、邪見に順ふもの皆是れなり。此れは是れ三世の善を害する根本なり。謂はく、過去の行業に由りて、今世の五陰依止の果あり。また今世の行業に由りて、未來の果報あり。先づ此の因縁の法を了

(二) 四沙門果、預流、一來、不還、阿羅漢の四果なり。

するに由るが故に、無常無我等の門に入ることを得、此の無常無我の智より、法空の如實相に入ることを得。當に知るべし、此の世間の正因果を離れて、外に別に正見正慧なし。若し無果無因と謂はば、即ち三寶四諦の法を壞る。三寶四諦の法を壞るを以ての故に、(一) 四沙門果等の一切の聖法、及び世出世の善法なし。いま盡く此の事を撥無するは、即ち是れ外道の宗計なり。當に正見に住すべしとは、謂はく、即ち前の非に翻ず、決定して正しく因果諦實の法を信するなり。諦とは、即ち是れ如來眞實の句なり、若し此れを誘ふは、即ち是れ一切の善を害するなり。無害の害とは、害は謂はく、煩惱の支分なり、此れに由るが故に、能く一切の善を障へらる、一切の善を障ふるが故に害と名く。次に之を轉釋せば、云何が無害とならば、謂はく、無曲なり。曲は即ち邪見なり。猶ほ蛇の未だ竹筒に入らざるは、所行屈曲するが如し、見心も亦爾り、未だ諸法實相の道の中に入らざれば、則ち曲りて正しからず。次に又轉釋す、云何が無曲とならば、謂はく、幻等と同じ。此の心の實相を觀するに、緣より生じて、猶ほ幻の如し。其の實に達するを以ての故に、戲笑を離る。戲笑を離るとは、即ち是れ無幻なり。若し此の如くならば、即ち是れ端直の心に住して、三寶の境界に於て、心に常に決定す。

(三) 三十七品、三十七道品なり。

實相端直の道に入るを以ての故に、即ち是れ三寶の中に於て、常に決定の性を得。是の故に諸菩薩を勸めて、此の諸過の根本を離れしむ。不善は謂はゆる能く一切の善法を害する根本なるを以てなり。是を以ての故に、菩薩、戒を持つには、當に此の過惡を離るべし。轉とは、惡を徒して善を爲すを謂ふ、經に説けるが如し。若し無明轉ずれば、即ち變じて明となる。いま邪見も亦是の如し。擧體即ち是れ慧性なり、いはく、若し轉じて端直ならしむるは、即ち是れ正見なり。聲聞の諸の煩惱を厭ひて、別に聖法を求むるとは同じからず。不善も亦爾り、此の善性を轉じて不善とす、水を結びて氷となすに、別の性なきが如し。母等とは、母は是れ能生の義なり。言はく、邪見によりて能く一切の不善の法を生ずること、猶ほ母の如し。是の義を以ての故に、菩薩は乃至戲笑觀看にも、亦邪見を生ぜず。要を擧げて之を言はば、一念も此の邪見の戒を犯す心を生ぜず、況やまた多をや。聲聞經の中の如きは、戲笑語等は、自ら學處を犯さず。此れは則ち爾らず、乃至戲笑等の中に於ても、邪見等の事を作すは、亦不可なり、而るを況や故思の業をや。然も菩薩に慧方便あるが故に、即ち能く諸見に於て動かされずして、(二) 三十七品を修し、邪相に即して正相に入る。何を以ての故に、

衆生は無始よりこのかた、多く此の法を習ふを以て、卒かに正となり難し。彼の良醫の先づ其の事業に同じて、後に彼の權を奪ふが如し、(二)涅槃等に説けるが如し。又菩薩藏本生の中に説けるが如し。むかし過去に城あり、波羅奈ハラナと名く、王をば梵施と名く、然も此れ乃ち久遠劫の事なり。今の城の名は、即ち是れ彼の先舊の地なり。當に知るべし、世界の中に、數數舊地に還りて、本名を得。然も近く波羅奈と曰ひ、王を亦梵施と名く、數數古と名を同じくす。時に彼の王の大臣の婆羅門、一子を生めり、其の子の生るる時に、空中の四方の雲の色、青黃赤白なり、各一方に隨ひて彩綯彌布せり、乃至閻浮提に逼じて、微雨を降らす。凡そ婆羅門の法は、若し子を生む時には、必ず天仙聖智の人を請ひて、先づ相を觀て爲に名を制せしむ。時に大臣、一の仙を求め得て、其の子を觀しむ。仙の問はく、是の子の生れし時、何の瑞相かありし、當に此れに依りて名を制すべしと。父、前の事を以て之に對ふ。仙人の曰はく、我が韋陀典キダの中には、若し生るる時此の相ある者は、必ず(三)四韋陀典に通じて法澤を流演し、四方に布くと、因りて名けて慶雲とす。然も大臣の種族として、四韋陀典を習ふ、是れ(三)摩納婆マナバの宗なり。故に本宗に依りて、摩納婆と號す。此の童子年漸く成立

(二) 四韋陀典
ア、サーマ、ヤジ
ユル、アタルベの
四聖典なり。
(三) 摩納婆 毘紐
天外道の部類なり
勝我と稱すべし。

して、其の業を傳習す。凡そ四明の宗旨、洞曉せざることなし。是の念を作す、唯だ解する故に義利を獲るのみにあらずして、當に思擇して之を行ふべし、此の文の上下の宗旨を尋ね究むるに、當に何の法に依りてか出離することを得べきと。所以は何にとならば、此の童子は宿ホカ徳本を殖えて、久しく慧性を資くるを以ての故に、異見の宗に生ると雖も、而も能く自ら此の覺悟の心を生ずるなり。然も一一に經宗を尋ね究むるに、但し梵天に生じて出世の道なし。父に白して言さく、今習ふ所の中に、未だ出世の道有らず、更に何の法ありてか増上を爲すと。父言はく、我れ祖宗より相承して、唯だ此の法のみ最も妙なり、又是れ梵王の所説なり、たゞ遵行すべし、何ぞ能く更に勝法を求めんやと。子また念言すらく、いま所學未だ竟へず、云何が懈怠せん、必ず當に更に勝慧を求むべしと。父言はく、我れ聞く、雪山の中に大仙人あり、四韋陀の外に於て、別に深義を決擇することあり、計磔婆サハカ仙此に問答隨心と名づくと名く、即ち此の教を以ての故に、此の仙を號して計磔婆仙とすと。我れ今當に往きて、彼れに問ふべし。父言はく、此の仙の所住は、嶮絶にして人迹の至る所に非ず、云何が能く至らんやと。時に子は去る心息まずして、尋いて即ち彼れに詣る。時に諸天神、此

の童子は必ず能く衆人を利益すべきを以て、因りて共に加持して、遂に仙の所に達らしむ。彼の仙、此の容貌奇特にして、人に過ぎたるの表あるを見て、先づ意を問訊し、彼れを近づけて坐しぬ。時に彼の仙に、五千の仙人あり、而も上首として、常に深法を演ぶ。即ち童子に問ふ、何に由りてか此に至ると。童子具さに前の事を述べ、因りて大仙に白さく、我れ人間に於て、此の四典を學ぶ、恐らくは僻解ありて、本旨に合はざらん、請ふ仙、敷述したまへ、唯だ大仙、印許したまへと。時に即ち廣く所解を陳ぶ。大仙歎じて言はく、此の童子は、慧悟人に過ぎたり、我が解する所は、及ぶこと能はざる所なり。然も童子の云ふ所の出世の道とは、我れ親しく梵王に従ひて之を聞く、大仙ありて當に世に出づべし、一切智者見者と號せん、唯だ斯の人のみ能く斯の法を演べんと、我れ等が志の中の及ぶ所に非ず。又所解の分別の旨に隨ひて、具さに之を教授す。時に童子、先世の善根を以て、今一切智の名を聞きて、未曾有なることを得、深く師恩を荷ふに因りて、之を報ぜんとな欲す。然も梵志の師に報ずる法は、鹿皮の衣の、黄を以て梵繩とすると、及び五百の金錢とを須ゆ。念じ已りて之を尋ね求めんと欲す。南方に王あり、當に立つべきに、威徳を示して灌頂の位を

(二) 然燈佛
 第二僧祇劫
 此佛に遇ひ
 供養す此佛
 與へ玉ふ

受けんと欲して、廣く梵行者に施すと聞きて、彼に於て之を求めんと欲す。然も彼に先に梵志等あり、王をして羊馬人各千を備へしめ、殺して以て威を示し、用て灌頂をなして、名稱遠く聞ゆることを獲んと冀ふ。童子後に至る。時に王、彼の童子の名を聞きて大いに歡喜す、我れ將に立たんとするに、此の賢人を感ずること大吉祥なりと。即ち引きて上賓として、共に儀法を定めしむ。童子諸の婆羅門を召して、一一に究め問ふ、今此の殺生の祠は、何の文據にか出てたると、研覈苦至するに、彼れ並びに理に屈す。因りて王に告げて言はく、此の灌頂の法は眞道に非ず。王一日の中に於て、四方の城門に於て、一切の供具を辦具して、來り求むる者に隨ひて、悉く以て之を惠む可し、其の福無量なり、名も亦遠く布かんと。王も亦先より善根ありて、聞きて即ち悟解し、敬ひて其の教に従ひて、厚く之が爲に禮す。童子はただ五百の金錢、及び鹿皮の繩のみを取りて、直ちに去りぬ。中路に寶定城此の城は捷駄羅の界に近しに至る、王をば軍勝と名く。軍戰に必ず勝つを以て然燈佛初めて世に出でたまふを以て、城邑を嚴飾して、方に之を迎へんと欲して、衢路を潔清して種種に花香を布くこと、特に常の日に異なり。童子見已りて人に問ふ、何が故にか此の如くなる、我が至るを以ての故とやせ

ん、他の縁ありとやせんと。時に童子の名遠く布き、所在に厚く城中の人報へて云はく、佛の世に出づるあり、名けて然燈と曰ふ、王之を迎へんと欲するのみと。童子、佛の名を聞きて、豁然として大いに喜ぶ。今此の名號は己が典に出過せり、はた大仙の所説の者に非ずやと。因りて所得の物を用て、供物を求め、往きて佛に獻せんと欲す。時に天魔、彼の心の大なるを以ての故に、無量の衆生を引きて、己が界を出過せんことを恐れて、一切の人を蔽して、買ふ可き物あることなからしむ。時に女人あり、先の福を以て、童子と久遠の因縁あるが故に、魔も蔽すこと能はず。童子従ひて花を買はんと求む、答へて曰はく、我れ佛に獻せんと欲す、たとひ一花を百の金錢を以てすとも、亦賣らざる所なりと。童子言はく、汝已に定めて賣らば、即ち百錢を以て一花を買ひ、乃至五莖に五百の金錢を用ひんと。女人即ち要ひて言はく、我れ汝に與へじ、汝若し世世に能く我が夫とならば、乃ち得可きのみと。童子深く念すらく、女人は菩薩の道を妨ぐ、我れ寧ろ買はじと。尋いて置きて去らんと欲す。女言はく、我れ要す世世に眞道を助成して、終に相礙へじと、云云、經律に説けるが如し。及び花を持ちて佛の所に至り、散じて以て供養するに、空中に於て蓋となりて、佛に隨ひて城に入

(二) 極根斷
は十善を斷ずるも
のなるが故に極
斷と云ふ。彼十根
を斷ずるは惠戒な
る故に極斷を斷ず
と云ふ。

る。童子は未曾有を得、佛は爲に法を説きたまふに、深く法利を得たり。又道路の泥濘の處に於て、鹿皮の衣を布きて、佛をして之を踏ましめんと欲す。魔王五度之を擲げ去つて告げて言はく、童子、汝の所行は眞道なり、一切の世間に汝最も上たり、云何が自ら眞道を棄てて、沙門の邪道の法を學ぶやと。彼れ終に以て意に介し念とせず。前に狭道ありて泥濘なり、佛必ず中より過ぎたまふべきに由りて、因りて至る時を候ひて、衣及び髪を布きて以て之を掩ひ、佛をして踏みて過らしむ。次に弟子佛に隨ひて過らんと欲す。佛言はく、止めよ、止めよ、此れは大心の者なり、汝等之を踏まば、汝の大福を壞らんと。佛因りて頂を案じて、其れに記を授けたまふ。その時に當りて、即ち十方各の如恒河沙の佛國を見るに、皆其の頂を案じて、爲に授記す、即ち菩薩の第九地に登るなり。時に無量百千の天人衆、此の大士の因縁を以て、みな邪見を捨てて正道に入る。此れ即ち菩薩の慧方便を示すが故に、先づ邪道に入ることを示して、彼の宗旨を盡して、方にまた廻心す。故に能く彼の無量の同類を引く、故に慧方便具足と名く。當に更に經を檢べて具さに之を説くべし。

爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊、願はくは彼の十善道戒の、(二)極

(一) 多羅 樹名なり。

(二) 是等 以下五戒を説く。

(三) 秘密等 在家の菩薩の五戒を説く。
(四) 居家 在家の人を指す。

(五) 四攝法 布施、愛語、利行、同事なり。

(六) 學處 慧學なり。

根を斷つことばを説きたまへとは、謂はく、草を斷つが如きは、斷つと雖も更に生ず、若しことば多羅を斷たば、即ち更に生ぜざるは、極斷と名く。此れは戒の功力を説くなり。云何が菩薩、王位自在にして、宮殿に處し、父母親戚圍繞して、天の妙樂を受けて過を生ぜざると。

(一) 是の如く説き已りて、佛執金剛秘密主に告げて言はく、善い哉、善い哉、秘密主、應に諦かに聽き、極めて善く作意すべし、吾れ當に菩薩の毗奈耶、決定善巧を演説すべし。秘密主、まさに知るべし、彼れ二種の菩薩あり、云何が二とする、謂はゆる在家と出家となり。(二) 秘密主、彼の(三) 居家の菩薩は五戒の句を受け、王位自在にして、種種の方便道を以て、彼の時方に隨ひて自在に攝受方時に隨ひて自在に之を作す、邪見を示して大邪を治するが如き等なり一切智を求む。謂はゆる方便を具足して、舞伎・天祠主等の、種種の藝處を示現し、彼彼の方便に隨ひて、(五) 四攝法を以て、衆生を攝取し、彼れをして無上菩提を志求せしむ。彼れ不殺生命戒・不與取・妄語・欲邪行・邪見等を持つ、是れを在家の五戒の句と名く。菩薩、所説の如くの善戒を受持して、應に善く修學すべし、應に信心を具して、往昔の諸佛の(六) 學處に隨順すべしとは、謂はく、昔の諸佛に隨ひて學するな

一、三、二、四、亂脫
(一) 無爲戒 根本
性戒なり修成に非
ず。

り。(二) 有爲に住して、慧方便を具するに由りて、能く如來の無上の吉祥の(一) 無爲の戒蘊を得、は、(二) 學とは慧學なり、故に得なり。(三) 已に十戒の相を説き意りぬ。金剛手、佛に白さく、願はくは十善業道戒の極根斷を説きたまへ、云何が菩薩、王位自在にして、宮室男女親屬父母圍繞して、天の妙樂を受けて、過を生ぜざらんとは、此の中の間の意は、更に何なる法ありてか、能く此の戒の根を害して、善法をして生ぜざらしむるとなり。極とは即ち是れ具さに一切の善を害するなり。問の意は言はく、云何が世法の中に處して、爲に汚されざらんやと、然も菩薩は衆生の爲の故に、常に須らく世間にあるべし、必ず須らく戒方便ありて、其の善を害せざらしむべし。佛歎じ已りて、諦聽せしめ、即ち説きて言はく、菩薩の調伏は、決定善巧なりとは、決定とは、一切の惡自ら害せられ、一切の善みな彼れに由りて生ずるを謂ふ、即ち是れ自性の善なり。菩薩に二あり、在家と出家となり。若し居家ならば、五句の戒を受くとは、前の如く王位自在にして、菩薩の道を行ふに、此の五事を以てすることを妨げず。種種の方便道を以て、時方に於て攝すること自在にして、一切智を求む、謂はく方便を具足して、舞伎天祠等の種種の藝處を示現して、彼の方便に隨ひて、衆生をば四攝法を

(二) 即ち等五戒は在家出家に通ずる戒なれども正しく所持する菩薩の所持なり。

以て攝取すとは、經文なり。時は謂はく、時非時を觀じて、待たず失せざることを、海潮の如し。方は謂はく、方處に隨ひて、何の法を以てか道に入るべきと、世界悉檀に順ふなり。方便の慧具足するを以ての故に、種種に自在に施爲して、衆生を攝して一切智に置くなり。彼の無方便の五戒の、但し自ら拘局して自護のみを志求するとは同じからず。利益を觀じて一切を攝するを以ての故に、種種の道に入る、乃至彼れと我れと天祠に入り、示同して彼の所學を學び、漸く正見を以て之を引く。是の如く等の方便無邊なるを以ての故に、利する所限りなし。即ち四攝の法を以て、佛道に引入す。四攝は寶雲菩薩藏等の中に、具さに説けるが如し。若し在家の菩薩は、是の如く五戒を持つ、謂はく、不殺盜婬妄邪見なり、此の五が中に於て、方便を以て之を持つ、其餘は一切無礙にして、務めて佛道に引入せしむるのみ。此の五戒を以て首として、能く一切智地の如來の位を成す、故に無漏の性戒成ることを得と云ふ。此れに住して慧の方便を具するに由りて、是れを學處とす。此れは本性の萬德みな具足せる戒なり、即ち是れ無爲戒なり。更に重ねて之を釋せん。前と異ならざれども講じて後に重ねて上に云はく、菩薩に二種あり、謂はく、在家と出家となり。此の五戒の句は、(二)即ち在家の菩薩

(二) 方便 身口意三密を以て弄引の方便とす。(三) 又妙慧等此妙慧を以て法身の三秘密の事緣より生ずれども不生入滅の實相法界に入ると觀ずべし。是法界加持の故に修證を借らずして萬顯現して成佛を得るなり。(三) 聲聞等 小乘を引きて大乘を倒す。(四) 此中 密行を云ふ。五戒を以て方便として三業を防護して初地見諦の位に至ることを得しむるなり。(五) また等 眞言行の四重禁戒を明す。

薩の所持なり。世間にあるを以て、種種の事務あれども、此の五戒の句を持つに由り、此の戒は具さに能く慧方便を具するに由るが故に、諸の煩惱惡業之を害すること能はず。此の因縁に由りて、成佛することを得。故に經に、是の如くの善戒は善く修學し具さに信ぜよと云ふ、此れ勸持なり。勸持の意は、佛古佛を引きて證としたまふ。過去の諸佛は此の五戒を持つに由るが故に、世間に處し、衆生の種種の事業に同じて、之を攝取したまふに、自行を妨げざるが故に、成佛することを得て、萬德圓具し、無漏自性の戒、亦此れに由りて生ず。方便智具すとは、此の(二)方便は即ち是れ身の印、口の眞言、心に本尊の三昧を觀するなり。此れを以て方便として、(三)又妙慧あり。即ち此の三事は緣より生ずと觀じて、實相に入る。是の故に萬行頓に具して、成佛することを得るなり。(三)聲聞經の如きは、俗人に五戒を持たしむる所以は、身口を防護して、見諦に入らしめんが爲の故なり。今(四)此の中も亦爾り、此の五句の戒を以て方便として、之を防護して、眞言の行を成して、諦を見ることを得しめんとなり。ただに在家の菩薩のみに非ず、然も此の五句は、諸の出家の者も皆共に行ふなり。(五)また四根本の重業あり、修真言行者は、乃至失命の因ありとも、亦犯すべから

(一) 不空教 不空とは眞實不虛の義なり、一切衆生の見聞觸知に隨つて皆無上菩提を成ぜしめ空しく過ぐることをなし、これ丸字の精神なり。
(二) 三昧耶 身口意の三密なり。
明亂脫

金剛手に告げて言はく、勤勇士、一心に諦かに、諸の眞言・眞言の導師とを聴けと、即時に智生三昧に住して、樂欲に隨ひて、一切の眞言の自在、眞言の王、眞言の導師、大威徳を説きたまふ、(三)三昧耶圓滿の故に、告げて言はくとは、以上は經文なり。上來は眞言の種種の方便を説きたまふと雖も、然も猶ほ未だ具せず、故に更に之を説きたまふ。更に大會を觀じたまふ所以は、彼の心機を照すに、皆此の衆中、普く是れ眞言にして、法器となるに堪ふれば、乃ちまた爲に説きたまふ。また次に不思議の神力を以て、彼れを加持して法力を得しめ、此の妙法を聞くに堪任せるを以ての故に、之を觀察したまふなり。諸の眞言は、上に已に廣く説けるが如し。此れ是の暗字は、一切眞言の心なり、一切の眞言に於て最も上首たり。當に知るべし、此れは即ち不空教の眞言なり。不空とは、一切衆生の見聞觸知する所あるに隨ひて、空しく過ぐる者なし、みな無上菩提に必定するが故に、不空と名く。復次に彼れが善願に隨ひて、皆能く満足し、乃至衆生の大菩提の願も、亦能く満足す。大寶王の高幢の上に在りて、一切を充足するが如し、故に不空と名く。一切眞言自在とは、猶ほ如來の諸法の王となりて、法に於て自在なるが如く、今此の眞言も亦是の如し、一切の眞言に於

(二) 教 三密の教なり。

(三) 眞言品 普通眞言祕品なり。

て自在を得るなり。此の因縁を以て、また眞言の王と名け、また眞言の導師と名く。多くの人海に入るに、導師に依りて、乃至進達する所ありて、大寶聚を得、還歸りて受用するが如く、此の眞言王も、亦また是の如し、一切眞言の導師たり。眞言導師とは、即ち是れ救世者なり、言はく、此の眞言は即ち佛に同じ。又また大威徳を具せり、如來の自在秘密神通の力は、皆此れに由りて生ず。若し行者能く法の如く行すれば、即ち亦此の眞言に同じて、此の如くなることを得るなり。三三昧耶坐とは、身口意の三三昧耶を謂ふ。口の眞言、身の法印、心の本尊なり。座の義は更に之を問へ 今謂はく、即ち金剛座なり。三法圓滿とは、理行果を謂ふ、(二)教は即ち上來の所説なり、今教の下に於て、此の三法を滿じて、究竟して餘なし。佛妙音を出して金剛手に告げたまはく、我れ此の法を説かん、汝大力勇士、一心に諦かに聴けとは、前に(三)眞言品を説くとき、即ち之を説くべし、何の故にか説かずして、此に至りて方に説くや。彼の經文を尋ぬる人を迷はしめんが爲なり。佛は大悲を具したまへり、何ぞ顯に説かずして、衆生を迷惑せしめたまふや。答へて曰はく、怵むことあるにはあらず、但し世間に諸論師の、自ら利根を以て分別する者ありて、智力を以て諸法の相を説き、文字に通達し

(二)巧智生三昧
所入の定なり。

て、慢心を以ての故に、師に依らずして、輒たやすく經を尋ねて、即ち自ら行せんと欲す。然も此の法は微妙なり、若し明かなる導師に依らざれば、終に成就すること能はじ、又妄りに行じて自ら損じ他を損せんことを恐る。若し文を隱互すれば、彼れをして自らの智力を以ても、達解することを得ず、即ち高慢を捨てて師に依らしむるを以て、此の因縁を以て破法の因縁を生ぜざるが故に、須らく此の如くなるべし。佛將に此の眞言導師を説かんとす、即ち(二)巧智生三昧に住したまふとは、謂はく、此の三昧は、能く如來の普門善巧の智を生ず、故に以て名とす。

百光遍照眞言を説くとは、謂はく、此の一字より百法の光明を放ちて、遍流して出す。此の字を若し翻じて遍とすれば、亦正しく其の理に當らず、若し翻じて放光と云へば、放光の義も亦未だ盡きず、大都是れ遍出の意なり。百の威徳の光、此れより出づるなり。此の眞言は先づ一切の佛に歸命して乃ち説きたまふ。

金剛手、此れ眞言の眞言救世者なり、大威徳あり、佛は自ら即ち是れ一切法自在牟尼なり。佛金剛手に告げたまはく、此れ一切の眞言の眞言救世者なり、大威徳を成就せり、即ち是れ等正覺、法自在牟尼なり謂はく一切の法に於て自在なり。諸の無智の暗を破ること、日輪の

普く現るるが如し、即ち我が自體たり、大牟尼加持を以て、應現して神變を作す本文には變化作變化と云ふ。所欲に隨ひて衆生を利するを以て其の所欲に隨ひて利し之を徳益す。諸の衆生を利益するを以て、乃至一切をして、思願に隨ひて生起せしむ、謂はく、彼の心の思願する所に隨ひて、即ち生ずることを得しむるなり。悉く能く爲に此の神變無上の句を施作す。是の

故に一切種勝の中にとは謂はく一切所欲の中に於て、謂は諸欲の中なり。謂はく、一切の事の中に於て、此の正覺の句を求めんには如かず。應の故に當に一切種に於て、清淨の身にして諸障を離れ、理に應じて常に勤修して、正等覺の句を求むべしとは、清身にして障を離るとは、謂はく、行者自ら其の身を淨め、一切の障を離れて、之を修行せしむ。一切種は、一切方便色類の中に於て修するを謂ふ。一切無智の暗を破ること、日輪の現れて同じく見しむる如し、自は是れ我れなり。加持を以て大牟尼、現じて變化を作し、衆生を利益す。乃至是の衆生等の思起れば、發生せしめ、常に爲に此の變化最上の句を作す。是の故に一切種種の方便に於て、勤修せんと欲す、理に應じて當に清淨我を作すべしとは、以上は經文なり。此の眞言は即ち救世者に同じとは、即ち佛なり。大威徳ありとは、如來の威神を謂ふ。此の眞言は即ち是れ一切法自在牟尼なりとは、是れ即ち毘盧

由るが故に、能く一切衆生の爲に、佛事を作すなり。陀羅尼形とは、謂はく、眞言輪を惣束して、以て身とす、即ち普門の身を成す。此の惣持の身に住するに由るが故に、一切衆生の前に於て、所意見の身を示し、應機の法を説きて、差謬あることなく、同じく佛智に入らしむ。

その時に世尊、衆生に、^{一、三昧耶の句を宣説したふ。}三昧耶の句を宣説したふ。隨ひて住して、^{二、秘密主、我が語字輪の神化の廣長にして、無量、世界に遍する清淨の門を觀ぜよ。}秘密主、我が語字輪の神化の廣長にして、無量、世界に遍する清淨の門を觀ぜよ。是の性の如く、一切衆生をして歡喜せしめ、法界をして類に隨ひて表示せしむる門なり。亦今の釋迦牟尼世尊の、殊異にして虚空界に流遍し、世界に於て勤めて佛事を作すが如し。秘密主、諸の有情能く、是の如くの語輪の、正妙音莊嚴瓔珞を流出し、胎より佛の影像を生じ、衆生の性に隨ひて歡喜せしめ、現生することを作すことを知るに非ずとは、以上は經文なり。佛、上の如く説き已りて、次に金剛手に告げたまはく、汝我が語輪を觀す可しと、即ち佛の陀羅尼身の字輪の境界を觀ぜよとなり。佛神力を以て、大會を加持したまふ。ただ今秘密主をして、我が語輪の境界の廣長にして、無量の世界に遍する清淨門なることを觀ぜしむるのみに非ず。一切衆生の本

一、三昧耶、亂脫
二、三昧耶、三
密なり。

二、私等以下は
一行禪師私の釋なり。

性の如く、隨類の法界門を表示して、歡喜を發さしむること、亦今の釋迦牟尼世尊の、無盡の虚空界に流遍して、諸の刹土に於て、勤めて佛事を作すが如し。金剛手、此れを觀ずることを得れば、一切の大會も亦同じく、此の不思議神妙の境を觀ることを得。所以は何にとならば、此の大智の身は、常住寂滅にして、諸の因縁を離れて、有心の境に非ず。佛の神力に加持せらるゝことを離るれば、則ち一切菩薩も其の境界に非ず。佛既に示し已りて告げて言はく、汝等且く我が字輪の境界の、廣長にして無量なるを觀す可しと。長とは謂はく、人の及ばざる所なり。^{三、私に謂はく、此れ即ち云何とならば、其の廣は、横に一切衆生界に遍ぜり、其の長は云何ぞ、豎に佛界を窮むるが故に、廣長と云ふなり。}是の如くの廣長の身は、普く一切に應ぜり、何によりて得る、乃ち此の一字の眞言王より、此の事を現すなり。一の眞言印身を以て、一切の身を示し、一の眞言の字音を以て、妙聲を出して法界に普周し、一の眞言本尊の心を以て、普く一切智慧の境を示す。^{四、釋迦牟尼とは、即ち是れ此の不空見の身なり、普く世間に入りて佛事を作す、故に此の示す所は即ち是れ牟尼の身なり。}佛佛事を作すとは、即ち此の釋迦は、毘盧遮那の字輪より出て、然も無二無別にして、みな一切處

三、釋迦、釋迦大
日は能現所現に
て而も亦無二無別
の義を示す。

に遍じたまへり。此の一字は大空本不生に同じきを以ての故に、當に知るべし、百字の身も亦是の如し。殊異とは、謂はく、如來の三昧耶の身、世界に流遍し、及び十方の虚空の悉く遍じて、虚空として遮せざるところあることなし。當に知るべし、虚空の量る可からざるが如く、身も亦是の如し。

一、三、八、四、亂脫

七、十二、三、亂脫

六、十二、亂脫

六十一、亂脫
か。乃 及の寫誤
か。後 復の寫誤

三秘密主、諸の有情は、能く世尊の是の語輪の相より、^ハ亦華嚴を檢するに、心より我が妙音生じて、諸佛と等し、^{正覺の妙音、莊嚴の瓔珞を流出し、胎藏より佛の影像なり}形相を生ぜるを知るに非ずとは、^七莊嚴とは、語言を以て其の相を莊嚴するを謂ふ、^心の胎藏より佛形を生ず、^{廣長無際にして、佛事を作す、非衆生知とは、即ち此の佛の字輪は、亦菩薩の境に非ず、若し神力を離るれば、則ち觀ること能はず、而るを何れの衆生か、其の所益を知らんや、諸の言音の中に佛を最上とす、種種の莊嚴は、^{おほせ}率ね種種等なり、^二要を以て之を言はば、無相を以て莊嚴するなり。心より佛の隨類の身を現生す、此の妙音三昧に住するに由るが故に、普く其の前に現れ、其の本性に隨ひて、歡喜信解することを得しむ。^六生の處^二乃ち所住の境をや。此の^三後微妙の音を以て莊嚴すとは、^一胎藏とは一字より生ずるを胎藏と名く。此の一字より生ずるを胎}

六根淨品
華經の舌根の偈文
なり。

十三、亂脫

とし、彼れに隨ひて生ずる者を以て影像とす。一の鏡の圓淨にして衆色に對する、色既に來らず、鏡も亦往かざれども、然れども因縁和合して影像炳然なり。不生不滅、不一不異、不來不去、不常不斷にして、即ち彼の體に同じく、不可思議なるが如く、如來の影像も亦また是の如し、無思無爲にして、一切に應じて、皆彼の心に隨ひて歡喜を得しめて、爲に佛事を現生す。即ち一の佛の言音を以て、能く一切の佛事を生ず。^二六根淨品の如き、尙ほ能く一の妙音を以て、三千界に滿つ、況や如來の究極圓淨の六根をや。

十三爾の時に無量の世間海の門^{亦是れ口の義なり}の中の法界に於て、菩提を成ぜしめ、普賢菩薩の行願を勤修せしむ。菩薩此に花を地に布き、胎藏世界の種性海にして生を受け、種種の性清淨門を以て佛刹を淨除し、菩提座を現じて佛事をなし、中にして住すとは、以上は、經文なり。此れ大智灌頂無量世界海門に由る。門とは、從りて入らるゝ處の義なり。無量世界海の口は、即ち衆流の所趣所入の門を指す。此の無量世界海門を知るに由るが故に、菩提を勤修す、而も此の菩提とは、是れ一の菩提に非ず、乃至遍法界の菩提なり。衆生無量なるを以ての故に、法界も無量なり。今乃ち普く成ずることを

得しむ。その時に世尊、無量世界海門の法界に於て、懇慫に勸發して、菩提を成就し、普賢菩薩の行願を満足せしめ普賢は即ち如來の功德なり普賢菩薩の行願を出生すとは、加持を以ての故に、相を現すこと後の如し。此に妙花を地に布く胎藏世界とは、於此ここにと言ふは、即ち此の索す訶世界なり。種種性海に生を受くとは、種性は受生の處を謂ひ、海は斷つ種種の性清淨を以て佛刹を淨除し、菩提場を現じて佛事を作すとは、謂はく加持して佛事を作す復次に菩提は己が如く異なることなくして、同じく法界に入る、此れは乃ち是れ大菩提の行なるのみ。若し是の如くの發行は、即ち是れ普賢の行なり、是の如くの起願は、即ち是れ普賢の願なり。菩薩此の事をなして、是れより初めて發心す。花地とは、平地を淨治し、掃灑清淨にして、種種の色香味觸ある可愛の花を散布し、周匝し端嚴にして、其の上に坐するが如く、今此の大悲藏の心地も、亦此の如し。胎は是れ初起なり、即ち是れ如來所起の處なり、如來の性より生ずるを以てなり。如來性生とは、是れ我字より生ずるなり。是の如くの發心は、即ち是れ初地の位なり。海は謂はく、如來種性の海なり、此の實性より如來の一切の功德を生ずるなり。胎は謂はく、此れより以て根本として、漸漸に一切如來六根の支分を具足するなり。此の普門の身は、

衆生の種種の心行の差別に隨ひて、性欲各異にして、即ち清淨の妙門を以て、其の心を淨めて究竟することを得しむ。是の如く其の心を淨むるは、即ち是れ一切の土を莊嚴するなり。行者是の如く菩薩地に住する時、即ち能く普く世界を見るを以て、如來の身を現じ、道場に坐して法界輪を淨め、即ち能く一切の句を遍知す、謂はく成佛なり。亦能く欲樂する所に隨ひて、其の願を滿して空しく過さず。故に次の經に、復次に正遍知の句を求むる者は、樂欲し心の無量を知るを以て、身の無量を證し、身の無量を知るを以て、智の無量を證すと云ふ。次にまた樂求とは、還つて菩薩の道を修するなり、即ち是れ佛事なり。衆生彼の道を見るが故に、即ち心を勸發して道を學ぶなり。復次に樂欲して正遍知の句を勤求する者は、心の無量を知るを以て、即ち身の無量を知る。身の無量を知れば、即ち智の無量を成す。智の無量を知れば、衆生の無量を知る。衆生の無量を證すれば、虚空の無量を知る。證して此れを得るなり。

秘密主、心無量なるを以て四無量を得已りぬれば、正等覺を成す。即ち衆生の無量を知り衆生の無量を知れば、即ち虚空界の無量を知ることを得。秘密主、心の無量を以て、四種無量を得とは、謂はく、心を除きて、餘の身と智と衆生と虚空となり。已

(二)此の等百法
明門はたゞ大日尊
のみの説に非ず
一、六、亂脫

に最正覺を成ずることを得れば、十種の力を具し、四魔を降伏し、師子吼すと云云。
十力を成し、四魔を降伏し、無畏にして師子吼す。勇士此の一切最上智の句は、百門
學處に於て、諸佛の説きたまふ心なりとは、以上は經文なり。此の意は言はく、此の
大智灌頂門に入り、菩薩種性に住するに由るが故に、即ち心の無量を知る、心の無量
を知るを以ての故に、即ち一切の身の無量を知る。心の無量を知るを以ての故に、即
ち智の無量を知る。智の無量を知るを以ての故に、即ち虚空の無量を知る。所以は何
にとならば、一切の法は心に由りて有り、此れに了達すれば、即ち法無量なり、即ち
身の無量を知る。緣稱^かひて示現の身、乃ち機に赴き、度門の智、彼れに應じて起るこ
と、亦また無量にして、一一に虚空に等同なり。身と智と衆生と虚空と無量なるを以
ての故に、名けて四無量とす。此の無量は即ち心より生ずるに由るが故に、四無量心
と名く。若し此の四無量心を得れば、即ち是れ正覺を成じ、即ち是れ十力を具して四
魔を降し、即ち能く無畏にして師子吼す。是の如く等の事は、皆此の四無量心に住す
るに由る、一切最上法句に住して、成就することを得るが故に、契字悉地の果と名く。
六、此の百門はただ我れ自ら説くのみならず、一切の佛も亦同じく是れを説きたま
るなり。

四、五、亂脫

五、七、亂脫

ふ。此は謂はく、上の十力等の功德を指す。勇士とは謂はく、秘密主なり。是の
如く勤勇士、最上覺者の句は、百門の學處に於て、諸佛の説きたまふ所の心なり。
五意は云はく、成佛する所以は此
の百門の心を學ぶに由りてなり。
七、右百字果受用品とは、謂はく、一一の門に隨ひて、相應することある者を受用す
るなり。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十八終

(二)二には等常
に九種住心を以て
外道となすこと此
釋を以て本據と心
得ふべし。

(三)大乘 秘密佛
乘を指す。
(四)灌頂の
機を説く

の眞言心の法を説かんと欲して、即ち神力を以て加持したまふ、法界に遍周して、悉く此の言音あり、而も金剛手に告げたまふ。一切智毘盧遮那^一、善哉、善哉、善哉、大衆生金剛手大德^三説き給はく、吾れに一切秘密第一、希有なる諸佛の最秘あり、一切諸の外道は知らずとは、以上は經文なり。佛金剛手を歎じて、善哉、善哉、善哉、執金剛大德とのたまふ。大德とは、萬德を具するなり。是の法は乃ち是れ一切如來の、秘密の中の秘密なり、諸の秘藏に於て最も其の上により、共に守護する所なり、妄に一人に與へず、第一希有にして得難き法なり。今此の諸法の秘は、一切外道の知ること能はざる所なり。然も外道に二種あり、一には世間種種の外道、(二)二には佛法の内に於ての外道あるを謂ふ。佛法の中に入ると雖も、而も未だ如來の秘密を知ること能はざるを以て、猶ほ是れ邪見の心を以て理外の道を行ふ、故に亦外道と名く。此の法は乃ち二種の外道の知ること能はざる所なり。此の佛法の中の外道とは、即ち二乗の中の人なり。佛既に安りに人に與へず、久しく斯の要を嘿して、機を待ちて與ふ。今何の人か此の法を聞くべき。故に次に、若し人(三)大乘中に於て、大悲生灌頂の法に入ることを得ば、乃ち之を聞くべし、然らずば得ずと言ふ。次に又以て之を簡ぶ、(四)誰れをか灌頂に引入

(二)法華 第二方便品
に無智の人、有智の人等、非機を簡別する、偈頌あるを指す。

(三)いま等 以下伏難を通ず。

(四)佛法等 相即無相、無相即一切相、自宗の實義を述ぶるなり。

(五)但空等 顯教所談の無相、偏空に據ぶるなり。

じて、然も須らく之を灌ぐべき、若し其の人の性調柔質直にして、諸の善行を具せば、是の如くの人を、乃ち灌頂の法に引入す可し。又常悲ある者を、乃ち漫荼羅に引入すべし。常悲とは、謂はく、有る人の如きは、此の時の中に於ては悲あれども、此の時の中には無し。或は此の方には有れども、此の方の中には無し。或は親處には有れども、怨處には無し。今は則ち爾らず、一切時處に於て、常に悲心ありて、又また廣く普く平等なり。是の如くの人を、乃ち灌頂に引入すべし。既に灌頂を得れば、方に此れを聞くべし、常の流布せる經の如きには非ず。此れ(二)法華の偈の中に、亦人を簡ぶことを廣く説けり、之を引く可きのみ。復次に有縁觀の者は、亦此の法を聞くことを得べからず。佛法は一切の相を離れ、一切の縁を離れたり。若し有相有縁なるは、即ち斷常の見を離れず、故に此の法を聞くことを得ず。(三)いま無縁と言ふは、豈に是れ一切の法を撥ひて、都無にして所有無からんや。是の如きには非ず。(四)佛法は縁を離れ、相を離れたりと雖も、方便を以て、一切の善功德、神力不思議の、種種の境界を具足せり。相に即して無相なり、無相に即して、一切の相を具す、縁に即して無縁なり、無縁に即して、一切の縁を具す。(五)但空にして、直に所有なきのみを謂ふには非

(一)前等 第二の
從何生の問に答
ふ。

す、其の大意をいばば、謂はく、菩薩の大行大願を具して、大心を發さん、是の如くの人には、爲に説く可し。(二)前の問に、何れよりか生ずるとは、いま佛心より生ずと答ふるなり。導師は即ち是れ佛なり。若し導師に隨ひ、所住處に隨ひてとは、此の眞言は、即ち彼れ能く内心の大我を知ることありとは、謂はく、此の心を歎するなり。彼れに隨ひて生ず、謂はく、一切の支分より生ず。

其の自心の位に隨ひて、導師の所住の處あり、八葉の意より生ぜる蓮華は極めて端嚴なり、圓滿の月輪の中にあり、無垢にして鏡に同じ、彼れに於て常に安住したまふ、眞言救世の尊は、金色にして光炎を具し、毒を害し、三昧に住して、日の觀る可きこと難きが如し、彼の一切衆生も是の如しとは、八葉の意より生ぜる蓮華は極めて端嚴なり、圓月の中に無垢にして、鏡に同じ、彼れに住して常に居したまへる眞言救世の大徳は、金色にして光燄を具し、三昧に住すとは、謂はく、此の華臺は心意より生ず、即ち是れ自心の八葉の蓮華を觀するに、此の華は餘處より生ぜず、即ち意より生ず、意は即ち是れ花なり、無二無別なり。此の華臺圓明なること月の如く、清淨無垢にして、圓鏡に同じ、世間に更に物として以て喩とす可き無きを以て、唯だ圓鏡の

みありて、以て喩へ況へて、彼れをして意を得て言を忘れしむ可し。然も實には彼れに過ぎたること、百千萬倍にして喩とす可からず。

(一)今等 以下第
三の能護生の問に
答ふるなり。
(二)眞言 丸字な
り。
(三)眞言王 丸字
なり。
(四)上等 丸字の
觀に上に之を釋す
と雖も未だ盡きざ
る故に重ねてこれ
を説くなり。
(五)七日童子 生
後七日をへたる兒
童なり。

(一)今此の圓の中に、(二)眞言救世者あり、大功徳を具せり、眞金色にして、具さに燄光あり、三昧に住して、寂然として此れに住せり。當に此の一字の(三)眞言王を觀ずべし。此の眞言王より、即ち本尊、或は大毘盧遮那を觀ず、(四)上の瑜伽法の中に説けるが如し。説未だ分明ならず、當に更に之を問ふべし。然も上の文に彼れ具さなり、引きて檢ぶ可し。害とは謂はく、一切の煩惱悉く以て除害するなり。其の威光は百千の日を和合せるが如し。威光猛盛なること、猶ほ(五)七日の童子の、仰ぎて烈日を觀るに、其の明を觀ること能はざるが如し。今此の光も亦爾り、彼の一切衆生、日輪を觀るに、其の本質を見ること能はず。今此の佛光も、亦此の如し。

恒常に内外に於て、普く周遍して加持したまふ、是の如くの慧眼を以て、意鏡を知るとは、心鏡を作すこと亦得。眞言者慧眼を以て、是の圓鏡を觀じて、當に自の形色を見るべし。自ら身の形を
見るなり寂然として正覺の相なり、身と及び身より生ずる所の影像となりとは、身と身より生ずる像とは、上の身は有爲有漏、下の身は無爲なり。六心よ

一、明、亂脫

六、亂脫

り生ずる心は、謂はく、垢心より淨心を生ずるなり。常に清淨の種種の自作業を出生すとは、染汗の阿頼耶の業より十三不淨の業を除きて、淨業當に現るべし、淨業現れれば、光を生ずること電の如くして、普く照す。十三次に當に彼の光現れて圓に照すること、電燄の如くなるべしとは、十四亦電の義を取らず。ただ種種の雜色の光圓滿せるを取る。雜色の光照を圓滿す。眞言者能く一切の諸の佛事を作すとは、二普く内外に遍じて、當に鏡意を知るべしとは、鏡は即ち是れ圓明の中の華臺なり、當に知るべし、此の鏡は即ち是れ意なり、當に知るべし、此の鏡は即ち是れ自心なり。何の方便を以てか觀知することを得る。謂はく、即ち上の方便の如く、二目に於て囉字を置き、此の慧眼を以て、實相圓鏡の心を觀するが故に、明了に現前することを得。誰れか能く之を觀ずる、謂はく、眞言行人なり。此の行人は即ち囉字の眼、妙慧の光明を以て、華臺の鏡を觀ず。初に作意して外に觀ずるに、宛然として炳著なり。此の圓明の中に於て、如來乃至音聲色像、皆悉く無邊なり。既に是の如く明了なれば、即ち此れを引きて内心とす。謂はく、前來に觀ずる所の毘盧遮那の身、自然正受にして威光無際なるを、之を觀じて己身とす、即ち己身をして彼の尊に同ぜしむ、圓明の中に於て、寂然として住

して、彼の佛に同じ。五一切の相を離れて、相を現示するを以て、眞實相と名く。三然る所以は、此の蓮は意より生ず、謂はく、先づ囉字を以て眼に置きて觀ずるに、心は華臺の鏡に於て、即ち是れ外見なり、即ち外見を以て内見を成すは、即ち自ら其の心を了す。

故に經に云はく、慧眼是の如し、慧眼を以て持誦者鏡を觀ずれば、自の形色を見るに、寂然として佛相なり、身と心より生ずる像と意と、心より常淨の種種の自業を生出す。次に光彼れ電燄の如く、彼しこに圍めり、持眞言者、一切の諸の佛事を作すに、見若し淨なれば、我れ亦一切の事を作すこと意思の如しと説くとは、以上は經文なり。七云ふ所の生とは、身語意の生を謂ふ。先づ圓明の佛像金色等を觀するに、當に知るべし、意より生ず、即ち外を引きて内に向ふに、身の如きは佛の身印に同じく、語は佛の言音に同じく、心は佛心に同じ、生とはみな意より生ずるなり。即ち此の生を生ずるを以て、而も能く一切の業を淨む、故に常淨と云ふ。種種自業とは、一切の業を離るるを謂ふ。若し一切の業を離るれば、即ち諸佛と名く。十五若し是の如く覺知するは、即ち能く圓光を以て遍照す。遍照とは、即ち是れ佛事を作すなり。身口意の遍照莊

七、亂脫

嚴に隨ひて、當に一切の佛事を作すべし、即ち毘盧遮那に同じ。誰れか能く此の佛事を作す、謂はく、持真言者なり。此れはみな佛金剛手に答へたまふ。真言所生の處なり、謂はく、此の真言は即ち行者の身口意より生ずるなり。若し是の如く知れば、即ち是れ内外清淨にして、佛事を作す。經に自業と云ふは、即ち是れ佛事なり、謂はく、普現色身なり、或は處處に菩薩の道を行じ、八相成佛することを示す、諸の本生の事業無量無邊なり。要を以て之を言はば、皆是れ如來の自業なり。若し能く是の如く知るは、是れ成佛なり。持真言者、前の觀の次第方便に住するに由りて、此の真言行を以て、是の身より緣起することあり、更に殊勝の佛に異なることなし。故に經に、若し見れば清淨と成る、聞等も亦また然りと云ふ。見聞觸知する者、悉く清淨なることを得。此の中の能の字は、是れ多の義を含む。意の思念する所の如く、能く一切の事を作す。次に光彼れ電籛の如く、彼しこに圍めり、持真言者、一切の諸の佛事を作すに、若し淨なれば、我れも亦、一切の事を作すこと、意思の如く亦爾りと説く。

十六、亂脫

十一、亂脫

十八、亂脫

秘密主、真言門に菩薩の行を行する菩薩は、是の如く心中より生じ緣起す、佛よ

(二) 師說未だ分明ならざる所ある故に、一行禪師即ち梵本を檢して更に意を問へとの義なり。

一、五、三、亂脫一

り殊勝なることあることなき是れなりとは、以上は經文なり。(二) 師說未だ分明ならず、更に之を問ふべし。且其の義を思ひて次第に配す可し像は緣起なりとは、謂はく、心の八葉の華を觀るに、華の上に圓明あり、淨鏡の類に同じ。初時には未だ即ち明了ならず、囉字の慧眼の方便を以ての故に、漸く自ら明了なり、乃至圓鏡の中に於て自身を見るに、即ち一切の佛等に同じ。是の如くの法の生ずるは、即ち是れ因緣より起る。若し緣より起る者、此の不生門を觀すれば、即ち法界體性に入るなり。慧眼を以て因とし、淨鏡を所緣として、無量の自業等の佛事、因緣より生ず。然も實には自よりも生ぜず、他よりも生ぜず、共にもあらず、無因にもあらず、中論等の所說の如し。此の法は殊勝なり、更に過上なし。如上に皆、一切の相を離れて、無對無緣なりと説けり、而も今此の觀等を作す、豈に相違にあらずや。阿字より一切の字を生ずるが如きは、一切の字を生ずる時、即ち本不生の義なり。此れも亦是の如し、佛方便力を以ての故に、ことさらに無相寂滅の法の中に於て、此の瑜伽の行を作したまふ、無相の中にして諸相を説きたまへば、即ち此の諸相は即ち是れ無相なり。謂はゆる相とは、即ち是れ緣によりて生ずる所の法なり。然も實には自よりも生ぜず、他よりも生ぜず、八不を離る、

二、亂脱二

即ち是の第一無相は、相を離れて別に無相ありと説くにはあらず。若し別に此の説を作さば、即ち外人の斷空に同じ。然も有が難じて云はく、今此に本尊の身語意等の種の境界を觀ず。又秘密主眞言門修菩薩從身所生影像とは、謂はく、身より影像を起すなり。身は垢身を謂ひ、影は淨身を謂ふ。此の所起は佛に過ぎたるはなし。意は言はく、影像の起の中に殊勝なるは、佛に過ぎたるはなし。

六、亂脱三

一、三、亂脱一

六、眼耳鼻舌身意等の取の如く、是の如く彼れ自性空なり、唯だ名字のみありて執する所なり、虚空に同じくして執着なし、因業より生じて影像に等しとは、即ち是れ相なり。相とは即ち是れ世間の法なり。いま佛、眞言成佛の行を説きたまふ、乃ち更に世間三昧有相の法を明したまふこと何にとなり。故に佛次に喩を引きて、之を明して、眼耳鼻舌身等の四大種の攝取なるが如く、彼れ自性空なれば、唯だ名字のみありて執する所なり、當に知るべし、虚空に同じく、執取する所なし、因業より生ずる影なりとは、經文なり。因は鏡の如く、業は身の如し、鏡に對して影現るるが如し。行者先づ外を觀じて心の明鏡を緣じ、然して己身に引入するが如き、若し自他平等無二なるは、即ち是れ瑜伽の成なり。自身を因とす、所緣は是れ緣なり、因緣合するが故

二、亂脱二
（一）因等 此文の中因とは菩提心なり、業とは大悲萬像は大空不生の相なり。

に、影像生ずることあり。若し此の因緣を了すれば、即ち等正覺を成す。誰れか正覺を成する、謂はく、眞言行人なり。此の意は、世間の五根等の如きは、四大の因緣より生じ、業等より生ず。有相有緣なりと雖も、然も自性空にして、即ち第一無相の法に同じ。今此の瑜伽も亦爾り、若し有相にして緣より生ずと雖も、緣生の實相は、即ち是れ阿字法界の體なり、何ぞ難じて、是れ有相なりと言ふことを得んや。若し是の如くの義を了するは、即ち正覺を成す。故に經に、眼耳鼻舌身意等の、四大種の攝取なるが如きは、彼れ自性空なり、是の如く空にして名のみなるを、唯だ取着す、虚空に同じくして執着すべきなし、因業より生じて影に等しと云ふ。

如來正覺を成じたまふ、彼れ互相に緣起して、無間斷の中に相續す、若し緣より生ずるは、彼れ即ち影像の生の如し、是の故に諸の神尊は即ち我なり、我は即ち神尊なり、互相に發起す、尊の身は身より生ずる像、天形を生ずとは、以上は經文なり。我の所起は圓鏡に因る。明鏡を見る時、自身の影像現る、未だ圓明を見ざるに由るが故に、即ち影像なし。如來正覺を成じ、彼れ互相に緣起すとは、鏡中に像を生ずるが如き、像互相に生じて、因緣斷せざる中に、自の垢身より淨身を生ず、彼れ互相に生じ

一、三、亂脱

二、亂脱

五、亂脫

四、亂脫

(一) 身等 身より生ずる所の身は尊の形像生ずるなり

六、亂脫

(二) 秘密等 上の互に緣起して間絶あることなき義を轉釋す。

て、間斷せず。間斷の中に相續すとは、即ち是れ無間斷なり。若し縁より生ずるは、彼れ即ち影像の生ずるが如しとは、此れは因縁を離れざることを明す。是の故に諸尊は即ち是れ我、我れは即ち是れ本尊なりとは、互相に發起す、互相に生ずるに由るが故に、謂はく淨身を生ずるなり 是の如く尊の形像生ずるとは、身より身を生ず、謂はく、垢身より淨身を生ずるなり、淨身は即ち是れ佛本尊の形なり、當に是の如く解すべし。己が身心を以て己身を淨め已りぬれば、又即ち彼れと同じく、互相に緣起して、間斷あることなきが故に、縁より生ずるは即ち是れ影像の生の如しと云ふなり。内外相因して、更に相分發し、展轉して相見るを以ての故に、諸尊即ち是れ我れ、我れ亦即ち是れ諸尊なり、佛即ち是れ我れ、我れ即ち是れ佛なり。(一) 身生形相生とは、謂はく、自身より生ずるなり。

六 觀じ已りて(二) 秘密主、法は通達の慧に緣り、通達の慧は法に緣る、彼れ等互相に作業し、不住にして性空なり、云何が秘密主、意より意を生じ、影像能く生ずるとは、通達は是れ證果の義なり、所至の處に至るなり、此の通達は當に證と言ふべし。秘密主此を觀するに、前の説の鏡の喩の如し。心中の明鏡、像影を現す時、分別あることな

(二) 若し等 上の無間斷の義を釋成す。

一、六、二、亂脫

(三) 上の「法は通達の慧に緣る」の句を釋す。

し、但し縁によりて起る。今此の法を觀するに、鏡より生ずとせんや、面より生ずるや、是の如く之を求むるに、みな實處なし。若し鏡によりて有らば、面なければも亦常に有るべし、若し面によりて有らば、鏡なくとも亦無ならざるべし、然れば俱に不可なり。故に知る、但し縁によりて有なれども、而も實には常に空なり、此れは是れ法なり。此の法を觀するに因りて、證慧を成ずることを得。然も此の慧は、戲論永く絶して、顯示し談說す可からず。(一) 若し説かず、人を度せずば、また本願に違せん、更に證智によりて還つて法を生じ、佛により、法を見るに因りて成佛す。成佛し已りてまた法を説くなり。亦此れ縁より生じ、また法を成す可し。譬へば白黃赤等、作意する者の作す時、染着の意生ずるが如く、彼れ同類にして、是の如く身轉すとは、以上は經文なり。(二) 意は言はく、秘密主、(三) 法を觀するに、法性は空寂の相なり、此の相を緣するに因りて、慧を以て能く通達す。法は是れ諸相を離れたる法なり、法は即ち是れ縁なり。此れを觀するに由りて、法性に入りて法に通達す。若し法に通達するは、即ち是れ縁に達す、縁に達すれば即ち是れ法に達す、互相に發起す。同じく法の空寂を知るは、即ち是れ法に達す。分別起あるに由りて、法は是れ空無なりと知る。

(二) 或 或とは不定の言なり、種子に定なる故に、或の言を案ずるなり。

染は是れ執取の義なり、當に知るべし、心意より生じて、彼れと同類なり。心既に是の如し、身語も亦然り。次に又喩を引く。又意の中に漫茶羅を起立するが如きは、三角等を作すこと上の説の如し。且く除熱の方便の如きは、圓漫茶羅を作すべし、白色の中に鑲字あり、或は種子の字なり、上に點をおく等なり、餘は此れに類して解す可し。此の點は即ち熱惱を除き、甘露味となる。此の法を作すに由りて、心より之を作して、能く熱を除き、乃至刹那の頃に、彼の病即ち除くる。彼れ心より起るなり。當に知るべし、彼の心は漫茶羅に異ならず、漫茶羅は心に異ならず、一相なるを以ての故なり。言はく、此の漫茶羅は心と無二無別なり。今此の法も亦是の如く解す可し。

次に佛又喩を引きたまふ、幻者の化して男女等を爲す如き即ち此れなり。秘密主、又諸の幻者、變化して男子を作さん、次に幻の男子また變化を作すが如きは、意に於て云何ぞ、秘密主、何者をか勝とせん。金剛手答へて言はく、世尊、此の二人の者、相異なることなし、何を以ての故に、世尊、實に生ずるにあらざるが故に、二人の男子は本性空にして、幻に等同なりと。是の如く秘密主、事とは、悉地等の事を謂ひ、等とは、多を謂ふ。意の中より生ずる所の事、みな意に従りて生ず、此の二は性空にして、分別する所なし。

無別なりとは、化人又また化を作す、是の如くの二幻は、何者か尊きに居り、何れか優り、何れか劣り、何れか長、何れか短、何れか好、何れか醜なるとなり。經に誰れか勝ると云ふは、即ち是れ此の二幻、何者か尊勝なると問ふなり。答へて言す、此の二は異なることなし、何を以ての故に、みな不實より生ずるを以ての故に、二俱に本性空なるが故に。夫れ幻にして幻を作す、而も幻を作す者、何の殊異かあらんやと。佛因りて言はく、汝且く此の法を觀すべし、心より圓鏡等を生ずるが如きは、心即ち是れ鏡なり、鏡即ち是れ心なり、無二無別なり、其の差別の相を論ず可からずと。若し染心とは、即ち是れ世間なり、若し染離の心は、即ち是れ出世間の心なり。

(二) 右此の成百字位品は、説未だ分明ならず、當に更に之を問ふべし。然も其の大意は、先づ瑜伽を修するを以ての故に、乃至極大廣普を成す、然も此の慧の方便を以て、空の實相を觀じて其の心を洗滌せざれば、即ち猶ほ是れ世間の法なり。故に須らく此の觀行を作して、漫茶羅の實相に入り、大空の壇を成じて、有せざる所なく、常恒に畢竟清淨ならしむべし。此れ其の大略なり。

(二) 右等以下に當品の大意を述ぶ。

(二)大龍等 莊嚴
經の沙竭羅龍の譬
なり

其の身を琉璃の如くならしめ、若し語意を淨めんと欲せば、亦意分に隨ひて淨し。世法すら尙ほ爾り、何に況や如來の如意珠の妙寶、而も此の如くの事を作すこと能はざらんや。世珠の如きは、種種の事を作し、種種の願を滿すと雖も、而も寂然不動、無思無爲、不去不來にして、以て一切を成す、何に況や如來の大寶をや。是の故に無分別法界は、(一)大龍の宮にありて、心を興し念を動さざれども、業力等に隨ひて、差別の味を降すが如し。是の義を以ての故に、無相空の中に於て、無量の身口意普門の事を現すこと、即身に得可し、疑ふべからず。又喩へば虚空の衆生數に非ざれども、而も衆生の所依たり。身壽者に非ず、摩訶婆^{マハバ}作者・受者等にも非ず、一切の妄想みな除こりて、悉く分別を離れ、去もなく、來もなければ、然れども衆生界に異ならず、一切衆生の依止として、作業みな此れに由りて成り、衆生を滋益し、種種の事を成す。虚空の能く一切の事を成すを以ての故に、便ち虚空は有爲有相なりと謂ふ可からざるが如く、今此の大空の漫荼羅も亦是の如し。畢竟清淨にして、爲さざる所なく、常住寂然にして空しからずして成就せり。故に經に勸信して、當に是の如く知るべし、疑惑を生ずること勿れと云ふなり。

(二)若し等 以下
孔子大空の釋なり

その時に世尊、又また無盡衆生界を淨除する句、三昧を流出する句、不思議の句、他門に轉ずる句を宣説したまふ。(一)若し本より生は所有なければども、世法に隨順して、當に空ならば云何が生ずることを知るべき。修行者、若し自性是の如く、不可得なりと覺れば、當に虚空等の心生すべし、菩提生なり。當に悲を發し生じて、一切世間に隨順すべしとは、以上は經文なり。無盡衆生界に住して淨除すとは、謂はく、本より誓願を立てて、無盡世界の一切衆生を淨除せんと欲すれども、衆生に垢あるを以ての故に、自ら度すること能はず。今彼れが爲に、普く如來の知見を開きて、清淨を得しめ、彼の身口意地をして、みな淨めて垢穢なきことを得しめんと欲するなり。當に知るべし、此の淨除無盡衆生界の句は、即ち是れ三昧流出の句なり。三昧流出の句は、即ち是れ不思議の句なり。不思議の句は、即ち是れ他門に轉ずる句なり。他の有垢を轉じて、自性淨となし、他の無明を轉じて、如來の明となす、故に轉他門の句と名く。他とは衆生を謂ふ。穢を轉じて淨となすを以て、是の法門を説くなり。本生無所有とは、若し本より所有なければども、世間に隨順して生せば、云何が當に空、謂はく、當に云何が、諸法は空なりと知ると謂ふべき。生ずることを知るべき。此の瑜伽

とは、偈の中に自ら問あり、是れ佛の神力を承けて此の間あるなり。若し本より生は所有なければも、世間に隨順することありと云はば、彼の修行者、云何が當に修行者をして、此の空を生せしむべき、謂はく、淨空なり。若し無有と言はば、云何が此の淨空を生せんとなり。若し本より所有なしといはば、此の生も亦本無に隨ふ、即ち是れ本不生なり。云何が瑜伽者、云何が空を識らん、此の空は即ち是れ眞言の性なり。云何が瑜伽者を生ぜん。若し自性は是の如し、名不可得なりと覺るとは、謂はく名字も不可得なりと觀するなり。正しくは觀に爲るべし、觀は覺と同なり。當に等空の心生ずべし、謂はく、菩提心生なりとは、此れは上に明せる十喻を引くべし。本不生無相不可得なりと覺るを以ての故に、此の等空の心を得れば、清淨無分別等なり。○如上は但空なるに非ず、即ち智生することあり、謂はく、菩提なり。慈悲を發起して、諸の世間に隨順すべし。

○如上等虚空の心は不可得なきに非ず、而も實に其自性あり、謂はゆる空の自性と此即ち不可得なり、起其深中道不思議畢竟不可得の空なり故に但空に非ず。

唯想の行に住するを、即ち名けて諸佛とすとは、謂はく、如來は、諸法は本より不生にして、本より所有なしと了達したまへども、世法に隨順して衆生を度せんと謂ふが故に、有なり。有とは謂はく、普門示現して、種種の方便を以て、衆生を利する事

○空、空性、空の性は但空の空性なり。

なり。機感の因縁に従ふが故に、有なれども本より所有なし。衆生の性は、本性所有なし、修行に由るが故に、此の衆生の性の本性空寂なるを知る。是の性空を覺知するに由るが故に、唯だ名字のみありて不可得なり。謂はく、○空なり、空性は唯だ名字のみありて、畢竟して求むるに不可得なり、此れ即ち是れ不可得空なり。劣慧の者の是の空性を執して、以て實有とするが如きには非ず。衆生を觀すること、諸の虚空に同じ、虚空の本性は、觀照を離れ、一切の忘念戲論を離れたり。是の如く虚空を了知するに於て、即ち眞言の理を知る、是の空法を取るべからず。此の虚空は不可得なるを以ての故に、是れ都て所有なきには非ず、實には其の自性あり。謂はゆる空の自性と、即ち不空なり。當に知るべし、此の不空とは、即ち是れ虚空等の心なり。虚空等の心とは、即ち是れ淨菩提心なり。此の淨菩提心によりて、大悲心を生ず。然る所以は、行人是の菩提心を了し已りて、是の念を作す、一切衆生皆悉く是の如く、具さに無量の如來の寶藏あれども、而も自ら覺知せず。是の因縁を以て、唐しく^む疲苦を受けて利益なしと。菩薩は此の因縁を以ての故に、大悲心を起すなり。此の心を了知せざるに由りて、即ち生死浩然として、輪廻已むことなし。了知するは即ち是れ菩薩なり。

一、三、亂脫

(二)唯心等 以下阿字の自然智に結歸して釋す。

(三)空空 自證の大空なり。

(三)心 菩提心なり。

二、亂脫

り。菩薩は、一切衆生にみな可覺の性あれども、自ら悟ること能はざるを以て、是の事の爲の故に大悲を生じて、將に方便を設けて、救護を加へんとす。即ち此の大悲を以て、無盡の衆生の垢を除かんが爲の故に、世間に隨順して、方便を設けたまふ。無盡衆生界の種類、若干の性欲根縁、展轉差別なるを以て、菩薩彼れに順じて之を化導したまふ、故に隨順世間と云ふ。

(三)唯心の想に住するを、即ち諸佛と名く、當に知るべし、想より造立し生ずとは、謂はゆる空は想中より之を建立す。唯心に住し已りて、還つて此の唯心を得て、一切の法を建立す。此れを觀じて空空とすとは、意は謂はく、(三)空空の號は觀によりて有なり、亦但し名のみありて、空は(三)心より生ず。數を下す法の轉ずること、一二三より分異すとは言はく此れを一二此の分は去聲なり。勤勇、彼の空も是の如く、乃至增長すること次第の如し、即ち此の阿字等なりとは、想は言はく、唯想の義なり。上に此の阿字は即ち是れ想なりと云へるが如し。亦自然智とは、是れ佛なり、謂はく、佛に加持せらるゝなり。(三)若し想より造立するをば、空不空なりと觀察し、數を下すの法は轉じて彼れ一二三より始とし、分異す。勇士、彼の空も是の如く、乃至增長すること、其の

四、亂脫

(二)法相家 瑜伽論第十七卷、辨攝論第十五卷、中邊論卷上等に内空外空等の十六空を説く。
(三)大般若 大般若經第四百四十一卷に十八空を説く。

次第に隨ふ。阿字は此れ首の字なり、相應加持する自然の智なりとは、經文なり。前に虚空の心を得と説くは、即ち是れ菩提心生ずるなり。菩提とは覺なり。此の心豈に是れ空ならんや。而も實には恒沙の功德を具足せり。如來無量の功德を具すと雖も、而も無相無名にして顯示す可からず。(二)法相家には十六種の空を説き、(三)大般若には十八種の空を説くが如きは、みな此の義を明さんが爲なり。若し但空にして、都て所有の性なくば、云何が是の如くの不思議神變の徳を成就して、衆生を度せんや。當に知るべし、此の空は是れ自證の理なり、想既に空にして所有なければ、名も亦是の如し。是の處は示す可からず、言辭の相寂滅せり。若し是の如くの自證の法を以て、凡愚の爲に之を説かば、終に得可からず。當に知るべし、此れ但し空の名のみあり、十八空の中に於て、最も其の上により、即ち是れ諸佛の大空なり、實には不空なり。此の中の算數喩とは、猶ほ世間の人の算を下す法の如きは、最初に一の字を畫し置き、以て其の本とす。西方の算はみな土の中に於て之を畫す、乃至億載阿僧祇等も、みな是れより生ず。然るに最初に未だ算を下さざる時は、本是の數なし。此の空地の本無の算數の中より、一の算を下し、若しは二、若しは三、乃至無量なり、乃ち算へ畢りて、衆位

を除去すれば、還つて空なること本の如し。然も校計する所の數は、算を下す者、心に自ら證知して、宛然として失せず。本無の中より數を立つ、今已に本の如くして、而も實にはあることなしと雖も、然も數法は心に持在して、失ふ所なし、即ち是れ不有にして有なり、有にして不有なり。今此の阿字門も亦是の如し、本不生の中より、世間に隨順せんが爲の故に、次に隨ひて身の無量の法門を出す。是の無量の方便を出すと雖も、然も亦阿字の本性不生の義に異ならず、猶ほ彼の數の一を離れざるが如し。初の算法一より起るを以ての故に、一切の數法はみな一を離れず、乃至一萬も即ち是れ萬と一と相離るゝことを得ず。餘の一切の數も解す可し。今此の一切の法、阿字を離るゝことを得ざることも、亦是の如し。然もある論師、又また喩を引く。猶ほ蟲の行くに無量の蟲ありて、相隨ひて斷えずして通徑を成し、或は種種の方圓屈曲等の相あり。若し離して之に異にすれば、各各に自らはれ一の蟲にして、また曲直長短等の相なきが如しと。今此の法も亦爾り、畢竟自證不思議空の法の中に於て、一切の功德を具す。然も縁によりて生じて本性あることなけれども、一の本不生の理を離れず。此の阿字を首として、相應加持する自然の智なりとは、自然智此の字門を加持す

るに由るが故に、無量の語を生ず。語に無量の聲あり、聲に無量の理あり、即ち彼の數の一に一切に遍せるに同じ。大空も亦爾り、一切の法を具して、一切法に遍せり、此の阿字も亦然り、一切の眞言門は、みな阿字によりて有り、猶ほ萬像の空によりて有るが如し。ただに一切の字を生ずるのみに非ず、即ち此の所生の字の、一一の門の中より即ち不生の理を顯す。

(二)次に、秘密主、此れを觀すれば、空中より流散し假立す、阿字に加持せられて、三昧道を成就す。秘密主、是の如く阿字は、種種に圖位を間布せり、(三)乃至有形無形、有相無相、一切阿字に従ふと云ふは、置位とは種種の莊嚴を謂ふ。觀とは、秘密主をして此れを觀せしむるを謂ふ。謂はく、種種の形像莊嚴に住して、其の位を分列せり。此れ諸法本不生の故に、自形を顯示すとは、自形は即ち是れ阿字なり。自形の中に於て、本不生を顯示するなり。阿字は是の如し、秘密主、種種に位を置き、間布すれども、我れ觀するに、不生に住して、諸法自形を顯示すとは、是れは經文なり。(三)此の阿字を觀するに、空中に於て世間の萬像を流出す、一切世間みな此れより生ず、然も本不生なり。(四)阿字(五)假立し(六)加持して三昧成就すとは、三昧を證し、般若

(一)次に等以下は三昧道を成就する義を釋す。
(二)乃至法類多きが故に乃至と云ふ。
(三)此の等諸法皆阿字より生ずることを釋す。
(四)阿等福智の二皆阿字より生ずる義を釋す。
(五)假立阿字本不生の體の上に於て生起する定慧因縁和合の故に假立と云ふ。
(六)加持此れを持歸せしめて毘盧遮那に同ずる義なり。

(一) 此の等 阿字より種々の色を生ずることを釋す。
 (二) 及び等 阿字より大目を得ることを識る義を明す。
 (三) 上來等 阿字即ち自身形なる義を示す。

一、三、二、四、亂脫
 (四) 次に等 以下は異門に從つて本不生を説く。その中初には阿字門に約して其字の不生を説くなり。

を具し、萬行を成ずること、皆此の阿字により、福慧圓滿を得ること、皆此の阿字門による。(一)此の字能く種種の色を生ず、謂はく、青黄赤白黒なり、乃至雜間して無量の種あり。及び種種の形あり、謂はく、三角方圓半月の類なり、(二)及び本尊等の無量の不同あり。若し此の中の眞實の義を識るときは、體を擧りて阿字の門に入り、毘盧遮那に同じからすと云ふことなし。(三)上來所説の阿字門は、即ち是れ自身の我を顯示す、即ち我の自身は本不生なり、亦無滅なり。不生不滅とは、即ち是れ如來の身なり、當に是の如く觀察すべし。故に阿字は自形を以て、其の徳を顯示すと云ふ。

(四)次に、或は無所得の義なり。(一)嚩字形より不可得の義顯示すとは、此の嚩は本不生を證するを以てなり。(二)嚩字形を現すとは、此の嚩は即ち是れ下の文の、言語道斷の義なり。此れは何の義をか明す、佛言はく、阿字に具さに一切の功德あり、或に直に阿字門によりて、本不生を以て之を顯説し、或は異門によりて之を顯す、即ち是れ嚩等の諸字門なり。其の義異門にして亦殊ありと雖も、然も示す所の、我の自身の本不生の義は、異なることなし。若し法の一も是れ生ずることあらば、即ち是れ可説の相なり、言語道斷の法に非ず。嚩字は言語斷え、心行滅するを以ての故に、阿字門に入る、阿字を以ての故に、即ち知る、此の嚩は説き示す可からず。以下は皆是れ異門の相なり。

(一) 或は等 以下は阿等の二十字に約してこれを釋す。
 (二) 迦等 諸字の横畫を其字の點とする義なり。

(三) 或は等 此より以下は本文は經文細註は隨釋と見えたり。

(一)或は一切法の中に、造作を離る、が故に、迦字形を現すとは、此れは即ち一の阿字門を明す。然も一切法本來無作なることを明さんと欲するが故に、此の迦字を現すなり、然も此の迦字は、即ち阿字の義を明す。(二)迦字の如きは、若し上に横の畫を置かざれば迦字の聲を成さず。成らざる所以は、迦の中に阿の聲を闕くを以てなり、此の迦字の上頭に即ち阿の形あり、當に知るべし、此の百字も皆爾り、下は例して解す可し。若し阿の聲、中にあることなければ、即ち口を開かざるを以て、亦自ら聲あることなし。

(三)或は一切の法、虚空に等しきが故に、佉字の形を現す。或は行不可得なるを以て、哦字の形を現す。或は一合相不可得なるを以て、伽字の形を現す。(阿頼耶は一切染淨含藏の義。或は諸法離生滅の故に、遮字の形を現す。遮は正翻は即ち是れ死滅の義なり。或は諸法は無影像の故に、車字の形を現す。世間の法の日と樹等との和合により。或は一切法生不可得の故に、若字の形を現し、或は一切法は戰敵を離れたるを以て、社字の形を現す。此れは是れ有彼の義なり。此彼あれば即ち戰敵あり)

(一) 此中等 以下自在の義を釋す。
 (二) 王者 王は自在を名とし高貴を義とす故に王の譽を以て自在の義を顯はすなり。
 (三) 是等 以下乳字を本尊とする義を明す。

(四) 明等 以下乳字より迦等の多字を生ずることを述べて法々普く周廻する義を明す。
 (五) 字輪 上の字輪品を指す。
 (六) 無相等 以下無相の聖衆相を現すことを明す。

を以て加持する力に由るが故に、能く一切の法を攝して成佛す。(一)此の中の自在とは、梵音觀自在の自在と異あり、此れは是れ攝取の義なり、謂はく、能く一切法を攝取するなり。(二)王者の其の境内に於て、意に隨ひて攝取するに、みな自在を得るが如く、如來の法王も一切の法に於て自在なること、亦是の如し。(三)是の故に此の字を最も尊とすとは、言はく、此の字は即ち是れ尊なり、即ち天たり、神たり。天とは衆中の首なり、此の字も亦是の如し、一切の法の中に於て、最も其の尊たり。猶ほ世間の地居の中には、帝釋を第一とし、諸の世仙聖の中には、梵王を第一とし、諸の聖智の中には、佛を第一とするが如く、此の阿字は一切眞言門の中に於て、最も第一たり。此の一字に由りて無量の功德を成すが故に、無上なり。明とは即ち眞言の別號なり。(四)明法普くみな字を圍遶すとは、謂はく、一字より亦無量の字を生ずるなり。無量の明周匝し圍遶すること、前に説く所の(五)字輪の如し。是の如く圍遶することありと雖も、體は即ち空にして寂滅無相なり。(六)無相の中に於て相を見る、即ち此の相の中にして相を離れたり、又無相の中に於て、去來等の事あることを現じて、普く世間に應ず。當に知るべし、皆是れ眞言不思議の加持の力なり。此の阿字を以て自身を加持するが

(一) 尊等 尊とは最尊の義なり故にこれ第一義なり文に義と云ふは第一義を指す。
 (二) 字等 第一義は字の上の徳相なるを云ふ。文に相と云ふは徳相の義なり。
 (三) 前品 阿闍梨眞實智品を指す。彼品の細文に阿字を種子と名く、此れを諸の支分に安布するを名けて如来菩薩等とす。今彼を指すなり。
 (四) 阿等 一切の聲は阿字に依りて生じ、能生所生本來共に虚空に同じきことを明す。

故に、即ち空に同じ。此の空の中に於て、一切の佛法を成就すること、猶ほ世間の萬物の、空に因りて成ることを得れども、空の本体は無相なるが如し。無相の中に於て、種種の形聲を現す。(一)尊とは是れ義、(二)字とは是れ相なり、即ち(三)前の品の義と同じ。聲は字より出で、字は眞言より生ず、眞言果を生じて成就するは、一切救世者の聲なり。聲は字より出で、字は眞言を生じ、眞言は果を成立す、諸の救世者の所説なり。當に知るべし、聲の性は空なり、即ち空の造作する所なり。一切衆生の類は、言の如く妄りに執す、空に非ず亦聲に非ず、修行者の爲の故に説くなり。空なり空の所作なりと知れば、世間の一切の隨類、是の如く妄執す、彼れ空に非ず及び聲に非ざれども、修行の故に説く、即ち聲の通達に入りて、即ち三昧を證す、法に依りて置きて相應し、字を以て照せ、阿字の句は多種の眞言を想へとは、經文なり。(四)阿字に依るに、虚空に同じ、當に知るべし、本來諸相を離れたり、相を離れたれども、而も來去の相あり。阿字に従りて聲生することあれども、阿字は既に本より空なり。所以は何にとなれば、此の聲は衆縁によりて而も有り、謂はく、喉舌唇等の衆縁相觸るるに依りて、聲生することあれども、但し衆縁に屬せり、自性あることなし。而も此の能生

の衆縁も、亦縁に従ふことを得たり、當に知るべし、即ち是れ本不生なり。而も因縁を以て眞言生ずることあり。眞言は即ち果を成就することあり、是の如きは即ち救世者の所説なり。

(二) 若し等 聲と空と相依ることを明す。

(三) 若し等 聲と空と次第相釋す。

(三) 二 聲と空との二なり。

(二) 若し此の聲を識れば、即ち空と等し、空に従りて有り、聲は字を表す、空と聲と相依ると、若し此れを知れば、所作の世間の事業、其の相萬端なれども、みな阿字門を出でず。世間に隨順するを以ての故に、分別して起ることあり。了せざるは此れに依りて種種の憶想執取の心を生ず。然も實には虚空と及び聲と、二つ俱に離るるが故に、即ち是れ眞言行者の爲の所説なり。(三) 若し了知すれば、即ち此の偈は互相に釋するなり。即ち聲の解脫に入る。是れは謂はく、聲に於て自在を得、本性空を了知して、即ち三昧を證す。聲は空を表し、空は縁を示すを以て、互相に釋するなり。此れは(三) 二つ俱に空なる中に入れしむ。聲と耳と即ち空なり、即ち此の理に即ち萬徳を具す。空と聲と等しと識るを以ての故に、即ち眞性の理に入る、眞性に入るは即ち是れ三昧に住するなり。此の三昧と相應するは即ち是れ法なり。更に本不生なりと雖も、一切の法を生ず、即ち百字輪、青黃等の種種の色、方圓三角等の種種の形、乃至無量の不

(一) 自他皆空 生を自とし、所生を他とす、これ即ち能生所生俱に空なる義なり。
(二) 此等 字を以て明とする義を明す。
(三) 亦等 列字を以て例明して諸字を知らしむるなり

可説等の差別の相、此れに依りて照明す。(二) 自他皆空なり、空に従りて理を立つるは、皆是れ加持の用なり。進入する者は通達す。斯の理に住するに由りて、即ち是れ三昧に住するなり。此れを證し、法に依りて置きて相應すべしとは、此の相應は和合に作ることも亦得。置と布と同じ。(三) 此の字を以て照明を爲すとは、照明は其の徳を成すを謂ふ。(三) 亦復阿字等類とは、意は一切の字を例す。多種眞言想とは、想は謂はく、分別する所ある義なげ、此の一字に例して、一切の眞言の義を解すべし。想をば改めて分別とすべし、種種の眞言の名とは、謂はく、一字の中に由りて、無量の義を現し、無量の説を現す。一切衆生類の中に於て、各無量の言語を現すこと、皆此の一字より生ずるなり。此の中に於て衆多の眞言の名を立つ。此の理を現證すとは、法に依りて相應の字を置く。即ち是れ上來の一字の中に無量の字を置く、形色各異なり、百字輪等の如し、皆此れに依りて現す、是の如く照知して之を觀察すべし。當に知るべし、阿字に無量の義あり、無量種種差別の眞言も、亦是の如し。此の字義は乃ち是れ本よりこのかた佛佛道同にして有り、此の眞理の字義、及び此の自然の慧を成す妙門と、眞言等の行は、世間の人の立つる所に非ず。此れ即ち如來自然智の門なり。是

れ他の起すにも非ず、亦如來、一類の衆生の爲の故に、創めて立てたまふにも非ず、乃ち佛佛道同にして、法位常住なり。本より自成なりと雖も、亦要す因縁方便を以て、乃ち明白に顯現することを得。

(二)此の中にはただ一字を明せども、然も百字法門みな知る可し、故に百字門と言ふ、謂はく、一字を擧ぐるときは、則り百字知る可きなり。

此に百字法品竟る。(三)法は謂はく衆多の義なり、達磨の義法には非ず、謂はく百字(三)最後の巻と并に第二の私記と、經の初品に入りて少許となり。

菩提性品第二十四

(五)菩提性品は即ち百字法品の中の義を騰げて、喩を説くなり。故に經に云はく、猶ほ虚空の方の如し、猶ほ虚空の一切の方に逼じて、依として常なるが如く、是の如く一切の法の眞言救世者も、常に一切に逼じて所依なし。亦是の如く眞言救世者も、一切の法に於て所依なきこと、猶ほ虚空の物烟雲等を見ゆると雖も所依なきが如く、謂はく空等に一切日月烟雲等を、物等は彼の空に依らず。眞言救世も亦然り、彼の所依に非

(一)此中等、以下は通妨なり、謂はく當品には上來の如く、何れが故に百字品と名くるぞと疑妨すべし、故に今これを會通するなり。(二)此注文は法に二義あることを示し、今品の百字法と云ふの法は衆多の義にして達磨の義にあらざること明す。(三)最後等、この了簡に就きては異説多し、暫く一義によりて云はば、菩提性品は第六卷二私記とは疏第二卷なり、即ち十種の説を指す、初品とは住心品なり。當段の釋と他三處の釋と前後相成して心得ふべしとの義なり。

(四)菩提性品經には説菩提性品あり、前品に已に眞言の無相を説きしが、今更に虚空を以て喩とし之を説くなり。品號の中菩提性とは眞言の果體にして、眞言子門一切智を指す此品の中經文亦多分は未會の文なり。(五)菩提等、當品の來意を述ぶ。(六)猶等、喩を擧げて救世者の衆徳を顯す。

ず。教に説くが如く、世の極成する所なり。虚空は三世を遠離せり、眞言救世者も亦三世を離れたり、眞言救世者も虚空に同じく、三世等を離るとは、經文なり。猶ほ虚空は一切の方所に逼じて、一切の萬有は皆之に依りて成立することを得れども、然も虚空は所依なきが如く、是の如く一切の眞言は、皆此の眞言救世者に依る。此の見は是れ現見なり、現量に烟雲を見るに、空に染せざること亦然り。唯だ名と行とに住して、作者等を遠離せり、虚空は假名等なり等とは、謂はく、種種の假名あり、謂はく、世人説きて虚空とするは、ただ是れ假名なり。導師の宣説したまふ所なりとは、而も此の眞言は、本不生の體なり。教に所依なくして、彼の虚空の一切處に遍せるに同じとは、又世間に虚空を觀るに、所見ありと謂ふとも、而も實に虚空は一切の觀を離れて、眼と對せざるが如し。虚空に約すれば一切の相を具すれども、而も此の空一切の相を具するにも非ず、空も亦彼の相の中に入るにも非ず、自他俱に離れたり。當に知るべし、此の眞言救世者も亦是の如し、虚空と異なることなし。有せざる所なしと雖も、畢竟清淨にして、體虚空に同じ。虚空に同じく畢竟清淨にして、法の得可きことなしと雖も、有せざる所なく、成さざる所なし。又虚空の三世を離れたるが如

し、即ち過去未來現在なり。眞言も亦爾り、世間に隨ふが故に、三世ありと説く。謂はく、當修・已修・正修、當證・已證・現證の類なり。而も眞言の體は三世を出過して、虚空に等同なり、況や世人に隨順して三世を説かんや。救世者は謂はく、空を分別して種種の法を見る、此の法既に本不生より生ず。當に知るべし、此の體も亦根本に同じ。

亦唯だ名行に住して、諸の作者等を離れたる虚空は、假名字等なり、導師宣説したまへり、名の所依の有に非ず、虚空の如く眞言も亦然り、眞言は自在なり、此の字を見るとは、經文なり。虚空の如きは唯だ名行に住す、此の行は亦是趣と云ふ可し、謂はく、名趣のみあり、謂はく、唯だ名の趣、亦是名是れ趣なり。唯だ名趣を立つ。今謂はく、即ち是れ言語の義なり。虚空假名等とは此れ等は是れ世間に順ふ假に施設するなり。故に此の名を立つ。前の偈には、空は但し名あるのみと云ふ、(二)後の偈の意は云はく、此の名も亦空に同じく、不可得なり、唯だ名字のみありて不可得なり、作者を離れたり。世間の人の如きは、分別戲論の相を以ての故に、是の空相を取りて以て實有とし、種種の妄計を生ず。或は言はく、虚空は是れ常なりと、或は言はく、衆色の圍む所、此の孔穴の

(一)前偈 初偈の
中の第三句なり。
(二)後偈 次の偈
の第二句なり。

中は是れ虚空等なりと、或は言はく、此の空は作者の處に依りて生ずと、此れ等の諸見無量無邊なり、經論に廣く説けるが如し。要を以て之を言はば、皆斷常二見を離れず、乃至世の小乗の師も、亦空法を立てて以て實有とす。是の因縁を以て、無量の過失あり。名も亦所有なし、亦虚空に同じ、眞言主も亦然り、見に假名に住せり、謂はく、無量の假立なりとは、諸非云云たり。淨穢の受生に非ず、或は果も亦生ず可からず。此は或は是れ多種の義なり。諸の果も亦不生なり。若し是の如く等の種種の世の分別なく、彼れに於て常に勤修して、一切智句を求むとは、謂はく、此れを志求するなり。今此の中に虚空と云ふは、即ち是れ不可得空なり、即ち是れ大空の空なり。亦また空とは、たゞ名字のみありて、實體は即ち不空なり、空と不空との相を離れたり。導師方便を以ての故に、假に言説を以て、以て衆生を開悟したまふ。然も亦空の名も亦不可得なり。若し名の存す可きことあらば、即ち是れ有相なり。有相ならば即ち心生滅して實智に入らざるべし、云何が阿字自然の慧、實相の智と名くることを得んや。空の所依なきが如く、當に知るべし、眞言も亦是の如く、畢竟じて所依なし。佛方便を以て、衆生をして普く佛慧に入らしめんと欲して、空より假を立て、此の假に

依りて、理に至らしむ。空既に本體無生なり、空に従りて依る所の假、何に従りてか有らん。當に知るべし、是れ實見を生ず。是の如くの知見は、即ち是れ菩提の性なり。菩提性とは、眞言を離れざるのみ。此の眞言の義は、即ち是れ菩提なり、此れを離れて外に、別に菩提ありといはゞ、是の處あること無し。

(二)火等 以下十
四非を擧ぐ。

(一)火水風地に非ず、日月等の執に非ず、晝夜に非ず、生死に非ず、損傷に非ず、刹那牟呼栗多に非ず、年歳等に非ず、成壞劫數に非ず、淨に非ず非淨に非ず、受生果或は亦不生なり。若し是の如く等の分別種種の世所なくば、彼れに於て勤修し、當に一切智句の樂欲を作すべしとは、經文なり。言はく、(三)眞言の性は、地水火風等に非ず、虛空の地水火風に遍ぜるが如きは、此の四は空に依りて一切の事を成せども、空は依なし。此の眞言の中の、地水火風等の不思議の用も、阿字門に依れども、此の阿字は、地水火風の句にも非ず。日に非ず、月即ち九執等の曜に非ずとは、みな世人の所立なり、眞實に非ず。(四)今此の菩提の性は、明無明等の差別もなし、云何が晝夜の異なることを得んや。(五)因縁を離れて實相常住なり、即ち是れ大日如來の體なり、云何が生死を離れざらんや。害とは是れ損傷の義、亦是れ衰耗の義なり。而も此の眞言

(三)眞言性 咒字
を指す。

(四)今等 經文の
非晝夜を釋す。
(五)因縁等 經文
非生死等の釋なり

の性は常恒無變にして、諸の衰惱變耗の事を離れたり、時分・劫數・成壞の相あることなし。當に是の如く、正しく眞言の性を觀じて、妄執に依らざるべし。乃至劫初の時も成らず、劫盡の時も壞れず、其の本も始なく、其の末も終なし、故に劫數分等を離れたり。有せざる所なきを以ての故に、淨に非ず、畢竟空の故に、非淨に非ず。一切衆生は此の阿字を以て、而も一切垢穢の法を具す、如來は即ち此れを以て一切の功德を成す、故に淨に非ず、非淨に非ざるなり。若し觀に従りて生ずと言はゞ、所觀あり、所成あるを以ての故に、行に隨ひて生を受く、眞言はみな此れを離れたり。乃至淨觀の功德に従り、無量の功德に従りて、意生の身を受く、亦また皆無なるが故に、受生の果もなし。此れ等は皆是れ有所得の法なるを以て、眞言の性は自然實智にして、一切の法に於て都て所得なし。當に知るべし、如上の種種の分別は、眞實の見に非ず、其の數無量なり。要を以て之を言はば、眞言の性は、皆是の如くの世間分別の見を離る。若し此れを了知して、是の如く眞言の行を修するは、即ち是れ一切智の句なり。樂欲とは、意に隨ひて即ち成すなり。句は是れ住處の義、一切智の住處なり、即ち是れ佛住なり。當に知るべし、菩提性は虚空に等しく、空は菩提の性に等し。菩

(二) 彼等 第三心を明す、これ利他大悲の心なり。

離るゝ、是れを第二の心と名く。菩提の相の無分別三菩提の句なり。秘密主、(二) 彼れ實の如く見已りて、無盡の衆生界を觀じて、悲自在にして轉ず。無縁の觀を以て菩提心生ず。謂はゆる一切の戲論を離れて、衆生を安置して、みな無相菩提に住せしむ。謂はく、此れ大悲願なり。是れを三昧耶の句と名くとは、此の三の中に、最初はただ能く發心し、誓ひて成佛せんと欲すれども、然れども未だ正しく如來の功德を觀すること能はず、何れの法を以てか、成佛することを得と了知すること能はず、未だ具さに觀照の慧あること能はず。但し求佛の心のみありて、而も未だ自己の身の本性に何の功德ありと了達すること能はず。但し此の慧性のみあり、能く生死の中に於て、最初に發心して佛果を求む。此れは是れ初の三昧耶なり。此の心より後、如實智生ずることを得。謂はく、能く慧を以て決擇して、此れは是れ功德、此れは非功德等の、是處非處邪正の相を了知す。如實の智を得るを以ての故に、能く無盡分別の妄見の網を離れ、善く諸の戲論を滅して、眞實相の中に安住す。然も此の實智は、即ち是れ菩提心なり。三昧耶は是れ等の義なり、然も此の心等しく發るを三昧耶と名く。初心には、未だ實智を具せずと雖も、然も亦成佛して人を度せんと誓ふ、即ち是れ等心なり、故に亦三昧耶の名を得るなり。此の心より第二心相續して、無間無障の故に、次に即ち此の眞實句の中に於て、眞と假とを了し已りて、一切無盡の衆生に於て、大悲心を起す。是れ第三の三昧耶なり。一切衆生は皆同じく此の性あれども、而も自ら了すること能はざるを以て、生死を受けて輪廻すること無際なり。我れ今已に自ら覺了す、當に普く佛の慧光を開きて、悉く我が如くならしむべしと云ふ、即ち大悲なり。實を見るに由るが故に、實に自ら除くにも非ず、外より法ありて身に來り入るにも非ざれども、妄を除く時、實相自ら顯る。(三) 上に此の經を説くに、三句の義あり。菩提心爲種子は、即ち初の句なり。大悲爲根は、即ち第二なり。前には大悲を以て根とし、今は乃ち第三に居ゆることは何ぞや。此の中には照了を以て根とし、能く是非を照了するを以ての故に、方に能く悲を生ず、義相成するなり。第三の方便爲究竟、此には大悲と云ふ、亦相成するなり。大悲を興すに由るが故に、方便を施して一切を攝す、此の三事、初より後に至るまで、相續不間なるを、三三昧耶と名く。眞に住して妄を了するを以て、彼の衆生の爲の故に、大悲を興して、一切衆生の戲論を除く。此れより以後、即ち方便を以て佛事を作す。戲論とは、世の戲人の散亂の心を以て、種

(二) 上等 以下問答決疑なり。上とは住心品を指す。

國譯大毘盧遮那佛經疏卷第十九

に次承して、また所生あり、謂はく、三乗を示説し、廣く佛事を作して、衆生を導引す、所作辨じ已りて、涅槃に入り、涅槃の後に於て、また無量の衆生を成就す。謂はく、一類の衆生、佛の在す時には、未だ發心すること能はず、佛の滅度に因り、或は像法の中に於て、乃ち成就する者皆是れなり。

(一) 秘密等以下
三々昧耶の修行の
法則を明す。

(二) 秘密主、彼の三三昧耶を觀じ、諸の眞言門を知りて、秘密主、彼の三三昧耶を解了し、諸の眞言門に菩提の行を修する諸の菩薩を觀ずべし。眞言法則に於て而も成就を作して、彼れ一切の妄執に著せざれば、能く障礙を爲す者なし。此れに對するに異名あり、爲く、不欲と懈怠と、無利の談話と、信心を生ずること能はざると、資財を積集するとを除く。また二事を作さざるべし、謂はく、諸酒を飲むと、及び床の上に臥すとなりとは、行を修行する菩薩の、眞言法則を、持誦して彼れ一切の妄執に着せずして住すれば、障を爲す者なしとは、經文なり。佛金剛手に告げたまはく、上來の所説を觀すべし、みな三三昧耶に住するに由りてなり。此の三昧耶に住して、法の如く持誦するに由りて、心心間らず、謂はゆる一切の妄執に着せざるなり。妄執に由るが故に、諸障生ずることを得、若し此の三平等に住する者は、即ち一切の妄執に着せ

ず。即ち此の三平等とは、即ち是れ菩提なり、諸障何に由りてか生ずることを得んや。此れは即ち是れ一切の障を離るる大宗なり。また餘の障生ずる由あり、謂はく、不欲とは、即ち此の眞言行の中に於て、障あるを以ての故に、頓爾に樂欲するに由なきこと爾り。或は不欲の心生ずるに由るが故に、障之に入ることを得るなり。不欲とは、即ち是れ願求せざる等なり。懈怠とは、勤進せざるを以ての故に、火を鑽るに未だ熱からざるに數々息むが如し、即ち障之に入る。又無益の談論して、眞言行に於て念誦せず、勤めて修行せず、此れを以て虚しく時日を度るも亦爾り、障其の便を得。不信とは、不信に由るが故に、障便を得るなり。又廣く資財を聚むるとは、求むる時には紛動して守護し勤勞し、失ふ時には苦を受くるを以て、是の如く等の種種の因縁を以て、行者をして、障の爲に便を得られしむ。以上は皆是れ障の生ずる緣なり。また二種あり、謂はく、酒を飲むことを得ずとは、酒は是れ障を生ずる緣、此れ第一なり。飲酒を以ての故に、諸の不善生ずることを得。又床の上に臥さずとは、此れ第二なり。床の上に安寝すれば、種種の欲心・放逸の相を生ずるを以ての故に、得ざれとなり。當に草の藉しきものを敷くべし。西方の持誦者は、多く吉祥茅を用ひて籍とす。此れに多くの利益あり。一には、如來成道の時に坐したまふ所なる

を以ての故に、一切の世間以て吉祥とするが故に、持誦者之を藉けば障生せず。又諸の毒蟲等、若し此れを敷けば、皆其の所に至ることを得ず。又性甚だ香潔なり。又此の草極めて利く、身に觸るれば便ち破る、兩刃の形の如し。行人持誦の餘暇に休息する時、此の草藉に寝るに、若し放逸にして自ら縦なれば、即ち爲に傷らる、故に縦慢なることを得ず。又佛自ら此の草を藉きたまふ所以は、世間の憍慢の心を除くが故なり。太子たりし時は、種種に放逸にして、寶床に坐臥し、寶几足を承けし等なり。若し出家しても猶ほ之を習はば、即ち本の在家と異なることなからん。此に能く是の如くの事を捨てて、草藉に坐したまふを以て、一切の人天みな敬心を生じ、亦方に慢心を除き、正法に入る。佛すら尙ほ此の如し、何に況や我れ等をや。是の如くの功徳を觀るが故に、修行するなり。

二、明如來品第二十六

爾の時に執金剛秘密主、世尊に白して言さく、云何が如來とする、云何が人中の尊、云何が菩薩とする、云何が説きて佛と名くる、導師大牟尼、願はくは我れ等の疑

（二）明如來品上
來諸品に於て如
來、菩薩、正等覺
等の名を明せども
未だその名義を述
べず故に今此品に
於てこれを説くは
四問あり。

一、四、二、五、亂脫
（二）次品、別品を
指すに非ず、此品
なり。次に如來
の答を釋せんと欲
するが故にしか云
ふ。

三、亂脫

を斷じたまへ、菩薩大名稱、疑慮の心を棄捨して、當に大乘を修行すべし、行の王として上あることなし。次に品に、金剛手、又佛に白さく、云何が如來、云何が人中尊、菩薩とは云何。その時に毘盧遮那世尊、諸の大衆の會を觀察して、執金剛秘密主に告げて言はく、善き哉、善き哉、金剛手、汝能く吾れに是の如くの義を問へり、汝當に諦かに聽き極めて善く作意すべし、吾れ今摩訶衍の道を演説せん。菩提は虚空の相なり、一切の分別を離れたり、彼の菩提を樂求するをば、菩提薩埵と名く、十地等を成就して、自在に善く、諸法は空にして幻の如しと通達す、此の一切皆同じと知る、謂はく、此の一切法は皆同じと知るなり、諸の世間の所趣を知る、故に説きて佛陀とす。法は虚空の相の如く、無二にして唯一相なり、正覺十力を具す、是れを三菩提と名く、唯だ慧をもつて害すとは、唯をば以に作るも亦得、謂はく、慧を以て煩惱を害するなり、自性言説なし、自證の智慧あり、故に説きて如來とすとは。云何が此れを覺らん、我が疑を導師除きたまへ、大牟尼、疑慮を棄捨せしめたまへ、菩薩大名稱、當に大乘を行すべし、行の王として上あることなきひととは、以上は問なり。意は言はく、佛上來に法を説き已りて、處處に佛或は菩薩と云へり。然るに我れ此れを開く

六 亂脫

(一) 大乘等 以下菩薩の名義を明す

と雖も、猶ほ未だ名義の相を決擇したまふことを蒙らず、何の義を以ての故にか、菩薩の名を得、佛の名を得、如來の名を得、人中尊の名を得たる。自ら父母の所生より爲るを、便ち此の號ありとせんや、徳成り行満ちて方に此の號を得るとせんや。大乘の王として、上あることなきとは、是れ佛徳を歎じて方に問ふなり。佛次に又善き哉と歎じたまふ、乃至其れに勅して諦聽せしめて、方に答ふなり。(二) 大乘の道は虚空なり、菩提は一切の分別を離れたり。若し彼れ菩提を樂求するを、菩薩と名くといふは、此れは菩薩の名を答ふるなり。虚空は相あることなし。菩提も亦是の如し、猶ほ虚空の如くして、無相無分別なり。又虚空は無相なれども、而も衆徳の所依なり、萬像之に依りて立つ。菩提も亦是の如し、畢竟して無相無分別なれども、而も一切の功徳を具す。如實の相に於て、欲求し證達する、是れを菩薩と名く。(三) 次に佛の義を釋す。十地を成ずることを得て、自在に善く通達し、法は空にして幻の如し、此の一切同じと知る、趣と行とを知れば、一切世間に於て佛の名を得とは、此れは佛の義を答ふるなり。謂はく十地を満足し、自在に通達す、一一の地の中に於て、皆善く通達して、而も自在を得て、諸法は空幻に同じと了知し、又衆生の深心の所行と、各各の趣

(三) 次に等 以下佛の名義を釋す。

(一) 菩薩藏經 第五卷なり 又十力の中にも廣く説

(二) 善く等 以下人中尊の名義を述ぶ。

(三) 唯等 以下如來の名義を釋す。

向とを知る。斯の徳あるを以ての故に、一切世間之を號して佛とす。佛の名字は斯れに因りて起るなり。虚空の相の法は、無二にして唯だ一相なり、十力の佛、是れを正覺の號と名くとは、亦佛の義を釋す。前にはただ、法は空にして幻の如しと知ると云へり、今は、虚空の法は一相にして無相なりと云ふ。即ち此の中の了達を以ての故に、十力を以て遍く一切の法を知りて、知らざる所なし、(一) 菩薩藏經の中に、十力の甚だ廣きことを説けるが如し。此の菩提は虚空の如くして二相なし、一相の中に於ても心に所住なし、此れを以ての故に佛の十力を得、正しく此の十力に住するに由りて、正等覺と名く。佛と正覺とは名號殊なれども、而も體一なり。(二) 善く身口意を調へ、攝伏すること自在なるが故に、能く諸魔を降す。ただ外魔を降すのみに非ず、内障も亦遍く之を降伏す。世出世の中に、以て尊たるが故に、また人中尊と號す、此の義は經の中に、文闕けて釋せず、餘文に是の如く解す。(三) 唯だ慧を以て無明を害し、自性の言説を離れたる自證智を、此れは是れ如來なりと説くとは、此れは如來の名を答ふるなり。此の慧は能く無明を害す、故に慧害と云ふ。無明と云はずと雖も、然も害せらるるは即ち是れ無明なり、其の義自ら顯る。此の自證の境界は、語言の道を出過せり。自

二、又等以下如去の名義を釋す。

二、護摩品には世出法品と題す。前法に於て其の智慧能く無明を斷ずる法門を説く。今此品に於て此法を説かず。其の作法を説く。即ち此品の中に先づ護摩の法を説き、次に四種の護摩を説き、次に世間の護摩を説き、次に正護摩と對辨して行者の用心を示すなり。

證は宣説して人に授與す可きに非ずと知るを以て、斯の如くの智に住するが故に、如來の名を得。又佛の理の如く、自然に證知するを名けて如來とす。二、又諸佛所行の道の自然證處の如く、我も亦是の如く去る、故に如去と名く。大本の中に具さに此れを答ふるに、各百餘の偈あり。傳法の者、但し其の宗要を略して、各一偈を以て之を答ふ。其の大意亦具れり。

三、護摩品第二十七

外典の淨行の圍陀論の中に、火祠の法あり。然も大乘真言門にも亦火法あり。然る所以は、一類を攝伏せんが爲の故に、佛草陀の事を以て之を攝伏す。然も其の義趣は、獨は天地の相並ぶ可からざるが如し。今其の邪正の相を分ちて、行者をしてまた餘の疑なからしめんと欲するが故に、傳法の人、此の品の中に於て、廣く緣起を出すなり。佛彼の未來世の中の、諸の行者の我慢の心を除かんと欲するが故に、自ら本生に梵王と作りし時、外の韋陀の法を演べたりと、説きて、彼の邪宗の心をして伏せしめ、然して後に此の真言門の正行を説きたまふとは、復次に秘密主、往昔に一時、我

五、九、亂脫

二、箴嘯句 才マ

六八、七、七、亂脫

れ菩薩となり、梵天に住して菩薩の行を行はずとは、即ち是の梵住は此れ梵天なり。時に梵天之を問ふ、大梵、火に幾種あるかを知らんと欲すと。時に我れ是の如く説きて言はくとは、謂はく、彼れに對して是の如くの説を作すなりとは、彼の火を我慢自然と名くとは、次に梵天子所生の火を、箴嘯句と名く、是れ世間最初の火なりとは、謂はく、我れ先世に、菩薩の道を行せし時、梵王と作ることを示しき。その時に諸の梵行の學者ありて、來りて我れに問ふ、火祠の法に幾種あるかと。我れに具さに之を説けり。今正覺を成じて、乃ち前の説を證して非とし、今の説を正とす。是の故に行者、當に今正行の火法に従りて、先の虛妄不正の法を用ふべからず。以下は次に邪宗の火祠の法を列ぬ、皆是れ韋陀典の中に明す所なり。先に火神の本を説く、最初は是れ大梵王なり。彼れ是の如く、一切皆我れより生ずと計することあるを以ての故に、是の如く我慢あるが故に、又自然常を計するが故に、我慢の名及び自然の號を得るは、即ち大梵王なり。次に梵天の子は即ち是れ梵王なり。意に衆生あらんことを念欲す、而るに彼れ念に應じて生ず。梵王己が所生の子なりと以爲へる者なり、此れは是れ彼の天の火の初なり。自然生の者なり。次に梵天子と云ふより以下の偈は是れ所生な

り。箴嚼句とは、此れは是れ世間の火の名なり。此れより已下は次第に相生せり、皆是れ彼の法の中の火神なり、但し供養するのみにして用處なし。梵飯子は是れ火天の名なり、即ち梵子の子畢但羅は又其の子吠稅婆囊囉は又其の子訶嚩奴は又子合毘嚩訶囊は又子箴說三鼻都又子阿闍末拏又子鉢體多又子補色迦路陶又子以上は皆供養の者なり。

胎を置く時に用ふとは是れ淨行者の初めて婦を娶りて胎を置く時、忙路多火を用ふるなり、此の火神の名を用て之を加するなり、火の名は經の中にある、此には出さず、下同じ後に深浴せんと欲する時とは、後に胎を受けて六月に、夫其れが爲に浴す、仍りて髪を結びて相とす。此の火神の名を以て眞言とするなり。縛訶忙囊火なり、妻を浴せしむる時に、嚩葉盧火を用ひ、生子の後とは、子を生まて七日の後に妻に浴す。父母髪を解くには、此の火神を用ふ。鉢伽補火なり。

立名時とは、其の子既に生るれば、仙人を請じ、作法して名を立つる時に用ふるなり。箴體無火なり、食する時には、此の火を用ふとは、謂はく、子能く喫食する時には、父母先づ此の火神の呪を以て、酥等を加持して、然して後に之を噉はしむ。韋陀には一一に方用あり。戌脂火なり。子の爲に髪を作る時とは、謂はく、子漸く長じて胎の毛髪を剃る時、朱茶の髪を留むるに、此の火神を用ふるなり。殺毘火なり。

禁戒を受くる時とは、是の童子漸く長じて、本族の戒を與へ持たしむる時なり。文闍草あり、此の間の箭竹に似たり、之を治りて繩と作し、三股線にして、身に繫け背に絡ひて、曲杖即ち古の三岐杖なりを持しむ。三謨婆嚩火なり。軍持をもちて鹿皮を被る、其の服戒に依りてなり。持戒にして十二年常に乞食す、赤銅の鉢を持ちて乞食するなり。是の言を作す、施す者あらば住まること少時せん、得ずば即ち去らんと。歸りて火鉢に至りて、食を分ちて三分になして、自ら浴し已りて、一分の食を取りて、火に供養し、灰を取りて三處を印す。父母師に參じ已りて、一分の食を以て其れに與ふ、隨ひて食ふと食はざるとは意に任す。然して後に自ら一分を食ふ。十二年の中に於て、勤苦して韋陀の法を學び、十二年を満ちて方に梵種を出づ、謂はく、妻を娶る。

禁滿ちて牛を施す時とは、謂はく、戒十二年に滿ち已りて、師の恩を報いんと謂ひて、物を以て報償し、并に特牛及び犢子を師に施すに、師受け已りて、又彼れをして婚せしめんが故に、妻を娶る因縁を説きて、告げて言はく、過去の初劫に、素里耶火三大梵王世間に下りて、牛の形と作りて姪欲を行ふ、因りて種類を生ず、此れに由りて婆羅門種あり。今此の母牛と子とは、即ち此れ其の遺體なり。汝宜しく之に

效ひて梵種を継ぎ存すべしと、乃至廣く説く。その時に此の火を用て彼れを加護す、
みな火神の名なり。

四、亂脫二

童子婚する時とは、然も彼の婚する法は、妻を娶る時、火神梵天の本呪を誦す。大意に言はく、梵天の本意云々と、乃ち牛の行を行ふ。瑜耨迦火を用ふ。

(二) 師波那迦には賊那易迦とあり。

一、三、二、亂脫一

造作の時とは、即ち以下は供養等の諸業なり。初めて此の法を受くる時、火神の名別なり、以後に造作する時、又事に隨ひて別に火神の呪等あり。(三) 師波那迦火を用ふ。供養天神とは、然も彼の法は、供養する時、銅を取りて椀を作り、柄あり、即ち華菓葉及び米等の諸食、之を満し盛る。其の法に云はく、一切の天神皆共に供養すと。(四) 蘇嚩句火を用ふ。謂はく、家中の井竈門戸堂屋の類の如き、一一に皆遍く處毎に一を持ちて、糧食を之に與へて、其の神の神呪を誦じ、乃至戸門に施し竟りて、餘食をば屋上に置きて、以て先祖等及び餓鬼に與ふ。

四、亂脫二

次に房を造るには梵火を用ふ。房等を造立するに亦須ふるなり。鉢羅羅梵火なり。法を以て之を加して、淨と成らしむ、然らざれば不淨なり。

若し惠施を行ふ時は、即ち其の本類に施すなり。此の淨行者には、三姓の語を與

一、三、二、亂脫

ず、物も亦之に與へず、但し自類に於て施を行ふ。施す時に此の火神の名を稱して、呪を以て之を加す、本意の云ふ。(五) 扇都火なり、爲はく此の物は梵天より得たり。今還つて梵天に施し、汝も亦梵天に施すなり。下の句は亦莎訶と云ふ。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十九終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十九

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第二十

沙門一行阿闍梨記

世出世護摩法品第二十七之餘

「羊を縛る」時とは、謂はく、戒已に滿ち、梵種已に出て、四姓已に具すれば、羊を殺して之を食ふことを得るなり。彼の法に云はく、梵天四種を生ずるが故に、妻を娶るに四姓の女を娶りて、各各に子を生ず、即ち是れ梵天四種を生ずるなり。然して阿縛河寧火を用ふ。生せる所の子に自ら優劣あり。其の羊を殺す時、首陀に生まるる子之に侍り、殺利に生まるる子之を殺し、毘舍に生まるる子之を割き、婆羅門姓に生まるる子之を食ふ。その時に當りて、亦真言を以て之を加す、此れ即ち婆藪仙人の造法なり。

「觸穢」の時とは、淨法を失ふを謂ふ、沙門の犯戒の如きなり。或は謂はく、ある時には、放逸にして覺らずして、人其の髪を截り、或は(二)身に絡へる繩を斷ち、或は(三)三奇杖を折り、或は食時に首陀の爲に觸るる等なり。自罰を懺悔せんと欲するに

(一)身等 婆羅門
八歳にして入門式
を行ふ其の時に授
けられたる三條の
繩なり。
(二)三奇杖 是れ
亦重要な拂淨式
に授けらるるもの
なり。

は、三二百同姓の者を集めて、大衆の中にして、微吠至火を用ひ、自ら悔ゆ。その時に諸の淨行者、同聲に言はく、日月諸天此の人を證知したまふ、今より以去、また清淨なること本の如くならん。時に懺する者、火を用て彼れ等を供養す。その時に此の火天の神呪を用て法を加するなり。

「熟食」の時とは、彼の法は凡そ食を作らんと欲するに、先づ生しき菜物等を取りて、此の火天の名呪を以て之を加して、淨を成して方に之を熟せしむ。若し謬りて作さざれば、則ち法を失ひて、淨食と成らず。婆訶沙火を用ふ。

「日天を拜す」とは、梵行の法は、日未だ出てざる時、合掌して東方にして日を望み、日出づれば拜謁して呪を誦す。此の火神の法を以て之を作す。合微誓耶火を用ふ。日の没せんとするに至りて、又西に向ひて之を送ること、上の法の如く、毎日に是の如く作す。又都集の處にして、多人同じく作すことあり。「月天を拜す」とは、歸り已りて月の出づる時に至りて、又家に於て又月を迎へて、禮敬するに用ふる所の神呪あり、亦別なり。彌地火を用ふ。

「滿燒」とは、此れは是れ火食を施す法なり。食を取りて一器に盛り滿て、罍中之

を焼くなり。阿密栗多火を用ふ。

(一) 枯萃 枯萃なるか。

「息災」とは、凡そ災の事を息めしむるには、此の火神の呪を用ひ、那嚕拏火を用ふ。「增益」とは、息災等の神呪を用ふ、言はく此の威猛なること、劫災の火の如く、其の勢威猛なり。訖栗且多火を用ふ。即ち火神の眞言の名なり。「除障」とは、即ち降伏なり。忿怒火を用ふ。忿怒火とは是れ神の名なり。「攝召」とは、謂はく、凡そ所求の事を成さんと欲し、及び人をして喜ばしむる等なり。迦摩奴火を用ふ。

「林木を焼く」とは、彼の法は林木等を焚くことを得ず、然るにある時に、稠林(一)枯萃せるを、之を焼きて更に新しく茂らしめんと欲するには、此の法を用ふるなり。使者火を用ふ。「暖腹」とは、謂はく、食し已りて、身中に火大ありて、其の食を消化せしめて、病なからしむる等に用ふるなり。其の眞言、社陀路火を用ふ、意は云はく、我が身を持つを以て、若し我が身より出づれば、即ち我が子なりと。薄叉火は即ち諸の火食等を授くるに於て用ふ。次に海中火を縛拏婆目佉と名け、劫壞の時の火をば瑜乾多火と名く。但し其の名を擧ぐるのみ、用處なし。淨行に在家出家あり。若し出家の者は、童眞の行より即ち山に入りて道を學び、乃ち五通を得るに至る、此

の妻を娶る等の法なし。右以上は皆梵行事火の者の、邪護摩の法なり。

佛、汝諸の仁者の爲に、已に略して諸火を説きつ、吠陀を修行する者の梵行傳へ讀む所なり。此の四十四種を、我れその時に宣説する所なり。正を顯さんが故に、騰出すること已りて、方に眞法を辯じたまふ。

(二) 秘密等 未會の文なり以下多分未會なり。

(二) 秘密主、我れ爾の時に於て、彼の諸火の性を知らずして、諸の護摩を作す、亦護摩の行に非ずと云ふ、以下は又偈なり。又業果を得るに非ず。十二種の火は次に之を説くべし。

「我れまた菩提を成じて、十二種火を説く。彼の火また云何とならば、智火を最も初とし、大因陀羅と名く」とは、佛の意は言はく、我れその時に大梵王となりき。諸の梵衆來りて我れに問ひしを以て、韋陀典に依りて之を演説して、彼れをして此れに依りて修行して、世の五通等の事を獲得せしむ。然も我れその時に未だ火の自性、及び其の業用を了せず。知らざるを以ての故に、當に知るべし、その時に作せる所の事は、善作と名けず、亦名けて護摩とすることを得ず。行に非ず、業に非ず、亦其の果を得ず。我れ菩提を成ずる時に及びて、方に火の自性と、及び彼の方便と、作果等を了す。謂はゆる火の自性とは、即ち是れ如來の一切智光なり。佛此の説を作したま

(二)淨行 婆羅門のこと。

(三)章陀 即ち吠陀は婆羅門の經典なれども、吠陀の義は元來智慧の義なるが故に、今は智慧と解すべし。

ふ所以は、諸の外道を伏して、邪正を分別し、彼れをして眞の護摩法を知らしめんと欲するが故に、諸の(二)淨行等は、所宗の章陀ベイダの典に於て、秘密なりと自ら謂ひて、慢心を生ずるを以て、今佛自ら章陀の原本を説きて、其の中に於て、更に正理の眞の護摩の法を顯したまふ。此れ佛の(三)章陀なり、當に知るべし、最も第一秘密の藏とす。彼れ聞き已りて、希有の心を生じ、即ち信解を生ず。我れ昔し未だ正覺を成せず、曉知する所なくして、略して如上の四十四種の火法を説きつ。廣すれば則ち無量なり、章陀典の中に具さに明せるが如し。今正覺を成じて、また眞慧の火の十二種の法を説く、謂はゆる大事を成すなり。一切垢障の暗を除き盡して、而して大事を成す、往昔の邪道非法の行に同じからず。

「第一をば名けて智火とす、方の名稱にして色黄なり、端嚴にして威を増し、力を與へて火光焰あり、三昧に住して、智智満足す」とは、此の中に最初智火とは、即ち是れ菩提心の慧光なり。(三)形方にして色黄なり、即ち是れ金剛座を表す。端嚴とは、是れ内の莊嚴なり。言はく、此れ智火なり、本尊の形に一切の佛の功徳を具するが故なり。威を増すとすは、是れ外事なり、謂はく、十力等の用なり。此の智火とは、其の性

(三)形方等 第一火神は地大なり。

(二)性 本不生の智火なり。

是の如し。内外の功徳莊嚴圓滿して、能く十力を與ふ、故に増威と名く。此の火を識るに由るが故に、無始以來の無明の薪積を燒きて、また遺餘のこりなきこと、劫燒の時の火の灰燼みな盡して、蕩然として無垢なるが如し。一切如來の功徳、自然に成就す。然も此の火神をば、即ち名けて智とす。其の相端嚴にして、金剛の色に作す、圓光の餘鬘を以て自ら圍遶す。此の光の中に處し、寂然として正受三昧なり。此の三昧に住するに由るが故に、智性満足せり。此の智光とは、即ち是れ毘盧遮那の別名なり。即ち此の尊を以て、此の智を表す。若し初觀には即ち此の火神を觀じて、能く一切の事を成す。若し深く其の(二)性を了することは、即ち上に説けるが如し。此の中の方壇とは、梵には摩訶因陀羅マヘンダラと名く、是れ帝釋尊の別名なり。又則ち金剛輪の別名なり。智は是れ内證なり、其の外發の表は、金剛杵の形に作せ、此の方座の形とともに相似たり。然も但し四角の壇の中に、本尊ありと觀する、即ち是れなり此の杵の頭に四角の形あり上に増威と云ふは、若し形像を作らん所表を論せば、即ち是れ體貌圓滿して、豐備せるの言なり。然も理に據りて之を言はば、即ち心の法門なり。然も火に二法あり。若し能く瑜伽を修せん者は、唯だ此の尊の形表の相を觀じて、眞言其の名即ち是れなりを誦せよ、即ち内

心の火法と名く。若し世間に順攝するが故に、壇を作さば、當に方鐘に作して、周匝して光焰あり、自身も亦黄衣を着し、火鐘の中に、此の本神ありと想ふべし。三昧に住すること上の如し、然して後所作の事成る、然らざれば成らず。此の法は息災と相應す、是れ堅固の法なり。此れは初の菩提心阿字門に配す。此の因縁に由りて、智具足するなり。

(二) 第二等 第二の大神は水大なり、大悲は水大の徳なるが故に。

(三) 軍持 水瓶なり、大悲の水を表す。

(二) 第二の火とは、名けて行滿とす、即ち名を案じて義を表す。其の梵音亦即ち眞言なり。初には菩提心を發し、次に行を修す。其の行滿とは、即ち名けて佛とす。謂はく、此れ即ち大悲爲根と菩提心の種子との故なり。其の形は秋の夜の月の如く、光暉照朗にして、四面に周匝し、身に白衣を服し、種種の徳謂はく身端嚴にして肥満して喜ぶ可きなりを具せり。其の右の手には數珠を持ち、次の左の手には(三)軍持を持たしむ。此の像は月輪の中に住す。如上の所説は、即ち是れ心性圓明清淨の義なり。此の妙行の火を以て、垢心戲論の薪を焚く。若し觀を作さん時は、亦即ち此の圓明を觀じて、本尊の形とす。上の文にみな如來内證の徳に體かなひ竟りて、外に彰るるが故に、法門を以て表示すと云ふが故なり。若し外に作さば圓鐘になせ、白檀の末を以て塗り、白花等を以て供養をなす。

自ら亦白衣を着す、此れは是れ息災の法なり。災に無量あり、諸の外の世間の、水・火・蟲・霜降・蝗等、種種の災耗、及ば内身の一切の病惱の類の如き、其の形萬端なり。自身他身皆能く之を淨除す。又無始以來疑心あり、謂はく、深法に於て猶豫を生じて、決定して信せず、此れ即ち障なり。此の火能く此の障を淨除す、亦是れ息災の義なり。此の息災の護摩に亦二種あり。但し瑜伽相應して念誦せよ、或は外護摩にして火法を作すべし。然も若し辦供し能ふ者は、爲に事を兼ねて作すべし、若し辦ぜずば、ただ心を以て作すことも即ち得。物ありて爲す可きに之を作さずして、ただ心を以て作さば、法に如かなはず。

第三の火尊をば、名けて風燥とす、風に從りて生ずる所なり、是れを風子とす。形燥黒なり、此れは謂はく、内は色黒にして、外に燥形を加ふ、上の塗灰等の如きなり。此の尊は風輪の中に處して、即ち半月形なり。亦端坐せる三昧の形に作れ、謂はく、行人初めて菩提心を發して、進行せんと欲すと雖も、而も無始已來の妄惑煩惱の根本、未だ除かざるを以て、數々來りて觀心を牽破して暗蔽を加へば、此の法を作すべし。風は是れ不住の義なり。又世間の風の能く重雲を壞るが如く、此の不住の火も

(一) 阿毘闍嚩迦
降伏の梵語なり。
(二) 第四等 第四
の大神は火大なり。

亦是の如し、能く諸障を散壞す。此の尊は風壇の中に坐して、手に帛を執りて、頭を去ること三五寸にして、兩頭之を執ること、天衣の形の如し、其の色青なり。此れは是れ風の義を表す更此れは是れ(一)阿毘闍嚩迦の法なり、亦内外の二法あり。
(二) 第四は赤きこと日の暉の如くして、三角の中に住す。右の手には刀を執り、端坐せり、刀は利慧の斷結を表す。世の日の初めて出づる時、夜除きて晝現れ、暗盡きて明現るるが如し、故に此の色を取るなり。火神に是の如くの形色あり、光焰も亦爾り。身相端滿なり、前の如く三昧に住し、微怒の形に作せ。

第五は沒栗多ムリダとは、是れ和合の義なり。此の尊は淡黄色に作せ、謂はく、黄に兼ねて火色あるなり。和合とは、是れ二法を兼ねるなり。其の像は、左邊をば怒れる状に作り、右邊をば熙怡微笑いみじやうの形に作れ、各半身を生せり。此の微笑は是れ瞋ならず大喜ならず、寂にして住するなり。身上に毛あり、謂はく、髭鬚の類稍多し、然れども過ごす可からず。若し多く置けば端嚴ならざらしむ。其の項長くして大威光あり、其の身色一邊は赤く、一邊は黄なり。怒邊は當に赤なるべし。其の坐も亦右は方にして、半ば金剛坐なり。左は三角にして、半ば火坐なり。左には刀を持ち、右には(三)跋

(三) 跋折羅 五股
金剛なり。

折羅ロラを持つ。内外の二法あること、前に例すべし。此の和合とは、能く一切に遍して、招召と息災と俱に成すなり。内用は即ち智光なり、煩惱即ち滅して無生なり。若し外に作す時は、香華身服亦二種を須ふ。念誦の時も、亦此の形を作すこと、本尊の如し。仍りて一目は怒り、一目は寂然なり、災も除こり願も滿つること、一時に成就することを得。此の等遍の理を以ての故に、是の如くの用あることを得、偏方の教には同じからず。

第六の火神をば、名けて忿怒とす、即ち此の名義を以て、眞言等とすること、上の如し。其の身烟色とは、甚だ黒きに非ず、甚だ白きに非ざるを謂ふ。其の一目を閉ぢて、不動尊の如し。其の髪散じ上れること、蓬頭の状の如し。大吼の形に作せ、状は口を開きて、大いに呼吼せる状の如きを謂ふ。口に四の牙ありて俱に出づ、二は上へし、二は下へせよ。此れ亦二事を攝す、一は火、一は風なり。

第七をば温腹と名く。上の世間の火の中に、是れ身内の火の能く食物を消化して、身を資くと謂ふが如し。此の正法の中の義は、則ち爾らず。腹内の火は即ち是れ内證の智なり。迅疾とは、謂はく、其の形更に忿怒を加ふること、又前よりも甚だしくし

て、極忿なり、謂はく、此の囉字を作す。種種の色あり、謂はく、形五色を具す。義は前に準ぜよ。

(二) 金剛輪 第一火神大因陀羅を指す。

第八をば費耗ヒカウと名く、是れ除遣の義なり、謂はく、一切の業垢等の事、餘なからしむ。此の尊は能く身中の一切の障を除くなり、即ち毘那也迦ビナヤキヤの類みな消耗せしむ。其の色は衆多の電光を聚集アツめたるが如く、瞻覩シヤクす可からざる状なり。此れは是れ(三)金剛輪の同類なり。

第九をば意生と名く、謂はく、意より生ずる所の法なり、意に随ひて成るなり。種種の形をば、みな所念を作せば、皆能く成就す。巧とは毘首羯摩ビシュケツマを謂ふ、即ち是れ類に随ひて身を現し、普門を以て成就する義なり。自在の慧、作に随ひて皆成るなり。大力あり。

(三) 劫微 經には羯羅微とあり。

第十の受食火をば(三)劫微キヤラビと名く。謂はく、火に施す時、飲食を受くる義なり。受食とは、謂はく、火食を施す時、受けて之を食ふ。其の尊は唵字オンの印を持つことを作すとは、即ち是れ梵志の儀法なり。淨行者、凡そ言語する所あるときは、みな右手を側だてて印の形に作す、舉げて之を案じ、唵字オンの聲を以て、相を作す故なり。

第十一の本文缺少せり。

(二) 上 第九の息障品を指す。

第十二をば迷惑と名く、謂はく、能く一切を迷惑せしむ。即ち是れ所作已辨し、寂滅道場に處して、魔を伏する義なり。又一類の衆生ありて、惡を爲して止遏シヤクむ可からず、たとひ勸導を加ふとも、更に其の惡を増し、若し之を縦ユルさば又惡道に趣くべきが如きは、方便を以ての故に其の身を伏して、迷悶して都て知る所なからしむ。此の因縁を以て、善惡俱に造ること能はず。次に即ち漸く之を引導して、正法に入らしむ。金剛頂に、又金剛手自在天を降伏する義の如し、説くこと(三)上の如し。此れみな方便道に住して爲す所なり。

一、三、亂脫

六、亂脫

八、亂脫

(三) 秘密主 經には於内心とあり。(三) 謂等 十二字は注なり。

「秘密主、此れ等火色の所持の者は(二)、自己の色に隨ふとは、火神の色を謂ふ。」「藥物等彼れに同じ」とは、彼の色類に隨ふを謂ふ。又偈に云はく、「而も外護摩を作さば、意に隨ひて悉地を成す」。復次に(三)秘密主とは、(三)謂はく、次に内法を明すなり。一性にして之を具す、三處合して一とす、瑜祇の内護摩なり。大慈大悲心、是れを息災法とす。彼れ兼ねて喜を具す、是れを増益の法とす。忿怒は胎藏に從りて、衆の事業を作す。又彼れ秘密主、其の所説の處の如く、謂はく類に隨ひて用ふるなり。相應の事業に隨ひ、信解

二、亂脫

四、亂脫

七、十一、亂脫

(二)神 本尊なり

五、十、亂脫

十二、亂脫

に隨ひて梵燒すべし」とは、自己の色及び藥物と、彼れに同じて外護摩を此れを作せ、悉地意に隨ふとは、言はく、此の十二種の形色及び所持の物等、謂はく、其の性を識るべし。前には内外合して論ず、今は外を説く。十三和合とは、火は(二)神に異ならず、神は自身に異ならざるを謂ふ。彼同とは、是れ自他俱に同じきなり。内作とは、本尊即ち火、火即ち自身なり。いま理釋を謂はば、本尊は即ち是れ毘盧遮那なり、此の毘盧遮那は自然の慧火に異ならず、此の火は我身に異ならず。十四即ち一自性三和合を以て、内護摩と名く。和合とはいはく、本尊即ち火、火即ち自己に同じく、三事等しきなり。上の文に如意悉地とは、世の上中下の事に隨ひて、意に隨ひて即ち成るなり。若し此の火法を了せざれば、成ずることを得るに由なし。内法も亦相況するのみ。若し此の慧火を了すれば、出世の上中下の成就に隨ひて、心に隨ひて即ち成る。復次に三和合とは、身口意を謂ふ。身の印、口の眞言、心の本尊、此の三事合して、畢竟して等し、是れを三和合と名く。若し能く本尊を觀ずれば、則ち自身漸く淨し、淨ければ即ち本尊に同じ。若し一性を見るときは、即ち三事俱に淨くして、平等なるは皆是れなり。次に内護摩の法を明す。十五即ち此の三事等しきを以て、中に息

六、十三、亂脫

災を作さば、即ち大慈大悲を用ふる、此れ三平等なり。大慈大悲和合する時は、一切息災の尊なり、第一の悲とす。若し増益を作さば、即ち悲及び大喜を以て和合するなり。若し忿怒の者は、火を胎として事を作すとは、胎は即ち心なり。謂はく、因縁あらば、須らく忿怒の事をして、人を降伏すべし。即ち其の内心の中より忿怒を起す。此の忿怒は世間の忿怒の如きには非ず、謂はく、大悲心の中より、忿の實性を照了して、方便を以て之を起す、惡法を降伏するを以てなり。是の如く等は、但し内に護摩を作して、即ち能く諸事を辦ず。故に護摩の義とは、謂はく、慧火を以て煩惱の薪を燒き、盡して餘なからしむる義なり。然も今此の中に、略して所用の火神、及び内外の相を説く。當に知るべし、諸餘の法教の中に、みな火法等あらば、應に隨ひて、何れの事を作す者にも、皆此の法に准じて三昧に住し、彼の相應に隨ひて、之を施作して即ち成る。若し此の如くならざれば、ただ薪木をのみ焚き、空しく供養を盡さん。爾らば外法に濫して、又成すこと能はず。又經に言ふ所の物とは、火法に緣る所の薪と蘇と食物と乗具とを謂ふなり。

十五、亂脫

十四、亂脫

十六「その時に、執金剛手、佛に白して言さく、世尊、云何が世尊問ふなり、云何が火

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第二十

十六、亂脫 已上

爐三摩地、云何が散灑、云何が順に茅草を敷く、願はくは佛説きたまへ」とは、金剛手又佛に問ひたてまつる。上來數々此の火法を説けり、然れども猶ほ未だ決せず、當に何れの處に於てか火を置き、何れの處にか鐘をおく等、更に何の法かあるべきと。謂はく、散灑し、茅を敷き、及び物等、みな佛に問ひたてまつるなり。

十六、次に佛、執金剛手秘密主に告げて言はく、秘密主、彼の火鐘は其の肘量の如くして、普くみな四方なり、其の縁は四指量なり、金剛を以て之を圍め」とは、次に以下の二偈は、次に佛之を答へたまふなり。彼の火鐘は肘量の如く、普遍く四指の縁なり、金剛を以て之を圍めとは、謂はく、所住の處に隨ひて、穿ること深さ一肘なり、方も亦之の如し。口の上に縁を安け、高さ闊さみな四指なり、大指の節の量を用ふ。縁を繞りて、金剛を以て之を圍め。四面各一を相接けよ、上の八印等の中に説けるが如し。等とは、深さ及び方圓等を謂ふ。方鐘の如く、及び三角半月圓等も知る可し。

「偈に云はく、藉くに青き生茅を以てし、鐘を遶りて右に旋らせ、末を以て本に加ふること勿れ、本を以て末に加ふべし」とは、謂はく、梢を以て根を押すこと勿れ、根を以て首を壓すべしとなり。三「茅を以て右に灑げ、法教當に是の如くなるべし、塗

一、三、五、亂脫

(一) 沒栗多 十二
火の中の第五の火
神なり。

七、亂脫

二、亂脫

四、亂脫

六、亂脫

(二) 悉地 蘇悉地
經卷下奉請品。

香と花と燈とを奉り、當に火天に獻ずべし、(一) 沒栗茶火なり。一花を以て供養して、座處に安置せよ。安置し已りて、眞言者また之を灑淨せよ、智者本眞言を以て、滿庵を作せ。七次に息災の護摩をなし、或は問ふるに増益の法を以てせよ。「是の如く世の護摩を説きて、名けて外事とす」復次に内護摩は業生を滅除す」とは、業生を滅するを謂ふ。「末那を了知す」とは、意を謂ふ。「色聲等を遠離す、眼耳鼻舌身と語意等とは、皆悉く心より起りて、心王に依止す」とは、三茅は謂はく、青く濕へるを以て、右に遶りて之を敷くとは、茅を縁の上に布く法を謂ふ。當に根と首とをして相壓さしむべし。首とは是れ上の梢の苗なり。もし東方に布かん時は、根を北におき、苗を南におけ。仍りて苗を以て次の南の者の根を壓して、根を以て苗を壓すことを得ざれ。次第に右に遶りて之を敷け。南方に至りては、即ち須らく根を東方におき、苗の頭を西に向ふべし。乃至北方も次第に此れに准せよ。灑水とは闕伽水を謂ふ。闕伽は別に方法あり、(三) 悉地の中に説けるが如し。然も此の灑水に二法あり。若し茅を以て小束を作りて、闕伽の椀の中に置きて之を灑ぐ。灑ぐ時は順に灑げ、右に旋りて灑ぐなり。若しは直ちに手を用て灑ぐことも亦得、然も順に灑ぐべし。此れに又二種あり。若し初に

(二) 火等 灑淨なり。
(三) 之等 漱口なり。
(四) 悉地 蘇悉地經。
(五) 上 具緣品第二及び香印品第九を指す。

(五) 悉地 蘇悉地經卷下供養品。
ハ 亂脫

(二) 火を淨むる時は、右に旋りて順に灑ぐべし。若し淨め了りて、(三) 之を供養する時は、當に直ちに之を灑ぐべし、旋轉することを須ひず。(四) 悉地の中に之を辯せるが如し、然も未だ灑がざる時に、須らく火尊を請すべし、眞言及び印あり、(五) 上の品に已に説けり、乃ち是れ此の中の所用なり。灑ぎ了りて花を獻じ、次第に諸物を供養せよ。その時當に本尊の形、此の鐘の中に在すと觀じて、上の眞言を取りて遍く灑ぐべし。滿施とは、即ち是れ杓を用て、物を火の中に投ぐるなり。杓に二種あり、初は大に方なる杓を滿施と名く、當に滿て盛りて火中に投ぐべし。次に小杓を以て即ち相續して、取りて火の中に内れよ、然も亦須らく滿て盛るべきなり。別に法あり、亦(五) 悉地の中に説けるが如し。ハ今略して息災增益析伏の三事を指す、當に知るべし、一切の事此れに准じて作せとなり。「復次に内護摩は業生を滅す、彼の意を了知せよ」とは、意を識らんと欲せば、當に境を離るべし、既に境を離るれば、根を離るることをも亦知るべし。然も其の語は舌におきて攝す、身意等は心より生じ、心王に依りて起る。

「眼等の分別生じ、及び境界の色等、なほ慧未だ生ぜざる時、心王に依りて妄あり。此れを息めんと欲せば、風燥火を用て之を滅す」、謂はく、智の風火を以て燒くな

(二) 内護摩 外道の外燒のみならず、異なり。
(三) 諸菩薩等 邪火は梵衆の爲に説く、今は是れに異なり。

り。妄執を燒除して、淨菩提心を得しむ。淨語あるべし。故に「此れを(二) 内護摩と名く、(三) 諸菩薩の爲に説く」と云ふ。慧は是れ火なるを以て、風に由りて生ず、慧は是れ止なり、淨心を觀とすとは、此れより以上は、世間の事を明す。今次に内護摩の出世の事を説く、謂はく、智火を以て、業生等を除く。業に従りて生を受け、生に従りてまた業を造りて、輪轉已むことなし。今護摩と言ふは、正しく是れ此の業を淨除して、清淨の法の生ずることを得しむるなり。業生既に除こりて、然して後に意生を用ふ。意は即ち心の異名なり。此の心より生ずる法は、色聲香味觸を離れ、眼耳鼻舌身意を離る、此れ等は皆心を主とし、此の心王而も分別を生ず。當に慧を以て此の心王を淨むべし、即ち一切の法淨し。然も慧未だ生ぜざる時は、障法の爲に動かさる、當に上の文に准じて、風燥火を取りて、之を燒滅すべし。謂はく、上の文の深意を用ふるなり。深慧未だ生ぜざるに由りて、即ち分別あり、分別を以ての故に、根境等の垢障あり。今風燥火を用ひて之を淨除す。此の火は即ち是れ菩提心の別名なり。此の菩提心の火を以て、妄想等の事を燒きて、悉く淨除せしむ、是れを内護摩の義と名く。是の如くの智者を名けて菩薩とす。云ふ所の世出世とは、即ち是れ事理の兩法なり。事

は即ち方便所加の火なり、出世は即ち是れ慧性の火なり。世出世火品了りぬ。若し其の世間の火天を論ぜば、梵天の形に作れ。今内法の火神は、三摩地の形を作して、寂然として三昧に住せしめよ。

(XIX) 本尊(III)三昧品第二十八

(一) 原本には本尊とあり、經には本尊とあり。
(二) 本尊の意密に觀する所の本尊なり。
(三) 三昧品、字印の三平等、又は相無相等の三平等なり。
(四) その等未會の文なり此の品に際する所の經文は多分未會なり。
一、三、亂脫

現前せしめ、尊をして形を現さしむることを説きたまへ。諸眞言の、菩薩の行を修する諸菩薩、其の形を作すに猶りて、行者をして尊形を觀縁せしむ。即ち本尊の形、自身に同じく、疑惑あることなくして悉地を得べしと。是の如く説き已りて」とは「佛、執金剛秘密主に告げて言はく、善き哉、善き哉、秘密主、汝能く吾れに問へり」等とは。その時に金剛手秘密主、佛に白して言さく、世尊、願はくは本尊の靈驗を説きたまへ。諸の眞言行の菩薩の、菩薩の行を修行するものをして、本尊の形像を觀せしめんと。「佛言はく、秘密主、諸尊に三種の形あり、謂はく、字印形貌なり。彼の字に二種あり、謂はく、聲と及び菩提心となり。次に印にも亦二種あり、謂はく、

(一) 形等 七字は註なり。
(二) 顯形 色と形となり。

三、亂脫

二、亂脫

(III) 婆等 Sadide
yata

有相と無相となり。相は是れ色の義あり、謂はく、有像と無像となり。尊形にも亦二種あり、謂はく、淨と非清淨となり、彼れ淨形を證すれば、(一) 形とは身を謂ふ、體は空に同じくして、一切の相を離る。非淨有相の身は、即ち(二) 顯形の衆色あり。彼の二種の尊形は、二種の事を成す、有想の故には有相を成し、非想の故には隨ひて非相の悉地を生ず」とは、(三) 上に亦之を列着す。次に佛を引きて證とす。有想の故には有相を成すと、佛常に是の如く説きたまふ。若し心非想到住すれば、即ち非相を成すとは、佛語を先づ之を標す。是の故に一切種を成すには、當に非想到住すべしとは、言ふ意は、事は心に隨ふが故に、宜しく出世を求むべしとなり。既に本尊の形を觀じ已りぬ。(三) 疑なきが爲に悉地を得とは、此れより以上は金剛手の問なり。本尊とは、梵音の(III) 婆也地提嚩多なり、若し但し提嚩多と云へば、直に尊とする所の義なり。尊とは亦是は自尊と云ふ、謂はく、自所持の尊なり。然も彼の行者、身印と眞言と及び本尊を觀すると、此の三事合するに猶るが故に、本尊即ち自ら道場に降臨して、來りて加被したまふ。然も此の行者、初行の時は尙ほ是れ凡夫にして、自ら徳力なし、何ぞ能く即ち佛菩薩等の、是の如く應ずることを感ぜんや。但し彼の佛菩薩等は、先づ誠言の大

誓願を立てたまふに由るが故に。若し衆生ありて、我が此の法に依りて之を修行して、法則を虧かすば、我れ必ず冥應せん、或は來らずと雖も、遙かに之を加護せんと。若し行人、法則如法ならんに而も應赴せずば、即ち是れ本所願に違ふが故に、應せざることを得ず。明珠方諸、月に向へば水降り、圓鏡、日に向へば火生ずること、因縁相應して、思念なきが如く、此の法も亦喩とす可し。是れ諸佛の心行ありて、凡夫に同じて赴應するに非ず。若し心相應せず、事縁闕ぐることをあれば、則ち本尊、護念を加へず、故に應驗なし、佛菩薩等の過に非ず。然も行者、此の事を以ての故に、當に須らく、正しく本尊清淨の身を觀すべし。清淨の身若し見已れば、即ち自身を以て本尊身とす。是の如くして疑慮なければ、所求の悉地、果を成さざることなし。經に觀縁と云ふは、即ち是れ行者、若し其の本尊に約して、是の如くの觀を作すなり。無疑とは、彼の尊と相應するに猶るが故に、また疑難の心なし。是の故に所修必ず成る。已上は問竟りぬ。佛言はく、善き哉、善き哉、秘密主、汝能く吾れに是の如くの事を問へり、是の故に金剛手、極めて善く作意せよ、我れ之を説かんと。乃至願はくは聞かんと欲す」とは、金剛手善く次第に疑を問ふを以て、未來の眞言行の

■ 觀配

(一) 形等 九字は註ならんか。

(二) 圓等 A.Ka. Ca.Ta.Ta.Pa.

(三) 持誦品 世間成就品なり。

諸の菩薩を勸めんが爲の故に、又また慰諭して勸誡しまふ。

次に「佛言はく、秘密主、本尊の形に三事あり、謂はく、字印形なり。(一) 形とは即ち尊形なり。彼の字に二種あり、聲と菩提心となり」とは、謂はく、行者最初に字を修行するに、略して二種あり、字義を觀すると、一には但し菩提心を觀ずるとなり。此の菩提心は即ち是れ字なり、謂はく、(二) 阿迦遮吒多波等なり。但し其の首を擧ぐ、然も諸字皆是れなり。初首とするを以ての故に、菩提心と云ふなり。或は字輪を觀ず。謂はく、所持の眞言を以て、輪の形として身に入る、上の(三) 持誦品に説けるが如し。或は種子の字を觀ずる皆是れなり。或は字を觀せずして、たゞ聲を念ず、謂はく、上に此の聲を觀ずるに、鈴鐸の聲等の如くして、次第に絶えず、及び此の聲を以て出入の息を調ふ、上に説けるが如く皆是れなり。已に字を説き竟る。「印と形とも亦二種あり、謂はく、有形と無形となり」とは、形は即ち是れ青・黃・赤・白等の色、方・圓・三角等の形、屈・申・坐・立、及び所住處の類なり。印は謂はく、所執の印、即ち刀・輪・絹索・金剛杵の類なり。初心には別に縁じて觀ず、謂はく、先づ畫の尊等を觀ず。此れに約して觀するを、名けて有形とす。後には漸く淳純するなり、又(四) 加持力を以

(四) 加持力 本尊の加持力。

(二) 目等 心中の
佛即ち心上に現る
なり。
(三) 三摩等 定
住、等持又は定
住、整頓等と云
ふ。或は名詞にて
は聖人と云ふ義も
あり。

ての故に、自然に現れて心と相應す。その時に此の本尊は、但し心より現る、別の外縁にあらざるが故に、無形と云ふなり。私に謂はく、或はいふ可し、初に世の三昧を得て、其の本尊の是の如くの形、是の如くの色、是の如くの住處、是の如くの坐立、是の如くの漫荼羅の中に、是の如くの印等を持てるを見る。猶ほ是れ有相の故に、有形と名く。後にうたた眞言宛然として、直に見えて、鏡像等の、想あらざれども見るが如し、故に無形と名く。次に「本尊の形に二種あり、謂はく、清淨と非清淨となり」とは、謂はく、彼の行者、初に有相に因りて、無相に引入す。先づ圓明と佛菩薩の印身とを觀す。初に作すには見えす、別に像等を畫きて觀ず、漸く則ち法力に加せられて、漸く明了なることを得れども、尙ほ障る所あり、(二)目を閉づれば即ち見え、目を開けば見えす。次に漸く目を開き目を閉づるに、皆明かに見ることを得。漸漸に作意を加へざれども亦見ゆ、乃至身に觸るるに亦また礙ることあることなし、猶ほ目のあたり世人に對するが如き等なり。此の有相に由りて、漸く清淨處に引入す。有相なるを以ての故に、名けて非淨とす。此の(三)三摩呬多に等引せらるるに由るが故に、清淨處に住して、寂然として無相なるを名けて淨とす。淨とは是れ果なり、非淨とは是れ

(二) 事成とは世間
有相の悉地、理成
とは出世無相の悉
地なり。

六、亂脫 已上

因なり、非淨とは形色印像の類を謂ふ。此の非淨に由りて、引きて淨を成す、無常の因に由りて、常の果に至る。私に謂はく、此の三事に各二種あり、即ち行の次第なり。眞言を觀持し、字を觀ず、聲を觀するは漸く細なり、次に尊形を觀ずるは又細なり、次に別縁にあらすして觀するは又細なり、次に無縁に就きて、又淨・不淨及び純淨あり。或は横に之を説く可し。此の三事に、各世出世の方便あり、故にみな二あり。經に云はく、「彼れに二種あり、二とは、上來の三事に各二種あるを謂ふ。彼の二種の中に、即ち二種の事あり、有想を成就するが故に有想なり、非想の故に非想の悉地隨ひて生ず等と云云。謂はく、若し有想の事を以て觀見する者は、有相に於て成就を得ることあり。若し無相なれば、亦無相の悉地を成就することを得。又云はく、此の三事二種の中に、隨ひて一事を以て、即ち成就を致す、然も皆世出世の成就、及び(二)事成・理成あり。故に前の三種の中に、各二種ありて、二事を成就す。經に、「有想には有想を欲して成し、若し非想到住すれば、則ち非想を成就す、是の故に一種の事を成さんとならば、當に非想到住すべし」と云ふは、此れは勸めて、一切の想を離れて、非想到住せしめよと、結勸するなり。非想の理に住して成就するを

以ての故に、一切不思議の神變、心想を加へざれども、自然に妙業を成ず。世間の成就の、生滅の心行の中に在りて、而も力に限あるが如きには非ず。又究竟に非ざるが故に、其の勝れたる者を取れと勸むるなり。私に謂はく、然も大般若等の中に、具さに觀心を洗滌する事を説けり、然れども須らく本あるべし。今行人先づ緣起の觀に於て、乃至具さに十方佛會の、諸の世界等の種種の境界を見るを、以て悉地とす。然して後に般若に於て洗滌し淨除して、即ち不思議の大用を成し、頓に佛果に入る。若し行の次第を知らずして、ただ彼の文をのみ觀て、深祕の致に入らざれば、多く錯りて經の意を會し、忽爾に空に入りて、圓頓の道を失ふ。故に此の一兩品は、最も須らく諦かに其の意を觀すべし。

(XIX) 無相三昧品第二十九

〔論〕復次に大日世尊、金剛手秘密主に告げて言はく、秘密主、彼の眞言門に於て、菩薩の行を修する諸の菩薩、無相三昧を成就せんと樂欲せば、當に是の如く思惟すべし、想は何よりか生ずる、自身か、自の心意か、然も彼の身は因業より生ぜり、草木

(一) 原本には次無相とあり、經には說無相とあり。
(二) 上に諸の三昧を明せども無相を本とす、故に此品に無相三昧を明すなり。
(三) 復等 未會の文なり此の譯文も多分未會なり。

(一) 一とは一心の義か、義釋には心に作れり、或は心の字の草書を一の字と混じたるか。
(二) 「是れ内なり」の字その意を得ず之なきを可とす、次の行にあるものと紛れて重複したるものなること明かなり。

(三) 初法等 三業の實相を知れば、菩提心に入るなり

一、三、亂脫

二、亂脫

瓦石に等し、謂はく、自性是の如くなり」とは、業生の身は、自性是の如し。頑ること木石に同じ。業生とは謂はく、(一)より起る。此の觀は是れ有想なり。有想を外とす、外にあらゆる身語等をば、是の如く之を觀するなり。頑なること(二)是れ内なり草木に同じ。性は作を離るとは、謂はく、業は心に由りて生ず。因業より生ずるは、是れ内なり。外とは謂はく、木石造立是れ外なり。次の品に「佛、金剛手秘密主に告げたまはく、彼の非想三昧を成就せんと願欲する、眞言門に菩薩の行を修行する諸の菩薩は、是の如く思惟す、何に従りてか想生ずる、自身か、自の心意か」とは、即ち是れ瑜伽を修する者、已に能く本尊等を觀じ、乃至現に種種の奇妙の境を得。然も猶ほ是れ世の三昧の攝にして、未だ平等の慧を得ず、今更に三平等に入る觀を開示す。若し此の觀明白にして、自の身口意の實相を了すれば、即ち淨菩提心の(三)初法門に入り、菩薩地に上る。此れは是れ私の釋なり、然も大意此の如し。先づ身の實相觀を明さば、謂はく、(三)經に云はく、「彼れ身業より生ぜば、草木瓦等の性なり、是の如くの作を離れて、頑なること外作の如し。或は業より生じ、形像の見等爲等の如し」とは、經文なり。(三)上來に當に非想等に住すべしと言へるは、今此の品の中には、若し

〇 觀脫 已上
百十四卷又は第四
百八十九卷
〇 困 禾を口の
中に入れてる會意
にて倉なり。

眞言行を修する者、若し此の非想三昧を成就することを得んと欲せば、當に斯の觀を
なすべし。經に自身か自の心意かと云ふは、謂はく、心に從りて思生ずることあり、
心は是れ清淨の心、意は是れ分別なり。更に問へ然も此の身は木石に同じくして、其の性
頑愚なりとは、言はく、此の四大若し心を離るれば、即ち木石に同じ。〇大般若に、
身念處を觀ずる中に説けるが如し。明目の人、自ら倉〇困の中の種種の米麥等を觀る
が如く、此の身も亦是の如し、身念處觀開くる時、自ら三十六物の各各の異相を見
る。その時に身相即ち除くこと、倉を開きて米麥を見る時、倉困の名除くが如し。乃
至一一にみな縁より生ずる次第深く説けり。次に又身を以て像に同することを明す。
像を作る者、土木雜物を以て、和合して像をつくるが如し。或は佛、或は天、或は餘
の父母の形等なり。善く觀ぜざるを以ての故に、隨ひて所尊所愛の想を生ず、然も一
に細しく觀ずれば、ただ衆縁合會して、都て自性なし。今我が身も亦爾り、諸縁假に
合せり、自ら了せざるが故に、身見を生ず。若し細しく觀する時は、都て自性なし、但
し縁に從りて有り。幻等の境の、縁に從りて生じて、實には不可得なるが如し。又此
の身とは、心に因るを以ての故に狀あり、若し六根知ることあれども、然も實には爾

らす。人の心の觀察せざる時は、則ち所住あり、則ち日月の明なりと雖も、或は見
えざる所あり、雷電の響も或時には聞こえざるが如し。又過去に一心禪觀の比丘、乃
至道行するに、大軍ありて過ぐれども、而も之を見ざるが如し。當に知るべし、若し
心を離るれば、則ち此の身は眼耳等の根を具すと雖も、猶ほ木石の如くして知ること
なし。

又像の喩の如し。若し此の木石等の像、或は謂はく、火に燒かれ、水に壞られ、刀
に傷られ、金剛等に碎かれ、或は忿怒龍語を以て之に加ふれども、其の少し許りも心
想を動し、不喜を生ぜしむること能はず。或は種種に供養し、被するに妙衣を以て
し、獻するに名饌を以てし、塗るに妙香を以てし、かざす炫すに妙色を以てし、乃至人天の
供具、前に豐盈すれども、亦喜を生ぜず。〇當に知るべし、像の本性自ら空なり、自
ら是れ我が心の分別にして、増減を生ず。或は毀し、或は供すれども、俱に顛倒にし
て實にあらざるのみ、外に像を觀するが如くとは、いはく、此の觀を以て自身を觀
ず。その時に身相を見ず、分別を離る。是の如く其の身を觀察して身の實相を見れ
ば、即ち無相三昧を證す。凡そ觀察する時は、先づ須らく相に約すべし、有相の縁を

二、亂脫

四、亂脫

(二) 音聲等 音聲
起る、七處に觸れ
滅の實相なるが故
に平等の性なり

以て漸次に深く入れば、自然に相に即して無相なり、縁に即して無縁なり。若し此の方便を得ずして、ただ直ちに空を觀じて、何の因縁を以ての故に空なりと知らざる時は、是の空法に着して、多く異見を生ず、故に修行の次第須らく指適あるべし。

「何を以ての故に、愚童凡夫は自性空の形像に於て、自ら我分を生ず、謂はく、自身より我分別を生ずるなり。此れに由りて顛倒不實にして、諸の分別を起す。或は供養し、或は供養等を除き、或は毀罵す」毀とは皆之を除き捨つるなり。然も身を觀するの次に語觀あるべし、語觀は身觀に攝入するを以ての故に、別說せず、今略して之を顯す、即ち是れ合して之を論ずるなり。今此の語は何に従りてか有なる、謂はく、齒喉咽唇舌齶等の衆縁に従りて、心、風を動して互に觸るるが故に、此の聲あることを得。猶ほ空谷の響の如くして、都て自性なし。凡夫は了せざるが故に、好を聞きては欣を生じ、逆を聞きては情に怒を生ずるのみ。今是の如く聲の實相を見て、即ち此の聲は不生不滅にして、實相に同じと知る、是れ音聲平等の性なり。次に即ち心を觀するに、法は形相なきを以て、觀じて覺知す可し、先づ庵より觀じて、此の身平等語平等を了すれば、自ら知りて深く之に入るなり。

「復次に秘密主、心性は一切の想を離る、性空を思惟すべし、當に此れを思惟すべし。秘密主、心は三昧に於て求むるに、不可得にして、彼の三世を離れたり、彼の性是の如し、當に之を思念して相を離るべし」とは、復次に秘密主、亦自ら之を觀察す可しとは、行者その時に既に外相を觀ぜば、次に内心も亦空なりと了すべし。此の心は一切の相を離れて、三世の中に於て、求むるに皆不可得なり。虚空の三世を離るるが如く、心も亦是の如く、三世の出と住と滅との法を出過せり。然も凡愚は心の實性を了せざるを以ての故なり。

「復次に秘密主、心想ありとは、謂はく、愚童凡夫の分別する所なり、謂はく、心、相を取りて了知すること能はざれば、不實妄起するが故に、是の如くの說あり」とは、彼れ實の如く知らず、謂はく、是の妄執あるに由りて、實の如く知ること能はず。是の如く思念すとは、謂はく、凡夫是の思惟を起すなり。是の如しとは、謂はく、凡夫此の分別あり。已上は心の句に屬す。

「復次に秘密主、此の眞言門を以て菩薩の行を修する諸の菩薩は、相を説きて無相を引くなり、謂はく、當に有相にして無相を起すことを了知すべし。謂はく、諸の菩薩

は、是の如く思惟して無相三昧を得、無相三昧に住することを得るに由るが故に。秘密主、彼の人は當に妄を除くに由るが故に、眞言の實相實體現前して、行住坐臥に常に現前することを證することを得べし。如來所説の眞言、彼れ常に親子對して自ら住す」とは、眞言の體を識るに由りて、前の十喩の如し、即ち是れ悉地の相なり。妄りに我心・我愚・我智・我順・我違と謂ひて、自ら種種の縛着の想を生ず。前の虚妄を以ての故に、所有の身口も亦皆虚妄なり。彼れ何の事をか知らざる、謂はく、眞實を見ざるなり。眞實を見ざるに由るが故に、嬰童の曉解する所なきが如し。若し心の實相を見る時は、自然に是の如くの一切の戲論分別を離る。心の實相を知らざるを以ての故に、妄執を生ずるを、名けて凡愚とす。若し了知する者をば、即ち諸佛と名く。

次に經に云はく、「秘密主、眞言行の菩薩は、無相定を證得し、無相定に住するが如く、如來の説きたまふ眞言、親子對して而も彼れ常に住することを得」とは、此れ經文なり、引くこと具さならず、當に經を檢して細しく觀るべし。此の意は言はく、此の眞言行の菩薩、是の如く相を離れて之を修行する時を、無相定に住すと名く。此の無相三昧に住するに由るが故に、如來所説の一切の眞言、みな現前して證す、故に親

(二)三の眞言門
三密の法門

(三)三平等身口
意三平等に安住す
ること。

(三)原本に次世出
世とあり。
(四)上の品には無
相觀を説く、是れ
此の品には持誦の
方軌を出す、是れ
能行の軌儀なり。
(五)持誦品秘密
加持の念誦法なり
て、三、五、亂脫

對と名く。是の如く理を證する時を、即ち常住と名く。住とは即ち佛住に同じ。

今の品は六十心に次いで之を説くべし、説義の次第、彼に於て先づ言はんこと便ならず、故に此の中の結會を以て説くなり。私に謂はく、上來の經文は、大意此の行に過ぎず、謂はく、口の眞言、身の法印、意の觀佛なり。然も此の三事はみな縁生の法なり、縁合して而も有なり、都て自性なくして不生不滅なり、即ち是れ阿字の門なり、法界の性なり。凡夫知らずば、云何が入ることを得ん。故に佛先づ此の(三)三の眞言門を説きて、漸く三昧を得しめ、乃至親子本尊を觀る。種々の神變の境を見るに、猶ほ是れ心に所着ありて、(三)三平等の住を得ず。今三平等の法門に入ること説く、若し行者、瑜伽の心の中に於て、而もまた能く是の如く觀察して、身口意の分別戲論を離るれば、即ち現前に眞言の實相を證し、佛住に同じきことを得て、自體常住にして、如來に同ぜん。

(三)四 世出世(五)持誦品第三十一

三 復次に秘密主、秘密念誦の法を説かん」とは「亦一一に諸の眞言を誦せしむ」と

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第二十

七、亂脫
 六、亂脫
 十一、亂脫
 (二)本性 本不生の故に三平等なり

二、亂脫
 (三)經の初 第二卷息障品に、金剛手三の問をなす、此は第二問なり

は、佛菩薩等の別説なり、謂はく、彼の中に隨ひて一一を取れ、謂はく、各各なり。諸の眞言の中に於て、隨ひて一一を取りて、各別に心念誦を作すなり、第二に出入息念誦を作すべし、此の二法は最も第一相應たり。當に是の如く此の二法を作すべし、是れを第一念誦と名く。此の法に異なること勿れ。若し此れに異なれば、念誦に於て支分を闕ぐ所あり、具せざるに由るが故に。然も内外相應を以て、之を分つに四あり、我れ先に已に説けども、今下に更に説くべし。彼の世間の者は、攀緣する所あり、謂はく、三種の中に、但だ一の字印身を觀ず、之を觀じて其の(二)本性を識り、印は即ち字、字は即ち身なりと知りて、無碍にして心湛然なる、是れ念誦なり。若し字を以て出入息を作さば、字は即ち眞言の體なりと知りて、此の出入を以ての資力を、出入息と名く。然も此の二の中に、出入息に由るに、少しく攀緣する所あるが故に、當に知るべし、意念誦を最も上とす。字印尊分別する所なくして、出入の息を作すことも亦得るなり。此の世世間持誦品とは、上來の一部の經の意は、ただ眞言行を修する諸菩薩等の爲に、持誦して道に入る法を作す、而も今此の品は専ら其の名を得たり、當に知るべし、一部の要旨を説くと。經の初に、金剛手已に會て、佛に持

(二)上來等 經の第三卷世間成就品等を指す

六、亂脫
 (三)意念誦 或は聲念誦か、或は聲は衍字にて意念誦か、意念誦と聲念誦とを併せ稱すと解するも可ならんか。
 (三)上 持明禁戒品の六月成就法。
 (四)三念誦 音聲と作意と出入息となり
 八、亂脫

十、亂脫 已上
 (五)句 梵語の鉢曇Patanaは足跡の義なり、句は讀み進む足跡に似たる故に、句をまた鉢曇と云ふ

誦の法を問ひたてまつるに、(三)上來に亦略答の處あり、然も未だ具さに悉さず、いま決擇せんが爲の故に、更に具さに其の宗要の行を分別す。其の秘密とは、上來の諸品に明す所、秘密ならざるに非ざれども、然も此の中の宗要は、乃ち秘密の中の秘密なり。一、一念誦とは、或は(三)意念誦を作し、或は出入息念誦を作す、此れは差別の行法の不同を明すなり。一、一念誦とは、謂はく、心を専らにして、口に眞言を誦ずれば、眞言の中より聲出づる時、一一の聲字みな誦了にして、間斷攀緣せず。作意とは、即ち直ちに是の心に持ち、心想念誦を作して聲を出さず。出入息念誦とは、(三)上に明す所の風を服する等の如き是れなり。二相應とは、謂はく、(四)三念誦の中に於て、其の作意及び出入息、此れ最も相應するを第一とす。當勿異とは、謂はく、常に當に此れに依りて作すべし、異緣異想すること勿れ、若し爾らざれば、徒らに功を用ふれども益なし。持眞言者闕支而用とは、謂はく、字に點あれども善はず、或は字を闕ぎ、或は長聲なるべきに、短聲を作して之を呼ぶ、是の如くの類甚だ衆し、みな闕支分念誦と名く。右此の内外相應するに、合して四種の念誦あり。即ち四色(三)世間有緣相續と言ふは、謂はゆる字句とは、(五)句は是れ足を舉げて行歩するなり、謂はく、

此の字を觀ずること、一一の歩の如し、字は即ち種子の字なり。前に已に出世の念誦は、身・字・印合して一として即ち得と説く。今世間の念誦は即ち之に異なり、或は字を觀じ、或は尊を觀じ、或は印を觀するなり。謂はく、句及び本尊なり、世間の中の念誦に就きて、出入息を最も上とすとは、前の出入息最爲上とは、前の出入息は、字を變じて出入の息とす。今の世間の念誦は、出入の息の中に字ありて、了了分明なりと見る、是れ分別あるなり。前の出世間には、是の如くの分別を作さず。眞言の中に於て、分別して二とす、即ち世間持誦とは、彼れ縁相ありて、字と字句とを縁す。此の中に或は一字を取りて之を縁じ、或に句等を取りて本尊の心上にありと想へ、前に具さに明せるが如く、是れ外の念誦なり。一字を取るとは、即ち是れ種子の字なり、或は眞言の初首の字なり。若し眞言小ならば、或は具さに其の句を想へ、上に説くが如し。連環等の如くして、本尊の心上の圓明の中に布せよ、此の二種の或は字或は句を、息の出入に隨ひて絶えず問あらず、誦ぜん^{ひま}と欲する時、繞らすこと環の如し。經に此の義を明すことあり、鏡像を觀るに分明に見るが如しと。いま字を觀じて字を見、印尊を觀じて即ち之を見る、此れは是れ有相なり。若し行者此の眞實相を見る

時、即ち有相に住せざれば、然もなほ未だ無相に入らず、若し菩提心を觀するは、是れ一向に無相なり。此の心即ち是れ佛なり、佛即ち是れ自身なり、自身即ち成佛す、成佛の故に一相にして異なることなし、故に無相と名く。隨とは謂はく、或は來、或は去、心に隨ふなり。

「世間の念誦は出入息を以て上とす」とは、「^三當に知るべし、出世間の意念誦は、諸字を遠離せり」とは、^五自と本尊と一合相を作す。^六不壞とは、分ちて二とせざるを謂ふ。^七取とは、分別して相に着するを謂ふ。^八一合相とは、合して一になして、取着せざらしむるを謂ふ。^九此の相を壞らざれとなり。^{一〇}意と色相像とを壞らすとは、心を相異せざるが故に、不壞と云ふ。^{一一}法則に異なること勿れとは、謂はく、教法是の如くなればなり。^{一二}是の如く法則に住して、三落又を誦せよ、前に説けるが如く、我が所説の多種の念誦あり」とは、謂はく、遍數時節、現相増益等なり。三落又は是れ數なり、數は是れ世間なり。出世間の落又は、是れ三相を見るなり、謂はく、字と印と本尊とに於て、隨ひて其の一を取りて、一合相なる是れなり。字印尊等しく、身語心等しきを、實相を見ると名く、乃至能く持誦者をして淨ならしめ、一切の罪を除こらしむ。

一、三 亂脫

五、六 亂脫

七、六 亂脫

十、八 亂脫

十一、亂脫

十三、此の亂は尙ほ十一に續くを可とせんか。

十五、十四、二、風脫
（一）義釋には「縁
かに自の耳に聞か
しむ」とあり、宜
賦。
（二）天台 止觀に
此の意あり。

風脫

若し淨ならざらざれば、更に一月等、前の如し。而も今所説の念誦の類の如く、^{十五}謂はく、上の文を牒するなり。^{十四}此の法則に異なるべからず。^{十三}是の故に今耳に聞かしむ。息出づる時は字出で、入る時は字入る、息に随ひて出入せしむ。今謂はく、^{十二}天台の誦經は、是れ圓頓家の數息なりと、是れ此の意なり。今此の字を以て、一縁に息とともに出入すれば、自然に念念相續して、心散亂せず、恬然として三昧に入り易し。此れを世間の念誦の中の最上とす。又上に尊神を明すことは、言はく、此の字句の念誦の法なり。諸尊みな爾り、上は佛部より、下は八部に至るまで、凡そ念誦あり、皆當に是の如く之を作すべし。其の出入息の念誦も、亦本尊の法に随ひて、一一に此の行法あり。^{十一}出世間とは、當に知るべし、是れ意念誦の法は、文字を離れたりと、豈に前來の眞言の字等を撥離するを、方に文字を離ると名けんや、是の如くにはならず。謂はく、能く字の本性は即ち是れ圓明なりと達して、當に本來不生に住すべしとなり、即ち心是れなり。心の體性は圓明清淨なり、衆徳を具足して分別なし、當に是の如くの字を觀すべし。此の字とは、還つて即ち是れ前來の本尊の眞言の字、及び句のみ。但し此の字は心より生ずと了知すべし。心既に圓明湛寂なり、心より生ず

る所の字も、其の性亦爾り。云ふ所の字聲等を離るとは、分別緣念の心、及び聲想等を離るるを謂ふ。然も持誦の時、誦あり觀あり、或は觀行す可し、或は兼行す可し、或は但し觀照をのみ修す。誦とは、上の如く聲字或は出入息等を緣ずるを謂ふ。照とは、此の字の體性を觀するを謂ふ。然も初觀の時は、常に有相に於てす。若しは種子の一字と其の圓明とを觀す、初には即ち小しきに作せ、若し具さに句等を觀せば、即ち大いに圓明を作すこと、狀、連環等の如く、心を以て觀照して、宛然として分明ならしむ。後には即ち此れに従りて、其の性を觀すべし。

^十「本尊一相と作りて取意を壞らす、形を壞らす、法則に異なること勿れ」とは、本尊とは即ち是れ初觀圓明の字なり。次には即ち本尊を觀す、^九上に已に説けるが如し。一相とは即ち身口意なり。本尊の心上を觀じて、此の圓明を作すは、即ち是れ心なり、其の身印等は即ち是れ身なり、其の眞言の字等は即ち是れ語なり。今已に明かに本尊を見て、本尊の三事を觀するに、一相平等なること實相の如し。又本尊の三事、平等一相にして、即ち我れに同じ、我が三相も亦また一相平等にして、本尊に異ならず、此の性は菩提心に異ならず、菩提心は本尊に異ならず、自他平等なりと觀す。

^{十二}此の風脫は尙
ほ上の^{十一}に續く
方可なるが如し。
^{十三}上 世間成就
品を指す。

(二)「謂はく」より「心相なり」まで十九字注なり。

(三)以下を亂脱の十二とすべきか。(四) Lakṣa 數の十萬。

Lakṣya 視る、表示す。Lakṣya 形相斯く類似せるを以て同語の如く解す、恰も和歌の兼帶詞の如きか。

又所觀の字は不同なりと雖も、然も皆是れ三昧門なり。若し一字の性相を解する時は、即ち一切の字の性相を解す。字即ち本尊なり、本尊即ち心なり、心即ち法界體性なり。此の故に此の阿字は即ち是れ不思議の字なり、阿の如く一切も亦爾り。字の如く印等も亦是の如し。此の不思議の三相に於て、(二)謂はく、字の眞言相、身の印相、本尊の心相なり、遣らず立てず、増益せず、損減せず。當に一切平等の相觀を作して、一切の法に達し、一切智を成す、當に此の法則に依るべし、此れに異にして作すこと勿かるべし。(三)此れは即ち是れ三落又の義なり。(四)落又とは梵音なり、是れ相の義、亦是れ見の義なり。我れ種種の經教の中に於て、凡そ持誦相應の處あらば、多く一落又或は三落又を誦すと云ひ、或は罪障を除かんが爲の故には、一落又を誦せよ、極重障ならば、三落又に過ぎずして、便ち罪業清淨なることを得と言ふ。然も此の義は餘あり、今當に之を決すべし。謂はゆる落又とは是れ相なり、若し三相を得ば、當に是の罪を除くことを得べし。先づ身相を明さば、謂はく、身體先の時は魚重なり、今は則ち輕安なり、乃至或は百里千里を行くに、迅疾にして往きて勞倦を覺えず、速疾なること常と異なり。先の時には靜かに坐して係縁すれば、多く小蟲蚊虻等の爲に惱

(二)大品 大品般若經第十八卷。

(三)非人 鬼神等なり。

(四)他 行者なり

(五)一月等 法花經法師功德品に出づ。

(五)天等 法花經安樂行品に出づ。

まさる、今は悉く生せず、また垢膩可惡の相なし、廣くは(二)大品の中の所説の如し、此れは是れ身相なり。口相とは、誦する所あるに隨ひて、暫く聲を發する時、本尊即ち至りたまふ。又大品の所説の如し、口に誠言を發せば、(三)非人も(四)他を燒さざるの類、皆是れ語業の淨相なり。意にも亦殊異の相あり、謂はく、無量の慧解を發生す、(五)一月四月を経て分別するに盡さざる等の如し。或は先の時には、是の如くの食味を貪嗜し、或は得ざれば身即ち安すからず。今の時は寂然として、また思念せず、乃至多日食はされども、恬然として喜悅の味を得、餘の食想なし、身も亦困まず。或は先には種種の煩惱多く、今はみな淨息す、皆是れ意の淨相なり。此の三淨相を具するに由るが故に、三落又と名く。若し爾らざれば、徒らに口に遍數を誦すれども、益する所なし。既に此の三相を得て、當に更に勝行を増修すべし。或時には諸天八部、空中に飛行すれども、敢て其の影をも履み踐まず。或は來りて敬禮問訊し、(五)天の諸の童子、以て給使をなして、其の所須を問ふ。此の如きは是れ誰れか知ることを得る、但し持誦者自ら知るのみ。此れ亦罪除こりて淨まりし相なり。然るに上來は一切の相を離るることを明す、今は三相を説く、此れと云何が相應する。今答ふらく、此の三相

は阿字を以ての故に、此の三即ち一相なり、亦は非一、亦は非異なり、天台の所解の如きは此れとほぼ同じ。謂はく、一相一切相なれば、一に非ず一切に非ず、即ち相即無相なれば、即ち相にも非ず無相にも非ず、皆是れ此の意なり。是の如くの三相は平等にして實相に住せり、是れ三落又の義なり。身の實相は是れ一落又なり、一切の身垢を除く。語の眞言相は是れ二落又なり、一切の語の垢を除く。意の實相は是れ三落又なり、一切の心垢を除く。三垢除こり已りて、三功德生ず、即ち是れ分に如來の功德を證するなり。又落又とは是れ梁の義、是れ標の義なり。文殊經の中に射を學ぶことを明すが如し、初には梁に遠しと雖も、後には漸く之に近づき、乃至任運的に中る。首楞嚴三昧も亦爾り、是の因縁を以て落又と名く。復次に身の印、口の眞言、意の本尊、即ち是の三行差別不同なるは、即ち是れ三相なり。即ち此の三相、阿字門に入るが故に、三相を離れて一相平等なり、是の如く照見するは、是れ三落又の義なり。落又とは見なり。故に勿異と云ふは、他を觀することを得ざるなり。復次に前に三句の義は、謂はく、菩提心を種子とす、即ち因なり、大悲を根とし、方便を究竟とすと云ふ。首より終に至るまで、皆此の三事を明す。或は自ら此の三徳を顯し、

或は他の三行を成ぜんが爲なり。三落又と言ふは、即ち此れと相應す、謂はく、行者最初に先づ菩提心と相應することあるべし、此れは是れ一切佛法の因なり。若し心を發せざれば、即ち妙因を離れて、何ぞ進行することあらんや。已に心ありと雖も、若し路を望みて進まず、願のみありて行なくば、何ぞ能く大悲胎藏生の一切功德の身を成就せんや。或は能く進行すと雖も、方便を離るるを以ての故に、疑心あり、疑心に因るが故に、一切成らず、亦實相に入ることを得ず。是の故に佛、諸の行人を誡めたまふ、必ず須らく師に依りて學ぶべし、自ら專まじまじに自の利根分別の力を以ての故に、輒く經文を尋ねて、便ち自ら之を行ふことを得ざれと。聞くに隨ひて便ち用ひて、漫茶羅に入らず、三平等戒を受けず、具さに方軌を解すること能はざれば、知らざるを以ての故に、發心修行し、勇猛精進すと雖も、然も方便差失するを以ての故に、爲す所成らず、故に疑心を生ず。疑心を以ての故に、如來秘密の藏を誘毀す。即ち是れ五無間の因にして、五無間道に越く。是の因縁を以て、須らく三句の義を具して、闕少することを得ざるべし、是れ三落又の義なり。此の事を以ての故に、次に後の品の付屬の中に、また弟子の相を擇ぶことを明す、文相承躡するのみ。次は是れ觀囑品

なり、經に言はずと雖も、其の義是の如し。

二(一) 囑累品第三十一

次に「佛告大會」とは、即ち是れ經文の初に、十世界塵刹金剛菩薩と云ふ。いま經を説くこと了へなむと欲するが故に、付囑を加ふるなり。「汝等應に不放逸に住すべし」とは、即ち是れ(三)前の文を承け躡めり。此の大乗密教は、當に是の法の如く相承すべし。若し授受に宜を失へば、即ち是れ專擅自恣にして法則を越ゆ、故に住不放逸と云ふ。復次に如上の三句の義は、自利利他の行なり。汝等當に阿字の義に住して、秘密教の中にして佛事をなすべし。若し此れに隨はずば、即ち是れ放逸に住するなり。機を差へて授、るを以て、或は彼の善根を損す、故に(四)經に、有智若し聞きては即ち能く信解し、無智は疑悔して、即ちこれ永く失ふと云へり。若し菩薩、深く衆生の本末の因縁、種相體性を觀ぜずして、卒爾に傳法すれば、即ち是れ人天の怨となる、是れを大放逸の行とす。故に次に「若し彼の根を知らずば、授與することを待す」と云ふは、根とは、即ち信等の五根の利鈍の相なり。

二(一) 亂脫
(二) 原本には次囑累品とあり。
(三) 此の一品は上の法門を結勸して未代に弘通せしむ即ち流通分なり。
(四) 亂脫
(五) 前文 上の品の末に「是の如く勿れ」と云へることを承く。

(四) 經 法花經藥草喻品。

(二) 餘の深法顯教の諸大乘なり。
(三) 若等 已下は内相を明す。
(四) 經 具緣品を指す。

(四) 宿の次(ヤド)る日即ち二十七宿に當る日なり。
(五) 執曜 九星と七曜となり。

「除我弟子」とは、謂はく、已に我が教に依りて住して、心相體信にして方に之を授くるに堪へたり。若し餘の世間外道の類の、未だ正法に入らず、信心未だ固からざるをば、當に且(二)餘の深法の中に於て、示教利喜すべし、^{たす}輒く爲に説くことを得ざれ。(三)若し菩薩、機を照すに、固より自ら己が智力に由る、いま未代傳法の人等の爲に、更に外迹の傳ふ可き相を明す。前に(四)經の初に弟子の相を擇ぶことを明し、今又之を説く、然もみな略して宗を擧ぐ、大本の中には具さに明せり。

良晨生とは、大本の中に、具さに是の如くの(五)宿次、是の如くの(六)執曜の時節に生ずれば、則ち是の如くの根性、是の如くの相貌ありと明せり。宜しく即ち是の如くの教法を與ふべしと、其の言甚だ廣し。又一に淺略深秘の兩説あり、今此の中には、ただ其の綱目を擧ぐるのみ。「求勝上事」とは、即ち是れ發菩提心なり。唯だ如來の具足道の行をのみ求む。凡そ施爲する所、餘事を求むるに非ず、所行廣普にして妙なり。

「微細」とは、謂はく、一字一句を聞きては、即ち能く自ら智力を以て、廣く無量の義趣を解す、廣く演ぶるに辭なき類なり。「思念恩德」とは、乃至師に従ひて一句の義を聞くより、乃至成佛まで、猶ほ忘れずして之を報するなり、常に恩を知りて恩を報

(一) 薩等 常啼者
薩なり。

五五二

するなり。「渴仰」とは、謂はく、心慇懃にして、勝法を希求すること、猶ほ(一)薩陀波
倫の類の如くならば、乃ち爲に説く可し。「歡喜住」とは、謂はく、妙法を聞きて心
に喜び踴躍して、身心に遍す。彼の法を求めずば、乃至餘經の一字をも受けざる
類なり。

(二) 次等 已下は
弟子の外相の過不
及を辯ず。

(三) 羅云 釋尊の
長子辯讚維のこと

(三)次に又其の外相を辯じて、略して説けり。其の色は謂はく、青白なり、即ち是れ
白に非ず、又太だ黒に非ず、是れ吉祥の色なり。大本に廣く明せり、今はただ一隅を
擧ぐるのみ。頭廣とは、謂はく、(三)羅云の頂の如く、傘蓋の類の如し。然も太だ廣か
らず、又小なるべからず、要す直く豊穡にして中を得て相を具するなり。高頸とは、
謂はく、頸太だ長からず、又太だ短からず、要を以て之を言はば、脩く直くして中を
得て過ぎ甚だしからざるなり。額廣而嚴とは、亦謂く、極めて理しく太だ廣し、又須
らく端嚴の相を具足すべし。鼻脩とは、謂はく、太だ隆高きにも非ず、太だ卑平きにも
非ず、當に金甌の類の如くなるべし。(三)身心の道器とするに堪へたる相を略して説
けり、是の如くの人ば、乃ち傳習するに堪へたり。(三)彼の具相の者とは、佛子を謂ふ、
是の如くの人ならば、當に之がために慇懃に攝受して、之を教ふべし。(三)瑜伽論の十地

一、三 觀脫

二、觀脫

四、觀脫

の中に説けり。又必ず是れ繼ぎ傳ふるに堪へたらん者は、當に勤めて之を教授して、
時を失はしむること勿るべしと勸囑す。

「時に金剛手等の具大德者」とは、(一)即ち是れ上來の會衆なり。時に彼の聽衆、是れを説きたまふことを
聞く者、諸の本尊の所説の法に於て、我が法を頂戴して受持し得已る、謂はく、已に
王の教を受けて奉行し流布するが如く、當に供養を作すべし。時に衆重ねて起ちて佛
を禮して、法をして久しく住せしめんが爲の故に、佛の加持を請ふ。佛の所説を聞き
て、頂受し奉持して、一切智の爲に禮を作して、如來の加護を請ふ。所以は何にと
なれば、佛已に是の如くの秘藏を付囑したまふ、重任を荷ひて如來の事を行ふは、其の
職輕からざるを以てなり。(二)然も此の妙法は、如來の在世すら猶ほ怨嫉多し、何に況
や末代惡世の中をや。然も我等已に誠願を發す、要す是の如くの經をして、廣行流布
せしめんと。是の故に諸佛、自在神力を以て我れ等を加護して、所願を成すことを得
しめたまへとなり。「法眼道久しく世に住して一切に遍せしめたまへ」とは、即ち是れ
弘經の願なり。佛の加持を以て、願はくは、此の法眼をして、久しく世に住せしめん
となり。此れは是れ佛知見を開く大慧の道、一切諸佛の所行の路なり、故に法眼道と

(二) 然等 以下法
華經の意を轉用せ

(二) 上行等 法花
經の上行菩薩。

云ふ。當に此の道をして、久しく世に住し、衆生の際を窮め、又横に世界に遍して、流通せざるることなからしむべし。即ち是れ(一)上行等の云はく、佛の有迹の處に隨ひて、我れ皆此の法を傳へんと誓ふ、此れ本門弘經の意なり。

時に佛、彼の請を受けたまふが故に、即ち眞言を以て此の法を加持したまふ、經の中に説くが如し。未だ句義を説かず、更に問へ時に諸の上首の菩薩等、佛の説を聞き已りて、頂戴し受持す、已に廣く摩訶毘盧遮那成菩提加持神變經を説き竟りぬ。

(三) 問 已下五問
答あり、初に三句
に就て四重の異を
問答す。

(三) 問ふ、前の三句とは、一には菩提心を種子とし、二には大悲を根とし、三には方便を後とす。今大悲藏漫荼羅に就きて之を説かば、いはく、中台を以て菩提心とし、次に八葉を大悲とし、外三院を方便とするや。答へて云はく、此れに二種あり。(一)若し修行者の因の中にして之を説くことあり、如來の果地にして之を説くことあり。且く最外院の八部等の世天の如きは、即ち是れ前八心の中の、初め守齋を解するよりこのかた、乃至受用果等なり。然も善根開發して、正道と相應するあるは、即ち是れ大悲胎藏の華臺の因なり。如來は方便力を以て之を引導し、乃至世間の八心を成就せしむるよりこのかた、即ち是れ外院の位なり。次に漸漸に裏に向ひ、及び二乘も亦此の

(三) 若等 因より
果に至る次第。

(二) 第二 大眷屬
なり。
(三) 第三 内容屬
なり。

一、三、亂脫
二、四、亂脫

内にあり。次に又勝法無上の心ありと知りて、稍進みて(二)第二(三)第三に引入するは、皆是れ大悲の句なり。次に佛果を成じて中胎に入るは、即ち是れ方便の句なり。然も此の八葉及び中胎の五佛四菩薩、豈に異身ならんや、即ち一毘盧遮那のみ。如來の内證の徳を分別して、外に表示せんと欲するが故に、一法界の中に於て、八葉分別の説を作すのみ。且く四菩薩の如きは、東南の普賢とは何ぞ。普賢とは是れ菩提心なり。若し此の妙因なくば、終に無上の大果に至ること能はじ、故に最初に名を得たり。(一)次に文殊師利とは、大智慧なり。先に淨菩提心を發す。普賢觀經の次第の如き、乃至毘盧遮那遍一切處、常樂我淨、波羅蜜等に攝成せらるるは、皆是れ淨菩提心なり。次に即ち第一義空を説きて、我が心自ら空なり、善惡は主なし、心は無心なりと觀ず、法は法に住せず等は、即ち妙慧なり。此の第一義空の妙慧を以て、彼の遍一切處の淨菩提心を淨む。平等慧の利刃を以て、無始無明の根を斷ちて、即ち菩薩の正位に入る。故に菩提心ありと雖も、而も慧行なくば、即ち果を成す可からず、故に次に文殊を明すなり。次に西北方の彌勒は、即ち是れ大慈大悲なり。俱に是れ第二の句の中の義なり。此の大悲藏を以て、妙菩提樹の枝條華葉を増長し成就するが故に、次に彌勒

を説くなり。若し慧のみにして悲なければ、則ち方便具せず、則ち菩提を成ずることを得ず、六度を具して衆生を攝すること能はず。次に東北の観音は、即ち是れ證なり。證は謂はく、行願成滿して、此の華臺三昧に入ることを得るなり。若し未だ果を成せざる時に就きて之を觀すれば、此れ則ち差次淺深あり。いま如來平等の慧を以て觀すれば、因より果に至るまで、ただ是れ如來の一身一智行のみ。是の故に八葉皆是れ大日如來の一體なり。(二)若し如來、ただ自證の法のみに住したまへば、則ち人を度すること能はず、何を以ての故に、此の處は微妙寂絶にして、心量を出過せり、何を以てか人に示さん。故に漸次に流出して漸く第一院に入り、次に第二院に至り、次に第三院に至る。此の如くの流出を作すと雖も、亦普門の身を離れず。其の八部の衆は、皆是れ普現色身の境界なり。若し情機に就きて説かば、則ち三重の壇なり。深より淺に至らしむ、乃至世天の眞言の義は淺なり、ただ是れ應身の道なり、方便未だ究竟せず。若し實性を開すれば、即ち世天の眞言と大日如來と、何ぞ相異ならんや。如來よりすれば、則ち深より淺に至り、内より外に至りて三重の壇と成る。衆生よりすれば、即ち淺より深に至り、外より内に進みて三重の壇と成る。(三)又字義の如きは、即

(二)若し等は如來の果地に約す。

(三)又等以下阿字の五點に就て五轉の次第を明す。

ち是れ此の次第なり。初の阿字は東方にあり、梵音の阿字の、即ち動首の義あるが如し。世間の法の、諸方の中には東を上とするに順ふを以ての故に、菩提心の最も是れ萬行の初なるに喩ふ。其の名を寶幢佛と曰ふ。次は即ち是れ阿平字、是れ行なり。若し但し菩提心のみありて、具さに萬行を修せざれば、終に果を成さず、前の四菩薩の義と異ならず。其の佛は即ち是れ花開敷なり。次は即ち暗字、三菩提なり。萬行を以ての故に、正等覺を成ず。其の佛をば阿彌陀と名く、即ち西方なり。次に鼓音は即ち是れ大涅槃なり。其の惡字は是れ正等覺の果なり、果なるが故に次に説くなり。次に即ち入中の惡字は是れ方便なり。此れは是れ毘盧遮那佛の本地の身、華臺の體なり。八葉を超えて方所を絶す、有心の境界に非ず、唯だ佛と佛とのみ乃し能く之を知りたまへり。(二)本誓を念じて大悲藏を開示し、普く衆生を引きて佛慧に入らしめんが爲の故に。また加持神力を以て、普く身口意を現し、生死の中に遍滿したまふ、當に知るべし、此れは即ち是れ方便なり。若し方便を離れては、如來の本地は尙ほ説く可からず、何に況や人に示さんや。諸の上首等の菩薩の爲に説く可からず、何に況や生死の中に流入せんや。此の方便を以て大空に同すれども、而も衆像を現す。當に知るべ

(二)本誓等の化他なり。果後の

(一) 普門身 佛部
(二) 法界身 蓮花部
(三) 金剛身 金剛部
(四) 金等 地大阿字部

(五) 我等 法華經
方便品の文。

し、一切大會の漫荼羅は、皆是れ一身にして別身なし。即ち是れ(一)普門の身、即ち是れ(二)法界身、即ち是れ(三)金剛界身なり。

又菩提は黄色、是れ(四)金剛の性なり。次の行は赤、是れ火の義なり、即ち文殊の義に同じ。萬行は妙慧を以て道とす、慧を離れて作あることを得ず。次の成菩提は白色、即ち是れ圓明究極の義、又是れ水の義なり。(五)我が昔の所願の如きは、いま已に満足し、一切衆生を化して、みな佛道に入らしむ。是の事の爲の故に、是れ大悲を起すが故なり。次は即ち是れ大涅槃の迹極まりて本に返る、衆生有縁の薪盡くれば、則ち如來方便の火息むが故に、涅槃なり。佛日已に涅槃の山に隠るるが故に色黒なり。中心は空なり、一切の色を具せり、即ち是れ加持世界の漫荼羅普門の會なり。畢竟清淨にして、有せざる所なし。

其の百字輪の、外より内に向ふ所以は、亦是れ此の義なり。中台の如く、一切の本尊も亦此の如く説くべし。金剛手の種子の字の如きは、即ち五事を成す。字は是れ菩提心、字は是れ行、字は是れ三菩提、字は是れ涅槃、字は是れ方便なり。方便を云ひて後とする所以は、是れ此の義なり。蓮華尊の如きは、亦五事あり。字は是れ菩提

心なり、字は是れ行、字は是れ成菩提、字は是れ涅槃、字は是れ方便なり。文殊の如きは、字を以て種子とす、亦五義あり。字は菩提心、字は行、字は成菩提、字は涅槃、字は方便なり。餘の一切尊の種子の字も、みな亦是の如く廣く説くべし。

是の義を以ての故に、金剛手とは即ち是れ大日如來なり。觀世音とは亦是れ大日如來なり。文殊師利とは、亦是大日如來なり。乃至鬼神八部にも、一一に亦此の義あり、亦即ち是れ大日如來と成る。體は是れ一なりと雖も、義は各異なり。瑜伽の中に毘盧遮那の言はく、我れは即ち是れ文殊觀音等なり、我れは即ち是れ天なり、即ち是れ人なり、即ち是れ鬼神なり、即ち是れ龍鳥なり、是の如く等、即是にあらざることなしと云ふ所以は、此の義に由るなり。

又云はく、此の大悲藏の本尊の位次等、及び形色各殊なり。未だ深く瑜伽に入らざる者の、初學の時正しく本尊を觀せざるが爲の故に、佛方便を以て此れを示して、心をして所緣あらしめたまふのみ。觀成る時に及びては、法力に加せらるるを以ての故に、自然に恒に佛會と相應す。たとひ念を作さずとも、猶ほ自ら明了なり、況や觀を加へんや。是の如くなる時、自然に眞に漫荼羅を見るなり。此の(一)地とは、即ち是れ

(一) 地 如來の果
地なり。

(二) 次の圖 八葉に文殊觀音等あれども、其の外に觀音院文殊院等あるを云ふ。

淨菩提心是れなり。已上に表する所は皆是れ大日如來の法身、妙莊嚴の相なり。又觀音・文殊・普賢・彌勒、已に八葉の中にあり、即ち大日如來の大法身なり。人を度せんが爲の故に、漸く外に出でたまふ、故に(二)次の圖の中に、また文殊觀音等あり、類を以て解す可し。

又云はく、八葉の中の如きは、普賢は是れ菩提心なり、文殊は是れ慧なり、彌勒は是れ悲なり。此の菩提心は、即ち是れ大日如來に菩提心あるなり。大慧は即ち是れ大日如來なり、此の大日如來を離れて、別に慧あるにあらず。悲は即ち是れ大日如來なり、大日如來を離れて、別に悲あるにあらず。當に知るべし、此れに准じて之を説かば、萬徳みな爾り、猶ほ天台の法身般若解脱の義の、若し但し法身のみ主として名を得る類の如き、此れと相合へり。

(三) 問 第二問答 百字輪の内外の次第を明す。
(三) 若等 外より内に向ふ。
(四) 若等 内より外に向ふ。
(五) 迦行Ka方提Kam 涅槃Kai方便Kai

(三) 問ふ、百字輪の外より内へ、一一に是の如くの次第を作すは、即ち是れ漫荼羅に引入し、漸く攝して中に至る義なりや。答ふ、此れは因果に於てするを謂ふ。(三)若し修行者ならば、初に菩提心を發し、次に進行し、次に正覺を成じ、次に涅槃に住し、次に方便を起す、即ち是の如く次第を作す。(四)若し果地よりして説かば、即ち(五)迦字

(二) 問 第三問答、行者の修觀に約して中臺を菩提心となす等を明す。

を以て最も内におけ、次に行、次に菩提、次に涅槃、次に方便を以て最も外におけ。其の迦字は阿の體に同じ、即ち法體の果とす、菩提心因地の説を作さざれば。法身より應を起し、次に流して外に向ひて以て衆生を度す、猶ほ漫荼羅の、中胎より出で、八部世天の位に至るが如し。又外より佛果に引入するは、猶ほ漫荼羅の、乃至八心の初より、直ちに成菩提方便等に至るが如し。云はく、仰壞擊那婆等の字は、亦出入の義に隨ひて、或は百字の内におき、或は百字の外におけ。

(二) 又問ふ、行者の心中の觀行に就きて、漫荼羅の大悲藏の義を作さば、即ち中胎を以て菩提心として、漸次に外に向ひ、乃至世間の天位を方便とするや。答ふ、凡そ進行する者に次第あり。先づ法に依りて持誦するとき、眞言手印等を作して圓明を觀じ、或はただ字を觀じ、或はたゞ印を觀すれども、一事を作すに隨ひて、成する時は三事を成ずるなり。初に圓明を觀するに、亦即ち見ることは能はざれども、手印眞言及び本尊を念ずるに由るが故に、三業漸く淨まる。心障淨まるが故に、即ち漸く圓明を見る、若し圓明を見、圓明を見る時は、或は其の中に於て、本種子の字宛然として顯著なることあり、其の形色の如くなり。若し是の如く見るを得る時、自心の亂想息除

し、湛寂の心常一なり、外縁の爲に動かされず、既に是の如く見るは、猶ほ是れ外縁なり。次に當に外を引きて内に向ひて、是の如くの觀察を作すべし。此の圓明とは、即ち我が心より出づと、當に知るべし、内も亦また是の如しと。夫れ圓明の清淨は、即ち心の體性なり、別の法なし。方便を勤めて内心を觀察するに猶るが故に、即ち此の圓明の字を見る、唯だ是れ自心なり、また外縁ならざるなり。乃至若し外圓の中に、明かに本尊等を見ること、上の方便の如し。今内觀の時は、即ち是れ自身、毘盧遮那等の本尊と作るなり。既に是の如く瑜伽の理と相應するは、即ち是れ隨分の成就なり。瑜伽と相應するを以て、所觀意に隨ひて即ち成る。即ち此の心の八葉を觀すること、上の方便の如し。即ち此の心の華臺の上に於て、漫荼羅の中胎をなし、其の外の八葉も亦佛の位次に隨ひて列ね布く。又云はく此の八葉は即ち是れ大悲藏の第一重なりその時に行者、心の八葉を觀じて中胎を作し、其の身は即ち是れ漫荼羅なりと觀す。心より以上を第一院とし、心より下齋に至るまでは第二院なり、齋より以下を第三とす、世間天の院なり。諸尊の形色相好、各各差別にして宛然なり、其の自身の中にして現に之に對すること、猶ほ親まのあたり佛會に入るが如し。然るに未見諦の人は、猶ほ未だ毘盧遮那の如く、種種の

神變等を作すこと能はず、ただ是れ觀心成就するのみ。然も一事あり、眞實にして虚しからず、謂はゆる我れ即ち是れなり。我即とは、決定して諦信す、我れは即ち法界なり、我れ即ち毘盧遮那なり、我れ即ち普門の諸身なりと。此の事謬らず、上の眞言加持の義の中の、我即法界と云へるが如し。又云はく、法身に自在神變の加持あること、此れ疑ふに足らず。瑜伽金剛頂の中に、數百の喩を引けるが如し、大本には廣く其の意を説けり。云はく、帝釋の天宮の中に處在するに、其の地一切皆瑠璃實にして、外内清淨なり、一一の天衆自ら其の宮室の内に居りて、而も帝釋常に其の宮にありて、宛然として相對すと見るが如し。何を以ての故に、此の地等は、一切皆妙寶所成にして、遞相に暉映し、更相たがひに引發するを以てなり。彼れも來らず、此れも去らず、亦相和合せざれども、而も緣具するが故に是の如し、而も實には無生にして所有なし、信せざる可からず。又諸天の歡喜園にあるが如きは、放逸なること太だ甚だし。其の時に宿業の力を以ての故に、樹葉の中より、法教の音ありて、彼れを尋して正行に住せしむ。その時に天等、即ち暫く放逸を止めて、心に善行を念ず、然も實には一一に樹葉の中に求むるに、不可得なり。亦天の身中より生ずるにあらず、自にも

(一)勇健等 菩提
 (二)大梵王 自性
 (三)本宮 法界宮
 (四)一切の天衆 諸
 八業及び三重の諸
 尊に喩ふ。
 (五)諸天等 自性
 自然の内大眷屬互
 に渉入し無量自在
 なるに喩ふ。
 (六)端等 微細法
 身四曼の妙相に喩
 ふ。
 (七)煩等 自性會
 の諸尊は永く煩惱
 無明の心生ぜざる
 に喩ふ。
 (八)無等 自然無
 作の功德に喩ふ。
 (九)淨等 無作の
 應用に比す。
 (一〇)亦等 自性法
 身無方の應用に比
 す。
 (一一)皆 天衆を指
 す。
 (一二)獨等 自眷屬
 各各の一徳みな大
 日如來なるに比す

あらず、他にもあらず、而も此の事を成す。又修羅と戦ふ時の如き、天鼓聲を出して
 天衆を安慰し、(一)勇健の想を發さしめ、修羅をして怖畏し退散せしむ。而も實には此の
 鼓、形もなく、住處もなし、但し諸天の功德衆縁の所成なるを以て、皆不可思議な
 り、況や法身をや。又(二)大梵王の(三)本宮の中にあるが如きは、(四)一切の天衆、見るこ
 とを得んと念欲する者、みな其の前に現れざるることなし。(五)諸天等、みな彼の清淨の
 行と、又(六)端嚴相好第一なることを知るを以ての故に、(七)煩惱貪欲の心息みて、(八)無量
 の善願を生ぜんが爲に、分に隨ひて(九)淨行を進修す。然も梵王は本宮の中に於て、動か
 ず搖がず、(一〇)亦我れ當に普く彼れに應じて、各各にみな其の前に現るべしと作意せ
 ず。(一一)皆是の念を作す、(一二)獨り我が爲に現れ、我が爲に法を説くと。是れ等の世間す
 ら、少福の願を以てするに、尙ほ是の如くの不思議の用あり、何に況や如來の法身に
 して、是の如くの自在神力加持神變を成就すること能はざらんや。然も常途の説法
 は、或は法性と云ひ、或は法身と云ひて、寂靜なること空の如くにして、動作する所
 なし。都て是の如くの力用を具足すと説かず。凡そ神變を起すは、皆是れ有爲の心、
 三昧の力なりと以爲へり。而も法體と言はず、是の如きは此れ其の未了なり。

(一)問 第四問答
 通知院に唯だ三位
 のみを存すること
 を明す。
 (二)眞言 普通眞
 言藏品。
 (三)手印 密印品
 (四)問 第五問答
 四佛の次位を明す

(一)問ふ、漫荼羅の第一院の東方には、唯だ三角と虚空眼と、及び如意寶との三事の
 みありて、餘は空しく缺ぐ、云何。答ふ、(二)眞言及び(三)手印の中の如く、如來豪相・
 如來舌・如來牙・如來齒・如來齋・如來甲等の如きは、皆此の重におくべし。當に之を次
 列すべし、其の佛頂は第三院にあり、此の中にはなし。

(四)問ふ、寶幢佛は是れ何の義ぞ。答ふ、此れは是れ菩提心なり。世の軍中に幢あ
 り、是れ衆中の首、軍の標幟として、咸く瞻望する所なり、進止の節、之に隨はざる
 ことなきが如く、猶ほ一切萬行の如きは、皆此の菩提心の爲なり。之を以て標とし主
 とす、故に名を得。實に次いで即ち華開敷佛と云ふは何ぞや。此れは是れ行の義な
 り。十度萬行、菩提心を資けて次第に敷榮し、牙莖華葉、滋榮して可愛なり、故に名
 を得。華開敷に次いで阿彌陀と云ふは何ぞや。此れは是れ受用佛なり。即ち是れ大果
 實を成して、其の果を受用すること無量なり、不思議現法の樂なり、皆名を得るな
 り。次に鼓音佛とは方便なり。既に大果を得ること、是れ自受用のみならんや。即ち
 普く一切衆生の爲に之を演ぶ、種種の方便成所作智なり。猶ほ天鼓の音の、思なくし
 て事業を成すが如し、故に名を得。又(五)前に北方阿閼と云ふは、經の誤なり。此れは

(五)前 具緣品を
 指す。

(二) 瑜伽 金剛頂

是れ(一) 瑜伽の義なり、此れと相應せず、鼓音佛を以て定とす。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第二十終

國譯大毘盧遮那經供養次第法疏卷上

零妙寺僧釋(一) 不可思議 撰

毘盧遮那と

(一) 實相の法と智と(二) 緣起の法と

聖者妙音阿闍梨とを稽首したてまつる

恩を垂れて(三) 法性海を證せしめたまへ

大毘盧遮那成佛神變加持經(五) 供養次第法

真言行學處品第一

此の經法を釋するに四門を以て分別す。初には大意を述べ、次には來由を説き、三には題目を釋し、四には文に隨ひて解釋す。 初に大

意を述べれば、夫れ真性至理は言を離れ像を絶す、機に應じて示現す。無相は顯すべ

きに非ず、謂はゆる阿字等の門、妙に其の理を明す。今此の經は、理は詞に蘊み、意

は文の外に絶せり。是の故に如來の加持神力を以て、對するに秘印を以てし、導くに

國譯大毘盧遮那經供養次第法疏卷上

(一) 不可思議 善
無畏三藏の弟子な
り、後に自傳あり

(二) 實等 本有の
理智。(三) 緣起等 修生
の教行。

(四) 法性等 本不
生の理。

(五) 供養次第法
大日經第七卷は、
龍猛菩薩總持塔内に
於て相承せし大本
中、供養の儀式を
明せる部分にし
て、善無畏三藏の
金粟王塔下に於て
感得せしものと同
文なるが故に、三
藏は合して之を翻
譯せるなり。感得
の事由は下に詳か
り。

眞言を以てす。所以に若し師に従ひて受學せざれば、其の門に入ることを禁ず、其の人に非ざれば、妄りに授け傳ふることを制す、未だ灌頂を経ざるものは、其の輒く聞くことを禁ず。若し見聞し頂禮することを得れば、恒沙の罪を除滅し、説の如く修行する者は、徳海其の身に集まる。

次に來由を説かば、昔し中天竺の國王に四人の子あり。其の王、命終の時に臨みて、王后請問すらく、大王若し崩じて以後は、何れの子か當に嗣位とすべきと。王即ち答へて曰はく、小子能く位を繼ぐ可しと。是に於て、父王崩じて後、大臣百寮みな悉く來り集まりて、遺制を請問す。王后即ち答ふること、王の終の言の如し。是の時に王后及び諸兄、并に大臣等、小子を奉請して、將に王位を繼がしめんとす。小子答へて曰はく、我れ誓願あり、出家學道して、群品を濟はんことを望む、位を繼ぐに堪へずと。母后等再三重ね請ふこと、父の王の遺言の如し。小子も亦前の如く辭謝す。母后等三たび請ひて已後、強て位を繼がしむ。小子敢て違逆せず、遂に王位に即きて後、更に亦思惟すらく、我れ此の國に住しなば、出家することを得ず、我が阿姨、隣國に后たり、宜しく以て投託すべし、必ず能く出家せんと。方便して逃出して、其の國に

奔り赴く。其の國境に到るに、即ち鎮將ありて、問ひて曰はく、汝は何人ぞやと。小子即ち答へて曰はく、我れは是れ中天竺國の王なりと。鎮將曰はく、若し是れ國王ならば、何を以てか獨り來れると。答へて曰はく、我れもと出家學道せんことを冀ひ望む、若し久しく本國に住せば、必ず出家することを得じ、出家學道せんことを深く冀ふと。禮拜して使を遣して聞奏す。王后之を聞きて、人をして來り迎へしむ。小子、王后に見えて、踟躕して志願を説く。王后説を聞きて、悲泣して涙を流し、哀感して心を傷む。良久しくして曰はく、汝が姓は是れ刹帝利、淨飯王の子孫、釋迦如來の遠き從姪なり。我れ聞く、釋迦は太子の位を捨てて城を出て、道に入りて乃ち正覺を成すと。天下に捨て難きは、唯だ寶位を弃つるなり。汝は釋迦に同じく、國王の位を捨てて大誓願を發す、必ず成佛することを得んか。今日より以後、百姓の門に隨ひて、鉢を持ちて乞食し、鹿飯持齋せんこと、以て悲傷す可し。然りと雖も大丈夫の冀ふ所、至心の誓願、奈何ともす可きことなしと。便ち許して出家せしめ、爲に境内の高徳の法師を請ひて、爲に弟子と作して、出家學問せしむ。小子稟性明慧にして、一たび聞きて、便ち妙宗を領す、二たび問ひて、千百を比知す。學ぶこと多年所ならずと

雖も、學者盡く達す。是に於て、其の法師辭して曰はく、我が解する所盡きぬ、更に以て演説する所なし。吾れ聞く、某の國に賢聖太徳ありと、宜しく彼の所に到りて、學ぶべしと。小子、教を奉けて禮謝して退き、往きて賢師の所に至りて、修學すること前の如し。乃至五十餘國を經歷す。乃至北天竺に乃ち一城あり、乾陀羅ガンダラと名く。其の國の王、和上を仰ぎ憑たのみて、法を受けて念誦す、其の經文廣く義深くして、供養の次第を尋遂すること能はず。和尙に供養の方法を求請す。和上請を受けて、金粟王の造る所の塔の邊に於て、聖の加被を求むるに、此の供養法、忽ちに空中に現れて、金字炳然たり。和上一遍略讀みて、明に記著す。空に仰ぎて云はく、誰れが造る所ぞと。云はく、我が造る所なりと。云はく、誰れか我れなると。云はく、我れは是れ文殊師利なりと。即ち書人を喚びて、遂に便ち寫し取りて、即ち其の王に一本を與へ、自ら一本を寫して、行に隨ひて將ち行き、四方に流通す。謂はゆる小子とは、厥の號は善無畏三藏和上即ち是れなり。小僧不可思議、多幸にして、面のあたり和上に諮ひたてまつりて、聞ける所の法要、隨分に抄記す。

三に題目を釋せば、大毘盧遮那成佛神變加持經供養次第法眞言行學處第一とは、大

とは、即ち是れ無邊の義なり。毘盧遮那とは、是れ日、謂はゆる即ち慧日なり。成佛とは、正覺正智を證する義なり。神變加持とは、神力の所持なり。經とは、貫穿縫綴、能詮此にあり。供養とは、理事の供養なり。理とは、理に會ひて入證す、是れを理の供養と云ふ。事とは、心を盡し力を竭して、香花を營辦して、佛海を供養す、是れを事の供養と言ふ。次第とは、作禮及び發遣の前後の次第なり。法とは、軌則の義なり。眞言とは、虛妄に簡ぶ。行學とは、眞言を行じ學ぶなり。處とは、此れに四種あり、一には如法界自性、二には教本、三には傳教の師、四には妙山輔峰等なり。品とは、品類なり。第一とは、此の法に五品あり、此の品は最初なり、故に第一と言ふ。是を以て、大毘盧遮那成佛神變加持經供養次第法眞言行學處品第一と言ふ。

四に文に隨ひて解釋せば、此の中に三分あり、謂はく、序正流通なり。第一品は是れ序、次の三品は是れ正説、最後の一品は是れ流通なり。序分の中に就きて、初に二頌あり、歸敬勸信序なり、然初より以下は、精勤修行序なり。初の中に四門あり、初の中に二句は、主を敬ひて徳を歎する門、次の二句は、經に依りて現るる所の門、次の二句は、法を成し益を得る門、次の二句は、本に契ひ説を結ぶ門なり。

「毘盧遮那」此には日と云ふ。「淨眼を開敷したまへる」とは、妙理を開悟するなり。「我」とは、文殊なり。「供養」とは、理事供養なり。「所資」とは、諸の本尊なり。「衆の儀軌」とは、諸の印眞言等なり。「次第を成せんが爲」とは、禮拜發遣なり。「彼の如く」とは、慧日尊を指す。「本心をして」とは、本不生の理を悟らしむる心なり。「我今」の一句は、上より已來の意を結ぶ。

精勤修行序の中に、分ちて六門とす。初の一偈の全は、信解を成就する門、二に一偈半は三寶を信せよと勸むる門、三に有情信解より以下の二十五偈は、行を勸め戒を制する門、四に依此正住の一偈は、正戒重禁門、五に妙眞言門の一偈は、覺心得益門、六に欲於已下の十偈は、一生成佛門なり。

初段の中に就きて、「然も初に自他の利成就す」とは、所成の果を擧ぐ。「無上智願の方便」とは、能成の智を明す。「彼れを成ずる」とは、所證の果を指す。「發起」等とは、果を擧げて因を顯す。第二段の中に約するに、「悉地の諸の勝願を満したまへる」等の二句は、惣じて佛僧の二寶を表す。「彼等」等の一偈は別して釋す。「眞言形」とは、即ち是れ眞言の字の莊嚴する所の身なり。「住する所の種種の印威儀」とは、印及び右脇

に臥すことを明す。「所行の道」とは、即ち是れ如法界自性なり。「方廣乘」とは、即ち是れ大日經なり。以上は三寶を諦信することを明し了れり。問ふ、此の中の歸敬三寶と、初分の歸敬佛寶と其の義云何。答ふ、初分は文殊の自ら敬ふことを顯す、此の中には、後代の修行者の法則を明す。問ふ、文殊も三寶を歸敬するや否や、答ふ、歸敬す、謂はゆる我れ大日經に依るとは、即ち是れ法を敬ふなり、自身を輕んせざるは、即ち是れ僧を敬ふなり。同體の三寶、知る可し。

第三段の中に約するに、「有情の信解に上中下あり」とは、即ち是れ六趣の衆生なり。「若於最勝」等とは、前の大日經を指す。「調伏の行」とは、三昧耶を犯さざるなり。「別律儀」とは、大日經を謂ふなり。「具緣の衆の支分」とは、是れ道場を修造する支分なり。「一心に住す」とは、心を一にして、師の所に繋くるなり。「三昧耶」とは、平等本誓等を明す。「道場」とは、妙圓壇なり。「教本」とは、是れ毘盧遮那經なり。「親しく尊の所に於て」とは、これ灌頂の師なり。「勝三昧耶及び護を獲て」とは、傳法灌頂を受けたる人の所得なり。「正眞言の平等の行を攝す」とは、本不生の理の中に於て、安心して動かざるなり。「此の眞言の最上乘に入る」とは、入とは解なり。最上乘とは、

即ち是れ毘盧遮那所證の、理の自體なり。「密行」とは、眞言を行する行者なり。「軌範」とは、即ち阿闍梨等なり。「廣大の諸の功德」とは、軌範者即ち是れ功德大海、其の身に住在するなり。何を以ての故に、經に云はく、若し佛を見たてまつりて禮拜せんと欲し、若し佛を供養せんと欲せば、此の人を禮拜し供養せよ、佛と異なることなしと。何を以てか異なることなきとならば、五種の眞言心及び印等を以て、其の身を莊嚴するが故に。「契經」とは、毘盧遮那經を指す。「瞋に過ぎたるは莫し」とは、華嚴經に廣く説けるが如し。「淨菩提心」とは、即ち是れ眞言なり。「常に忍辱を懷ひて過を觀ざれ」とは、世間の法の恐の中に於て、恐び難きは、唯だ恩德に背く者あるが故に、忍を勧め勵ますなり。俟とは待なり。謂はゆる「時を俟つ」とは、正しく眞言を修せんと欲する三昧の時なり。忽ちに檀越の、講説を請ふことあらば、即ち語りて導ふべし、我れ三昧を修して以後、汝の爲に講説せん、當時は不可なりと。「清白醇淨の法」とは、體理の中に於て、恒に恒沙の性の無漏の功德、及び布施等の諸度門を得ることあり。「諸の酒に由る」とは、此の酒は放逸の本なり、若し飲めば三昧を亂す。「我慢を増す」とは、空執を増す、妄執深きときは、則ち習定更に遠し。「今已に」等と

は言略すれども義深きことを嘆す。「廣く知解して決定を生せしむ」とは、多聞の益を讚す。上より以來は戒理定慧を略説すること、已に了る。

第四段の中に、「此れに依りて正しく平等戒に住して」とは、正しく平等戒に住すとは、戒性の心に住して、持戒の心を起さざれとなり。前には以て德を明す、此れは犯の因を禁す。

第五段の中に、「妙眞言門の覺心者」等とは、相應とは二あり。先づ本尊を觀せよ、本尊を觀すること熟しなば、自身本尊と作りて、此の心散亂せざるを相應と言ふ。智者本不生の理を悟るなり。

第六段の中に、「明法」とは眞言なり。「智者蒙師」等の二句は、前を結び後を起すなり。「妙山輔峰」以下の三偈半は、行者所依の處を表す。此の中に四處あり、各表制あり。一に妙山とは、高妙の名山なり。輔峰とは、大山の懷の裏の峰の、居ること安隱なる可きなり。半巖の間とは、石壁の中に穴ありて居る可きなり。龕カネとは三種あり、一には室龕、二には土龕、三には石龕なり。謂はく、窟クツに似て尊像を安ずる處を、名けて龕とす。窟とは石室なり。兩山の中とは、泉石清潔にして、修行するに安隱なる

(一) 達摩 Dharma
 法檀陀伽 Daritaka
 山巖摩登伽 M. shan
 今の釋は義翻に依
 るか。

(二) 頭陀 梵語 D
 hūta は古來抖數
 と譯す、拂ひ去つ
 る義なり、俗塵を
 拂ひ去つることを
 意味す。

處、河等の處なり。菱とは菱角なり。荷とは蓮葉なり。涇川とは、常に流れて水の絶えざるなり。洲とは水中の居る可き所なり。岸とは側傍なり。謂はく、河の崖側の清潔なる處は、居て道を修す可し。次の一句は、可否を離れて宜しき處を現す。慣とは心亂るるなり、靜ならざるなり、人物の煩亂し鬧しき所を謂ふ。三には草木林樹の處を明す。扶疏とは、樹木の敷茂せる貌なり、林藪寂寥にして、住して修行す可き處なり。乳木とは、桑穀なり。祥草とは、此の土の黄茅なり。次の二句は其の可不を明す。四には寺塔の處を明す。練若とは三あり、一には(一)達摩、二には檀陀伽、三には摩登伽なり。達摩とは、是れ菩提場なり。檀陀伽とは、是れ穢草なきなり。摩登伽とは、誼動なき處なり。此の中の所説は摩登伽に約す。次の一句は可不を簡ぶことを明す。務とは事なり。「五欲」とは、色聲香味觸なり。「諸蓋纏」とは、五蓋なり、慳貪と瞋と昏沈睡眠と掉舉散亂と疑蓋となり。「悉地」とは成就なり、亦是成菩提と云ふ。「淨命」と云ふは、少欲知足の行なり、胡語には(三)頭陀と云ふ。具さには十六あり、經論隱顯するが故に、十二と説く、十六とは、衣に四、食に六、處に六なり。

衣の四とは、糞掃衣を着ると、毳衣を着ると、納衣を着ると、三衣を畜ふるとなり。

(一) 僧衣 僧衆共有の衣
 (二) 檀越 施主の義なり但し施者の檀越は檀越の字恐らくは漢語か
 (三) 邪命 出家修道の目的に相應せざる邪なる方法を以て活命するを謂ふ
 (四) 等化 平等教化

糞掃衣とは、火に焼けたると、牛の嘔みたると、鼠の嘔みたると、死人の衣と等なり。外國の人は此の如く等の衣を巷野に弃てて、事糞掃に同じければ、糞掃と名く。行者取りて洗ひ染め縫ひ治して、用て身に供す。問ふ、何を唯だ此の衣を受くるか。三品あり、下は治生し估販し、種種の邪命を以て衣服を得。中は前の過を遠離して、(二)僧の衣、(三)檀越の施衣を受く。上は僧と檀越とを受けずして、糞を受く。何を僧を受けずして、此の衣を受くるや。僧の法は須らく同すべし、僧事を料理し、處分し、作使し、事を斷り、人を擯し、心を亂し、道を廢すればなり。何を檀越を受けざるや。若し檀越を受けば、衣のために追求するを以て、多く(三)邪命に墮つ。又則ち親着を生じて、出離することを得難し。又得る處をば偏に親み、得ざる處を便ち疎んず、(四)等化を妨ぐ。又數數得れば慢を生じ、得ざれば怨言す、彼れ無知にして福田を知らず、施すべきに施さずと。或は自ら鄙恥して憂悔を生ず。又數數往けば道を廢し、去なざれば怨を致す。又好き人を憎み嫉み、良善を譏り諷る、便ち往かんことを欲せず。是の多くの過を見るを以て、是の故に檀越の施衣を受けず。何を唯だ糞を受くるや。事少く、道を増し、過を離れて罪なし、故に唯だ之を受くるのみ。

霜衣せういと言ふは、濕し洗ひたる烏狩の細毳なり。行者、糞の取る可きなければ、此れを得て衣となす。納衣なふいと言ふは、朽故し破弊せるを縫ひ納めて、身に供す、好き衣を着せず。何となれば、若し好き衣を求むれば、惱を生じ、罪を致し、功を費し、道を廢す。又好き衣は、未得道の人の貪着を生ずる處なり。又曠野にあれば、多く賊難を致し、或は命を奪はるるに至る。

三衣と言ふは、五條と七條と大衣となり。上行の流は唯だ此の三のみを受けて、餘衣を畜へず。何となれば、白衣は樂を求めて、種種の衣を畜ふ。外道は苦行す、裸形にして恥づることなし。佛は中道に住して二邊を捨離したまふ、故に三衣を畜へしむ。又多くの衣を求むれば、功を費し道を廢す、少ければ事を濟さざるを以て、三衣を畜ふ。然も三衣を以て身に供するに、事足る。若し作務を營み、大小の行來には、五條を着すべし、善事の爲には七條を着すべし、俗人を化攝して敬信に至さしむるには、須らく大衣を着すべし。又屏處に在りては五條を着し、衆に入る時には七條を着し、若し王宮聚落に入る時は、須らく大衣を着すべし。又調和温暖の時は五條を着し、寒冷の時は七條を加へ、寒苦嚴切なるには、加ふるに大衣を以てすべし。故にむかし一

(二) 烈 原本裏に作る、今私に改む。

時、正多に夜天寒さ(二)烈しきを以て、如來彼の初夜分の時に於ては五條を着し、夜久しくして轉た寒きときは七條を加へ、夜の後分に於て、天寒きこと轉た盛なるときは、大衣を加へたまふ。佛便ち念を作したまはく、未來世の中の寒苦に忍へざる諸の善男子は、此の三衣を以て身に充つることを得るに足らんと。此の多くの義を以ての故に、三衣を畜ふ。

(三) 漿 原本水に作る。

食の中の六とは、一には乞食、二には次第乞食、三には不作餘食法、四には一坐食、五には一搗食せんじき、亦は節量と名く、六には不中後飲(三)漿なり。

乞食とは、人の中に三あり、下中上なり。下品の流は、恣に出家すと雖も、邪命にして自活し、田を耕し、種植し、活生し、方博し、諸の工巧を作し、種種の邪命を以て、自ら存活す。中品は前の過を捨離し、僧の食と檀越の請とを受く。上行の人は僧の食と檀越の請食とを受けず、唯だ乞食を行ふ。何ぞ僧と檀越の請とを受けざるや。過は(三)前に同じ。何の義の故に専ら乞食を行ふや。謂はゆる二あり、一には自の爲なり、事を省き道を修す、二には他の爲なり、世人を福利す。次第乞食とは、通じては亦乞食に收む。乞食の時、偏の過を離るることを彰さんとして、別して論ず。凡愚は

(三) 前 衣に就て過を擧げたるを指す。

(一) 餘食法 一處にて正食をなし、餘の作法をなさず、更に他の處に於て正食を作すに於て、餘食法を作すは、頭陀行には餘食を作さざるに餘食法を作さざるなり。

(三) 一坐食 日中の正食の外は小食即ち朝の粥等をも食せざるを云ふ。

味を貪り、貧を弃てて富に従ふ、小行は慈悲狭く、富を捨てて貧に従ふ。上行の流は、貧を離れ狭を去りて、等しく衆生を慈しみ、貧富を簡ばずして、次第に等しく乞ふ。不作(二) 餘食法と言ふは、律の中に説く。人ありてまた次等乞食すと雖も、求のたる處に於て、數々正食を得、餘食の法をなして數數食す。行者念を作す、此の餘食の法は、世尊病者に開聽したまふと雖も、我れはいま病なし、受くべからず、是の故に餘食の法を作さずと。通じて攝せば一坐食に收む、故に經論の中に、多くは別に説かず。律の中の別なるは、彼の一坐食は、中前に於て餘の小食を食せず、此れは數數正食するを遠離するに約す、此の不同あり、是の故に別に説く。

(三) 一坐食とは、人ありて數數正食せずと雖も、中前に於て其餘の餅菓粥等を數數食す。行者念を作す、愚夫は身を養ひて煩惱を増さんが爲に、受くること數數す、我れはいま道の爲にして身を養はんが爲にせず、煩惱を破らんが爲にして、結を増さんが爲にせずと。故に一食を受く。又思はく、一食を求めんが爲すら、已に道を妨ぐ、況や多食を求めんをやと。故に唯だ一食す。又飯食を觀するに、多苦の中より生ず、若し多食を受けなば、惱亂彌多し、故に一食を受く。又飯食を觀するに、信心の施す所、

(二) 消等 信施に相當す可き法施を以て報ゆること難しの意。

一食すら(二) 消し(一) 回し、何に況んや多食をや、故に一食を受く。

一揣食とは、經の中に亦は節量食と名く、一たび受けて便ち止むを一揣食と名け、節儉にして少食するを節量食と名く、何が故なるか次に辨せん。人ありて一食の法を受くと雖も、一食の中に於て、意を恣にして飽くまで噉へば、腹に滿ち氣服れて、睡眠して消息す、半日に滅せず、道法を修することを妨ぐ。故に須らく節量すべし。又多食すれば、煩惱を増長して、折伏す可きこと難し、故に須らく節量すべし。又多食すれば、睡眠を増長し、消し難くして病の如く、身をして安からざらしむ、故に須らく節量すべし。又行者は法身を求めんが爲に、漸く食身を捨つべし、故に宜しく節量すべし。節量すること幾許に至る。己れの堪ふる所に隨ひて、三分にして一を留めて諸の鳥獸に施し、餘は便ち自ら食すべし、能く少きは益善し。

言ふ所の不中後飲漿とは、人ありて飯食を節量すと雖も、猶ほ味を貪りて、中後に於て種種の漿を飲む、菓漿・蜜漿・石蜜漿等なり。是の漿を求めんが爲に、多く邪命を致し、功を費し道を廢す、是の故に飲まず。又此の心を觀するに、放縱し難きこと、馬の勒なければ左右に草を噉ひて、疾疾にして御者の意に隨ふこと能はず、加ふるに

彎勒^{ひろく}を以てすれば、方に能く速かに進み、人の意に随ひて去るが如し。故に裁斷す。處の中に六とは、一には阿蘭若處^{アランニヤ}に在り、二には冢間に在り、三には樹下に在り、四には露地に在り、五には常坐、六には隨坐なり。

(一) 阿蘭若とは、此には翻じて空閑處と名く。雜心に説くが如きは、(二) 一弓は四肘あり、村を去ること五百弓を一俱盧舍^{クルシヤ}と名く、一俱盧舍半を阿蘭若處と名く、計るに三里許あり。頭陀の行者極めて近きは此に在り、能く遠きは益善し。何ぞ此に在るや。行者念を作す、我れもと家にありし時、父母親屬共に相纏縛す、是れが爲に之を捨てていま出家し已りて、若しまた師徒同學知識共に相結着せば、俗と異なることなし、是の故に須らく捨てて蘭若に在るべしと。又聚落は男女參雜して、多く俗染を増す、宜しく中に住すべからず。又聚落に近ければ、音聲慣聞^{おんねん}にして、定意を修することを妨ぐ。

冢間と言ふは、冢間には、多く尸屍の爛壞して胙脹し、臭穢なるあり。臭穢を觀るときは、不淨觀門に入り易し。又冢間には、死尸の破壞し、蟲の食し、火に焼けて、分離散滅せり、之を觀れば無常觀門に入り易し。又冢間には、骸骨分散せり、之を見

(一) Amraya 森林
(二) 一弓は四肘あり、一尺八寸なるが故なり。

れば空無我觀に入り易し、故に冢間に在る。

樹下と言ふは、前に冢間に在りて、死尸を觀察して、道を得て事辦ず、故に冢間を捨てて樹下に來り至る。又前には冢間にして、死尸の相を取る、然も彼こには多く哭泣等の聲ありて、止觀を修することを妨ぐ、故に樹下に來りて念を繫けて思察す。樹蔭覆すること半舍に同じ、身を安んじ道を修すべし、故に樹下にあり。又佛賢聖の道を得、果を證することも、多くはみな樹に依れり、故に樹下に在る。

露地坐とは、樹下は陰濕にして、久しく居れば患^{やまひ}を致す、故に露地に至る。又樹上には多く鳥雀ありて、音聲鬧亂して、定意を修することを妨ぐ、故に露地にあり。又行者久しく樹下に在れば、樹に着する心生ず、或はまた此れは好、彼れは惡と分別す、是の患^{やまひ}を除かんが爲の故に、須らく樹を捨てて露地に來り至るべし。明了に顯現して、爲す所無礙なり、故に露地に在る。又露地は月光明かに照して、心想明淨なるを以て、定に入り易し、故に露地に在る。

常坐とは、四威儀の中に、行立は太だ苦み、臥は則ち太だ樂なり、坐は二邊を離れて長久に堪能なり、故に須らく常坐すべし。又行立は心即ち掉動して、攝持す可きこ

と難し、臥は則ち昏沈して、睡眠の中に入る、坐は沈掉を離る、故に須らく常坐すべし。又道を求むる者、大事未だ辨せずば、諸の煩惱の賊常に人の便を伺ふ、宜しく安臥すべからず、故に須らく常坐すべし。又坐中には多く成辨することあり、食消化し易く、氣息調和す、故に須らく恒に坐すべし。隨坐と言ふは、草のある地に隨ひて、處を得て便ち坐す、故に隨坐と曰ふ。

隨ひて別に細しく分てば、此の十六あり。經論此れに就きて、隱顯合して十二を宣說せり。四分律に依らば、衣の中に二を立て、食の中に四を立て、處の中に六を立つ、合して十二とす。衣の中の二とは、一には着納衣、二には着三衣なり、餘はみな論せず。食の中の四とは、一には乞食、二には不作餘食法食、三には一坐食、四には一搦食なり。次第乞食をば乞食の中に收む、言ふ所の中後不飲漿をば、一坐の中に攝む、故に別に論せず。處の六は上に同じ。十二經に依らば、衣の中に三を立て、食の中に三を立て、處の中に六を立て、合して十二とす。衣の中の三とは、一には着糞掃衣、二には着毳衣、三には着三衣なり、餘はみな論せず。食の中の三とは、謂はゆる乞食と一坐と一搦となり、餘はみな説かず。次第乞食の中に、不作餘食法食を收め、及び

(二)十二經 佛說
十二頭陀經一卷
宋 求那跋陀羅譯

(二)大智度論 第
六十八卷に出づ。

中後不飲漿をば一坐の中に攝む。處の六は上の如し。(三)大智度論の十二は前とまた異なり、衣に二あり、着納衣と着三衣となり、四分律と同じ。食に五あり、一には乞食、二には次第乞食、三には一坐食、四には節量食、五には中後不飲漿なり、不作餘食法をば一坐に攝入して、更に別に立てず。處の中に五を説く、隨坐を除きて、餘は上の如し。

若し如上の所説に依りて修行する者をば、名けて淨命の人とす。若し是の如く如上の説に依ると雖も、名利を求むる者をば、亦不淨行の人と名く、亦邪命の人と導ふ、亦是佛法の中の大賊と導ふ。是の故に經に、諸鬼此の者を見て、其の脚跡を掃ふと云へり、即ち其の義なり。淨命行を説き竟る、已下は邪命不淨の行を説かん。

邪命に四種あり、一には(一)方口食、二には(二)仰口食、三には(三)遺口食、四には(四)下口食なり。十住論第二に云はく、五邪命の法とは、一には矯異、二には自ら親む、三には激動す、四には抑揚す、五には利に因りて利を求む。矯異とは、人ありて利養を貪求するが故に、若しは阿練若を作り、若しは納衣を着し、若しは常乞食し、若しは一坐食し、若しは常坐し、若しは中後に漿を飲まず、是の如く等の頭陀の行を受けて、

(一)方口食 麥勢に媚び使を四方に通じて巧言を以て活命す。
(二)仰口食 日月星宿風雨を觀察して以て衣食を求む。
(三)遺口 又は雜口に作る、呪術を學び吉凶を卜算して以て衣食を求む。
(四)下口食 田圃を種植し湯藥を合和して以て衣食を求む。

是の念を作す、他人是の行を作せば、供養恭敬を得、我れ是の行を作さば、或は亦之を得んと。利養の爲に威儀を改易するを、名けて矯異とす。二に自親とは、人ありて利養を貪りて、檀越の家に至りて語りて言はく、我が父母兄弟姉妹の如く、親むこと異なることなし、若し所須あらば、我れ能く相與へん、若し所作あらば、我れ爲に作さん、我れ遠近を計らずして能く來りて問訊せん、我れ此に住することは、正しく相爲にするのみと。供養を求めんが爲に、檀越に貪着して、能く口辭を以て人の心を牽引す。是の如き等を名けて自親とす。三に激動とは、人ありて貪罪を計らず、財物を得んと欲しては、物を得る相を作して是の如く言はん。是の鉢好し、若しは衣好し、若しは^(一)戸鈎好し、若しは^(二)尼師檀好し、若しは我れ得ば即ち能く受用せんと。又言はく、意に隨ひて能く施す、此かる人得難しと。又檀越の家に至りて、是の言を作す、汝の家の羹飯餅食は香美なり、衣服また好し、常に我れに供養せよ、我れ親舊を以て、必ず當に與へらるべしと。是の如く貪相を示現する、是れを激動と名く。四に抑揚とは、人ありて利養を貪るが故に、檀越に語りて言はく、汝は極めて慳惜にして、尙ほ父母兄弟姉妹妻子親戚にも與ふること能はず、誰れか能く汝の物を得ん者ぞと。檀

(一) 戸の字恐らくは衣の誤か。
(二) Zindana 坐具即ち坐する時用ゆる敷物。

(一) Zindana 大衣の袈裟

越愧恥して、僂仰して施與す。又餘の家に至りて、是の言を作す、汝は福得ありて人身を受け、空しからず、阿羅漢常に汝の家に出入し、汝とともに坐起し語言すと。是の念を作す、檀越是の心を生ずべし、更に餘人の我が家に入出するなし、必ず我れ是れなりと謂へと。是れを抑揚と名く。五に利に因りて利を求むとは、人ありて、衣若しは鉢、^(一)僧伽梨、若しは尼師檀等の資生の物を以て、持ちて是の人に語りて言はく、若しは王と王に等しきと及び餘の貴人と、我れに是の物を與ふと。是の念を作す、檀越或は能く心を生ぜん、彼の諸の王貴人すら尙ほ能く供養す、況や我れ與へざらんやと。是の人此の利に因りて更に餘の利を求む、故に因利求利と名くと。

「若しは諸佛菩薩の行に順ふ」とは、行人、心を捧げて佛に示す、此の身心を以て人畜に對し、又塔に對することも人の面の如くにして、惡を造る處なければ、佛歡喜したまふが故に、佛菩薩の行に順ふと言ふ。「正真言に於て堅く信解す」とは、謂はく、此の真言智は清淨法界より流す、此の智慧力を以て、金剛の如くして動かす搖がす、堅く信解す。「淨慧力を具して能く堪忍す」とは、此の身心に妄想起ることを知り、妄想休息して太虚の如くなれば、^(三)八風の過ぐる所、念を動かさるが故に、慧力能く堪

(三) 八風 利衰毀譽稱譏苦樂なり。

恐すと言ふ。「精進して諸世間を求めず」とは、名利を弃捨すること涕唾の如く、心に廻顧すること莫きこと、爛尸の如く、直に悉地を求めて頭燃を救ふが如くす、故に精進して世間を求めずと言ふ。「常に樂ひて堅固にして怯弱なし」とは、勇猛精進なること金剛の如く、隨ひて失せざること師子の如し、是を以て堅固にして怯弱ならず。「自他の現法に成就を作す」とは、他の利を得るを見ては、自ら獲るが如くし、若し自身に利を得るを見ては必ず他に與ふ、故に自他成就を作すと言ふ。「餘の天の無畏依に隨はず」とは、心を本尊に住めて、直に進みて之を修して、傍に天を讚せるを聞きても、改動せず、故に餘の天の無畏依に隨はずと言ふ。「此れを具せるを名けて良助伴とす」とは、世間出世の有らゆる善、凡聖見てみな歡喜す、故に此れを具せるは良助伴なりと言ふ。

増益守護清淨行品第二

將に此の品を釋せんとするに、四門を以て分別す。初に釋名とは、性理清淨の行を隨修し、戒を護り身を保つを守護と言ふ、修すれば必ず果を得るを増益と言ふ。二に

來意とは、前の品に説きたまふ所は清淨戒なり、此の品の所説は能護の人なり、是の故に第二に此の品來れり。三に宗趣とは、能修の行人、法力を蒙りて以て用ふるを、此の品に所宗とす。不壞の身を用て佛心に住して、自ら悟り他を悟らしむるは、此の品の所趣なり。四に文を攝すとは、此の品大いに分つに二あり、初の二偈半は當品の惣序なり、二に次於齋より以下は別釋なり。

初の惣序の中に、初の二句は前を結びて後を起す。「毎日先づ念慧に住す」とは、毎日とは、法を受くる當日初めて修して乃至成佛まで、其の中間に於て、三時に關がざるを毎日と言ふ。念慧とは師を念する慧なり。「法に依りて寢息す」とは、右脇にして臥し、右の手を枕とし、左の手は長く申べて膝の上に押し着くる即ち是れなり。「初て起る時」とは、受法の夜即ち其の後夜の明相出づる時なり。「爲障」とは、生死の流轉は三毒の煩惱を根本とす、三毒の煩惱本不生なりと悟るは、即ち是れ障を除くなり。「是夜」とは、受法以前の生死の長夜なり。「放逸所生罪」とは、根塵和合して生ずる所の罪なり。「慳慳」とは、頭燃を救ふが如く、法に依りて念誦するなり。「寂根」とは、根本は起らずと悟るなり。「具悲利益心」とは、劣慧の小乘に簡びて、大悲の勇猛を顯

す。「誓度」とは、衆生界盡きずば、我が願も休まじとなり。「法の如く澡浴す」とは、外の浴には必ず香湯水を用ふ。「或は浴せず」とは、内の浴は無身の法に達して浴す可し。二に別釋の中に十五の眞言あり、即ち是れ十五門なり。門にみな偈頌と眞言とあり。頌の中に就きて、「齋室空靜處」とは、妙山輔峰等の處の中に造作する所の、壇念誦成就の悉地の室なり。「妙華等を散す」とは、凡そ奉獻する所、各諸尊の性類及び漫荼羅位等に隨ひて、一一に善く之を分別して、當に色香味觸をして、人の心を適悦せしむべし。白黃赤の三色の中に於て、如來部の類には、當に白色を用ふべし、蓮華の眷屬には、黄色を以てせよ、金剛の眷屬には、赤色を以てせよ。復次に當に漫荼羅の方位の中の如くすべし、圓壇は白を以てし、方壇は黃を以てし、三角の壇は赤を以てし、諸の世天は赤を以てす。鉢頭摩は是れ紅蓮なり、青黃白等の水生の諸蓮は、みな通じて諸尊に獻す可し。龍樹花は彌勒世尊、此の樹の下に於て成佛したまふ。其の直に龍花と言ふは、是れ龍の中に尙ぶ所の花なり、西方には頗る其の種あり。其の計薩羅花と婆羅樹花とは、皆是れ天然にある所、此の方には無し。但し人の心に好む所、世間に以て吉祥とするは、みな供養す可し。當に一一に意に在きて、善く之を分別すべし。

採り集めて以て鬘となし、錯雜し莊嚴することをなし、或は綴り或は結ぶ、行人の感淨淳厚の心を以ての故に、則ち諸尊をして歡喜し護念せしむ。「隨置」とは、前に造る所の堂なり。「典」とは大日經なり。「當に本尊所在の方に依るべし」とは、一に云はく、前の念誦の堂の本尊の在す所の方なりと。二に云はく、十方世界、機に隨ひて方を顯す、東方の藥師、西方の阿彌陀、清涼山の文殊等の如きも亦得と。「一心に住す」とは、心を本尊に結して、目暫くも捨てざる等なり。「五輪」とは、身中の五支なり。「歸命」とは、衆生の重んずる所は、命を最珍とす、此の寶藏を用て三寶に奉獻するに、眞言印等を用ふるなり。「身口意清淨業」とは、命を捨てて尊に歸するを淨業と言ふ。眞言の中に「作禮方便」とは、「此の作禮の眞實言に由りて」とは、眞言は即ち是れ實相智なり。諸尊は實相智を以て身心とす。實相智の眞言を以て誦すれば、即ち遍く實相智の尊に至る。實相智の尊、一時に頓に眞言の禮を受く、故に即ち能く遍く十方佛を禮すと言ふ。右膝を地に着くるなり。

以下の一段は出罪方便の眞言門なり。眞言を誦すること前に同じ。實相智は自ら無罪なり、若し執せば罪あり、此の智能く無罪を解せしむ、是の故に出罪と言ふ。